# 嶺·下原II遺跡

一会計検査院安中研修所(工事検査実習施設)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 一

1 9 9 9

群馬県安中市教育委員会

# 嶺·下原II遺跡

一 会計検査院安中研修所(工事検査実習施設)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

1 9 9 9

群馬県安中市教育委員会



嶺・下原Ⅱ遺跡遠景



嶺·下原II遺跡全景

安中市は群馬県の西南部に位置し、上毛三山に囲まれた田園都市です。古くは東山道が通り、江戸時代には中山道、そして現在は国道18号が通り交通の要衝として 栄えてまいりました。

今回の発掘調査は、安中市嶺字下原に会計検査院安中研修所(工事検査実習施設)を建設するに伴うものです。

発掘調査により、7世紀後半から9世紀後半までの人々が生活した住居の跡等が発見されました。住居址からは刀子、鉄鉗、紡錘車、鉄滓などの鉄製品が多く確認されております。1990年に発掘調査を実施した隣接地の嶺・下原遺跡においても鉄製品を出土する住居址が多く、嶺・下原遺跡、嶺・下原Ⅱ遺跡の集落において小鍛冶を行っている可能性が強く考えられました。また、この近辺には東山道の推定ルートもあり、それらとの関係も注目されます。

発掘調査は、このような遺跡の様子を後世の人々に伝えてゆくために、記録保存の措置を講じるものです。

こうした、埋蔵文化財はかけがえのない郷土の遺産であります。市民の皆様にも郷土の歴史を学習していただけるよう、生きた教材として、社会教育、学校教育の場で広く活用を図り、文化財愛護の精神を広く普及するよう努めてゆく所存であります。

終わりに、発掘調査に御協力していただいた地元の皆様や、調査に従事していただいた大勢の方々には、この場をお借りし厚く御礼を申し上げたいと思います。

平成11年2月

安中市教育委員会 教育長 山 中 誠 次

## 例 言

- 1. 本書は会計検査院が行う会計検査院安中研修所(工事検査実習施設)建設事業に伴う嶺・下原II遺跡(略称 C 15)の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2. 発掘調査は平成9年4月1日より7月11日までの間実施した。遺物整理は発掘調査終了後より平成 11年2月1日までの間断続的に実施した。
- 3. 調査主体は安中市教育委員会であり、調査は社会教育課文化財係主任千田茂雄が担当した。
- 4. 本書の編集は千田茂雄が行い、執筆は主に千田茂雄が行ったが、執筆分担は次のとおりである。 住居址観察表の作成 伊藤佳奈子

遺物観察表の作成 高橋佳子

Ⅶ-1 鬼形敦子

VII-2、3 伊藤佳奈子

VII-4 高沢周示

VII-5 千田

- 5. 遺構の写真撮影は千田が行ったが、航空写真は侚青高館に委託した。
- 6. 遺構の実測は千田、氏家芳子、稲葉恵美子、須藤明子、伊藤、鬼形が行った。
- 7. 基準点の国家座標への取付は、㈱大成測量に委託した。
- 8. 遺物の写真撮影は、小川忠博氏に委託して行った。
- 9. 遺物のX線写真は側群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託して行った。
- 10. 遺物の実測及び遺構・遺物のトレースは千田、氏家、稲葉、須藤、伊藤、鬼形、庭山美子、高橋が行った。遺物の拓本は須藤、庭山、高橋が行った。
- 11. 図版、写真図版の作成は千田、稲葉、須藤、庭山、高橋、高沢、伊藤、鬼形が行った。
- 12. 本調査における記録、出土遺物は安中市教育委員会が保管している。
- 13. 発掘調査及び遺物整理の期間中多くの方々に有益な指導、助言、協力を行っていただいた。また発掘調査及び遺物整理に従事していただいた方に厚くお礼申し上げます。(敬称略・50音順) 飯田陽一 神谷佳明 木津博明 桜岡正信 佐藤元彦 外山政子 西田正規 右島和夫

# 凡例

- 1. 遺跡全体図の縮尺は1/250である。
- 2. 住居址等遺構の縮尺は1/80である。
- 3. 遺物の縮尺は次のとおりである。

土器 1/4 鉄製品 1/2

4. 土層説明中での記号、略称は次の通りである。

色調<:より明るい方向を示す(例1<2:1より2の方が明るい)

しまり、粘性 ◎:あり、○:ややあり、△:あまりない、×:なし

混入物 ◎:大量、○:多量、△:少量、\*:若干、×:なし

WP:白色粒子、YP:板鼻黄色軽石層、RP:ローム粒子

- 6. 住居址実測図の○は16分割のポイントを示す。
- 7. 遺物観察表中の器形・技術等の特徴中の●は、須恵器蓋のつまみ貼付外周部分にヘラまたは竹管状の工具による押さえ痕を有するものを示す。
- 8. 遺物観察表中の胎土中のA、B、Cは、秋間産の須恵器の特徴である胎土中への黒色粒子の混入率を示す。A:少量 B:中量 C:多量

# 本文目次

序			
例		音	
凡		例	
本	文 目	目 次	
挿	図目	目 次	
表	目	次	
図	版目	目 次	
I	調査	査に至る経過	1
II	調査	査の方法と経過	1
III	遺跡	跡の地理的・歴史的環境	2
IV	層	序·····	6
V	遺跡	跡の概要	9
VI		構と遺物	
VII	成果	果と問題点	·····78
	1 篠	嶺・下原Ⅱ遺跡における土器群の変遷について	·····78
	2 古	古墳時代~奈良・平安時代の住居構造について	86
,		集落の変遷	
	4	鉄製品について	93
	5 ま	まとめ(集落規模の拡大と鉄製品)	118

# 挿図目次

第1図	嶺・下原Ⅱ遺跡と周辺遺跡位置図 3	第36図	H-13号住居址・出土遺物実測図(2)⋯59
第2図	嶺・下原Ⅱ遺跡位置図4	第37図	H-13号住居址·出土遺物実測図(3)…60
第3図	嶺・下原Ⅱ遺跡調査区設定図5	第38図	井戸・竪穴状遺構、
第4図	基本層序柱状図6		T-1号掘立柱建物址実測図······65
第5図	嶺・下原Ⅱ遺跡全体図7	第39図	T-2号掘立柱建物址、
第6図	$\mathrm{H}-1$ 号住居址実測図 $\cdots\cdots$ 11		柱穴列 1 • 2 実測図66
第7図	$\mathrm{H}-2$ 号住居址実測図 $\cdots\cdots$ 11	第40図	T-3号掘立柱建物址実測図67
第8図	$\mathrm{H}-1$ 号住居址・出土遺物実測図 $12$	第41図	B区・D-1出土の遺物68
第9図	$\mathrm{H}-2$ 号住居址・出土遺物実測図 $12$	第42図	B区・D-2出土の遺物68
第10図	H-3号住居址実測図·····14	第43図	B区・P-20出土の遺物68
第11図	H — 4 号住居址実測図14	第44図	B区・井戸出土の遺物68
第12図	H-3号住居址·出土遺物実測図(1)…15	第45図	A区グリット出土の遺物68
第13図	H-3号住居址·出土遺物実測図(2)…16	第46図	B区グリット出土の遺物(1)69
第14図	H-4号住居址·出土遺物実測図17	第47図	B区グリット出土の遺物(2)70
第15図	H — 5 号住居址実測図······22	第48図	住居址16分割遺物出土状況(1)75
第16図	H — 6 号住居址実測図······22	第49図	住居址16分割遺物出土状況(2)76
第17図	H-5号住居址·出土遺物実測図23	第50図	グリット出土遺物状況・・・・・・77
第18図	H-6号住居址·出土遺物実測図24	第51図	嶺・下原Ⅱ遺跡出土土器の変遷(1)82
第19図	H ─ 7 • 8 号住居址実測図······29	第52図	嶺・下原Ⅱ遺跡出土土器の変遷(2)84
第20図	H-7号住居址·出土遺物実測図30	第53図	形態別・時間別住居計測值87
第21図	H — 8 号住居址・出土遺物実測図(1)…31	第54図	推定される鋼の製造法94
第22図	H-9号住居址実測図·····35	第55図	櫓天秤吹子の構造95
第23図	H — 8 号住居址・出土遺物実測図(2)…36	第56図	床釣り横断面図95
第24図	H — 9 号住居址·出土遺物実測図(1)…36	第57図	釘の法量97
第25図	H — 9 号住居址・出土遺物実測図(2)…37	第58図	刀子の法量97
第26図	H-10号住居址実測図······41	第59図	鏃各部の名称98
第27図	H-10号住居址·出土遺物実測図(1)…42	第60図	鉄鏃分類要素図99
第28図	H-10号住居址·出土遺物実測図(2)…43	第61図	鎌の分類100
第29図	H-11·12号住居址実測図······46	第62図	紡錘車の法量101
第30図	H—11号住居址·出土遺物実測図(1)…47	第63図	鉄斧の法量101
第31図	H─11号住居址・出土遺物実測図(2)…48	第64図	鋤・鍬の法量102
第32図	H─12号住居址・出土遺物実測図(1)…49	第65図	鉄鉗・鋏の法量102
第33図	H─12号住居址・出土遺物実測図(2)…50	第66図	嶺・下原Ⅱ遺跡器種別総数105
第34図	H—13号住居址実測図······57	第67図	鉄器集成(1)107
第35図	H-13号住居址・出土遺物実測図(1)…58	第68図	鉄器集成(2)109

第69図	鉄器集成(3)111	第73図	鉄器の個数と比率116
第70図	鉄器集成(4)113	第74図	各遺跡の鉄器出土総数117
第71図	鉄器集成(5)114	第75図	時期別全体図121
第72図	時期出土数116		
	表	1 次	
第1表	嶺・下原 II 遺跡遺物観察表(1)······13	第21表	嶺·下原Ⅱ遺跡遺物観察表(21)······62
第2表	嶺·下原Ⅱ遺跡遺物観察表(2)·····18	第22表	衞・下原Ⅱ遺跡遺物観察表(22)······63
第3表	嶺·下原Ⅱ遺跡遺物観察表(3)······19	第23表	嶺・下原Ⅱ遺跡遺物観察表(②)・・・・・・64
第4表	嶺・下原Ⅱ遺跡遺物観察表(4)20	第24表	嶺・下原Ⅱ遺跡遺物観察表⑵⋯⋯71
第5表	嶺·下原Ⅱ遺跡遺物観察表(5)·····25	第25表	嶺・下原Ⅱ遺跡遺物観察表(幻)72
第6表	嶺・下原Ⅱ遺跡遺物観察表(6)26	第26表	嶺・下原 II 遺跡遺物観察表(26)······73
第7表	嶺・下原Ⅱ遺跡遺物観察表(7)27	第27表	嶺・下原Ⅱ遺跡遺物観察表(幻)74
第8表	嶺・下原Ⅱ遺跡遺物観察表(8)32	第28表	土器段階変遷による
第9表	嶺·下原Ⅱ遺跡遺物観察表(9)······33		住居址の存続時期90
第10表	嶺·下原Ⅱ遺跡遺物観察表(II)······34	第29表	住居形態と時期の対応90
第11表	嶺·下原Ⅱ遺跡遺物観察表(II)·····38	第30表	古代鉄生産の変遷93
第12表	嶺·下原II遺跡遺物観察表(12)······39	第31表	嶺・下原遺跡鉄器出土位置と
第13表	嶺·下原Ⅱ遺跡遺物観察表(l3)······44		点数104
第14表	嶺・下原Ⅱ遺跡遺物観察表(14)45	第32表	嶺・下原Ⅱ遺跡鉄器出土位置と
第15表	嶺·下原Ⅱ遺跡遺物観察表(L5)·····51		点数105
第16表	嶺·下原II遺跡遺物観察表(lb)······52	第33表	観察表(1)108
第17表	嶺·下原II遺跡遺物観察表(I7)······53	第34表	観察表(2)110
第18表	嶺·下原Ⅱ遺跡遺物観察表(I8)·····54	第35表	観察表(3)112
第19表	嶺・下原Ⅱ遺跡遺物観察表(19)⋯⋯⋯55	第36表	観察表(4)115
第20表	嶺・下原Ⅱ遺跡遺物観察表(20)⋯⋯⋯61	第37表	<b>鉄器器種別総数117</b>
	- H-	<b>—</b> •	
	凶 版	目次	
図版 1	嶺・下原II遺跡遠景	図版 6	H-10・11・12・13号住居址・井戸
図版 2	嶺・下原II遺跡全景	図版 7	H-1・2号住居址出土遺物
図版 3	嶺·下原II遺跡B区全景	図版 8	H-3号住居址出土遺物
図版 4	嶺·下原II遺跡A区全景	図版 9	H-3・4号住居址出土遺物
図版 5	H-1·2·3·4·5·6·8·9号	図版10	H-4・5号住居址出土遺物
	住居址	図版11	H-5・6号住居址出土遺物

H-6号住居址出土遺物	図版21	H-12号住居址出土遺物
H-7号住居址出土遺物	図版22	H-12·13号住居址出土遺物
H-7 · 8 号住居址出土遺物	図版23	H-13号住居址出土遺物
H-8・9号住居址出土遺物	図版24	H-13号住居址出土遺物
H−9・10号住居址出土遺物	図版25	土坑・ピット・グリット出土遺物
H-10号住居址出土遺物	図版26	鉄製品 X 線写真(1)
H-10·11号住居址出土遺物	図版27	鉄製品 X 線写真(2)
H-11号住居址出土遺物	図版28	鉄製品 X 線写真(3)
H-11·12号住居址出土遺物	図版29	鉄製品X線写真(4)
	H-6号住居址出土遺物 H-7号住居址出土遺物 H-7・8号住居址出土遺物 H-8・9号住居址出土遺物 H-9・10号住居址出土遺物 H-10号住居址出土遺物 H-10・11号住居址出土遺物 H-11号住居址出土遺物 H-11号住居址出土遺物	H-7号住居址出土遺物図版22H-7・8号住居址出土遺物図版23H-8・9号住居址出土遺物図版24H-9・10号住居址出土遺物図版25H-10号住居址出土遺物図版26H-10・11号住居址出土遺物図版27H-11号住居址出土遺物図版28

### I 調査に至る経過

平成6年6月、会計検査院より安中市教育委員会へ、会計検査院安中研修所の西側隣接地に工事検査 実習施設を建設するにあたり埋蔵文化財の取扱いについての打診があった。その後、平成8年起業者と なる会計検査院事務総長官房会計課、会計検査院安中研修所と安中市企画課、安中市教育委員会の間で 数回にわたり協議が行われた。該当地域は平成2年に会計検査院安中研修所建設に伴い発掘調査を実施 し、古墳時代から平安時代にかけての集落を確認した嶺・下原遺跡の西側隣接地である。嶺・下原遺跡 の調査結果を見ると集落が西側に広がっていることが予測されるため、設計及び計画自体の変更も含め て協議を行った。しかし、起業者である会計検査院の計画を変更することは極めて難しいとの事であり、 遺跡地を回避することができないため、発掘調査を実施して記録保存の措置を講ずることとなった。

## II 調査の方法と経過

発掘調査は平成9年4月1日より開始され、平成9年7月11日までの間実施した。調査は造成によって切り土が行われ埋蔵文化財に影響が及ぶと推測される部分と、研修棟が建設される部分について記録保存の措置を講ずる事とした。

調査はまず、開発地区全域を網羅するようグリッドの設定を行った。グリッドは嶺・下原遺跡調査時のものと対応できるよう設定した。 1 グリッドは4 m× 4 mで北西隅を基点とし、北から南へA,B,C…西から東へ1、2、3…と呼称するようにした。また、グリッドをさらに四分した2 m× 2 mの細グリッドを設定し、北西、北東、南西、南東の順にアルファベットの小文字でa、b、c、dと呼称することにした。そして、座標値は国家座標に取り付けた。国家座標値は、A区B-1 グリッドがX=35961.269、Y=-87951.854、B区D-2 グリッドがX=35831.610、Y=-87939.668である。

調査はまずバックホーによりIV層(暗褐色土)上面まで掘削し、その後人力により遺構、遺物の確認作業を実施した。また確認された遺構は順次精査を行った。確認された遺構は侚青高館に委託し、気球により空中から写真撮影を行い、そのプリントを元にデジタルコピーにより左右のひずみを補正し、それを元に現地で細部の確認を行うと言った方法で作成した。土層断面図は必要に応じ作成した。また、遺物の取り上げは土坑、ピットについては遺構毎に行い、住居址についてはセクションのラインを基準に16に分割し、各層位ごとに取り上げた。

この他遺構以外の部分については細グリッドで層位毎に取り上げた。また、必要に応じて、遺構、遺物の写真撮影を行った。

遺物整理は、発掘調査終了後から平成11年2月1日までの間断続的に実施した。

作業は、遺物の水洗・注記→接合・復元→実測・拓本→トレース・写真撮影の順で行い、並行して遺 構図面の整理・素図作成、トレース、写真整理を行った。

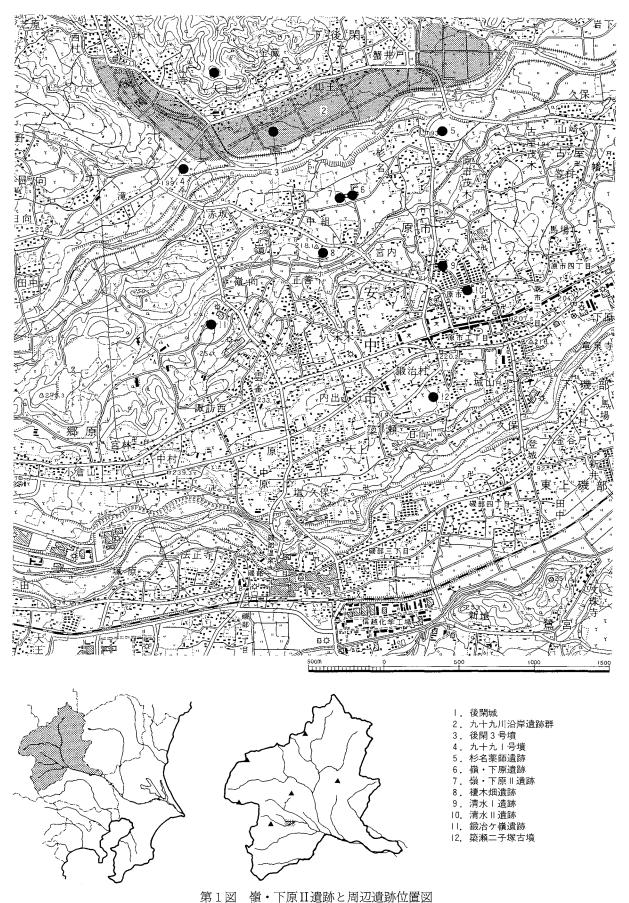
## III 遺跡の地理的・歴史的環境

安中市は群馬県の西部に位置し、市域を東西に分断するように碓氷川が流れている。この碓氷川の北側には九十九川が流れ、これらの河川流域には河岸段丘が発達している。

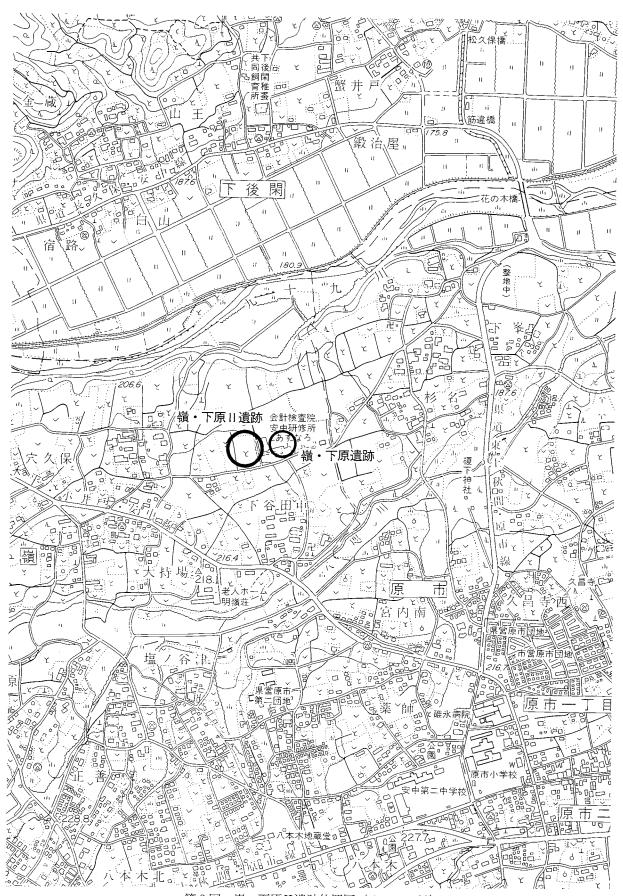
嶺・下原II遺跡は、この安中市の嶺地区字下原地内に所在している。嶺地区は安中市の中央からやや西寄りに位置し、九十九川と八咫川に挟まれた九十九川上位段丘上に位置する。九十九川と八咫川との間には小さな谷が入っていて、この丘陵を二分している。嶺・下原II遺跡はこの谷の北側、丘陵中央から北東よりに位置する。周辺は緩い南東傾斜で、本遺跡は東に隣接する嶺・下原遺跡(6)を含め古墳時代から平安時代にかけての集落遺跡として捉えることができる。

次に本遺跡を中心に嶺地区及び周辺の遺跡を概観すると、縄文時代前期後半から中期及び奈良・平安時代の集落遺跡である榎木畑遺跡(8)、縄文時代前期前半、奈良時代の住居址を確認した清水 I 遺跡(9)、縄文時代前期、中期、平安時代の住居址及び7世紀から8世紀の官的な性格のものと考えられる掘建柱状建物址を確認した鍛冶ヶ嶺遺跡(11)、弥生時代、古墳時代の集落遺跡である杉名薬師遺跡(5)、奈良時代の集落と、東日本に於いて初めて検出された中世(16世紀)の瓦質陶器生産窯の清水 II 遺跡(10)等がある。また、これらの遺跡が立地する丘陵を九十九川に下ると河川敷には九十九川沿岸遺跡群(2)として調査された平安時代のB直下水田址が広い範囲で確認されている。この九十九川沿岸遺跡群中には、6世紀初めに造られたと思われる後閑3号墳(3)がある。この古墳は、関東地方では最も古い横穴式石室を有する古墳の一つとして知られる、簗瀬二子塚古墳(12)と密接な関係があったと考えられている。

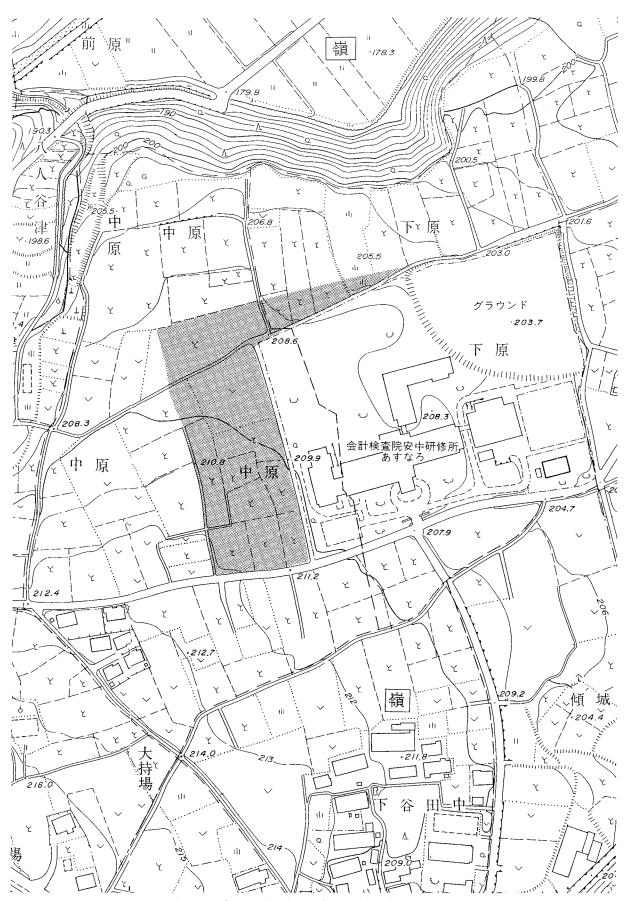
この他、九十九川上位段丘上には、発掘調査によって確認された遺跡以外にも、遺跡詳細分布調査によって縄文時代から平安時代にかけて、幾つもの遺跡が確認されている。



四 原 一///11/2007 已月之2007 正直



第2図 嶺·下原II遺跡位置図 (1:10,000)



第3図 嶺·下原II遺跡調査区設定図(1:2,500)

# IV 層 序

嶺・下原II遺跡の基本層序は第4図のとおりである。指標テフラは浅間A軽石(As-A:1783年降下)、 浅間B軽石(As-B:1108年降下)が確認される。浅間B軽石は全域に確認されたが、浅間A軽石は耕作 によりほとんど除去されており、調査区内に部分的に確認される。

I a 層 黒褐色土層 浅間A軽石を多量に混入する。現在の耕作土で、しまり、粘性共にあまりない

Ib層 灰白色軽石層 浅間A軽石純層。部分的に確認できる。

 $II\ a\ eta$  黒色土層 粘性はややあるが、しまりはあまりない。 $As\ B$  軽石を多量に混入する。

II b 層 灰褐色軽石層 浅間 B 軽石純層。全域で 5~15cm前後堆積している。

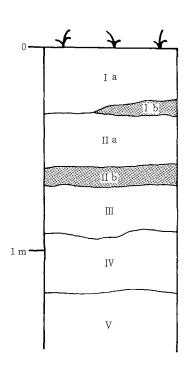
III層 黒色土層 As-B 軽石はまったく混入しない。古墳時代から奈良・平安時代の遺構の覆

土の主体を成す層である。粘性はややあるが、しまりはあまりない。

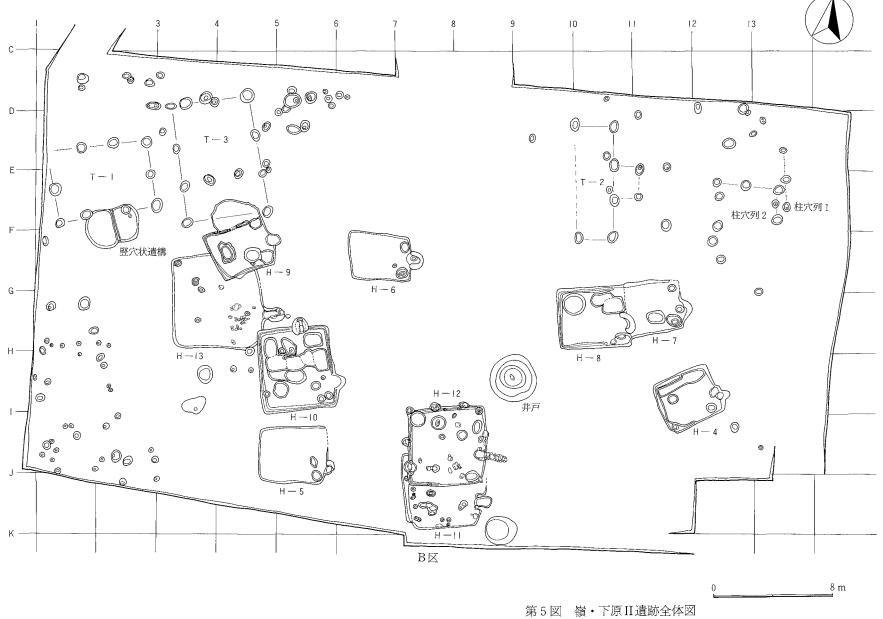
IV層 暗褐色土層 III層より明るく、しまり、粘性共にある。この層の上面で遺構が確認され

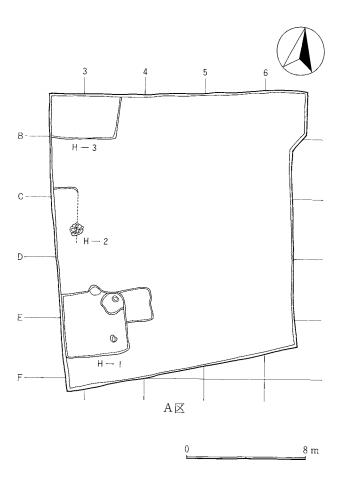
る。

V層 黄褐色粘質土層 この層からローム層となる。粘性、しまり共にある。



第4図 基本層序柱状図





### V 遺跡の概要

嶺・下原Ⅱ遺跡は、7世紀後半から10世紀前半にかけての集落遺跡である。

7世紀後半から8世紀初頭に属する竪穴式住居址が2軒、8世紀前半に属する竪穴式住居址が4軒、8世紀中半から後半に属する竪穴式住居址が4軒、9世紀中半から後半に属する竪穴式住居址が4軒、時期不明の竪穴式住居址1軒を含め13軒の竪穴式住居址を確認した。竪穴住居址以外には、掘建柱状建物址3基、柱穴列2条、土坑2基、井戸1基、ピット数十基を確認した。掘建柱状建物址は柱穴内などから遺物の出土は無かったが、柱穴内の覆土や主軸方向、集落内の配置などから見て、竪穴住居址数の増加する8世紀から9世紀に供伴するものと考えられる。

嶺・下原II遺跡は、前記したように嶺・下原遺跡を含めた古墳時代から平安時代にかけての集落遺跡であり、両遺跡を含めると竪穴式住居址41軒、掘建柱建物址11基を数える。竪穴式住居址同士の重複関係は3例見られるだけで、整然と遺構が配置されている状況を見ることができる。竪穴式住居址の時期毎の変遷を見ると、8世紀から9世紀にかけて住居址数のピークを迎えている。この時期の住居址からは、両遺跡ともに鉄製の出土が多いと言う特徴が見られる。嶺・下原II遺跡の住居址からは、鉄鉗や砥石など小鍛冶を推測させる遺物が検出されている。各時期毎の竪穴式住居址の配置や特徴、鉄製品などについてはVII章の成果と問題点に於いて詳しく触れたいと思う。

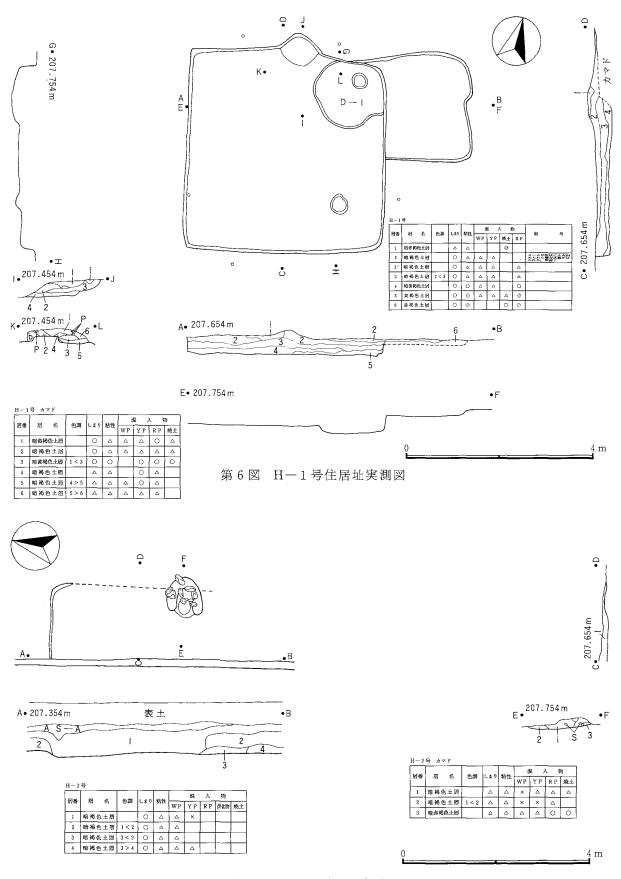
なお、嶺・下原II遺跡の新たな資料の追加によって、嶺・下原遺跡に於いて見た遺跡概要について変更をしなければいけない部分も出てきた。今回の調査結果を合わせ見ることにより、嶺・下原遺跡、嶺・下原II遺跡に広がる集落のより明確な全体像が見えてきたように思われる。

# VI 遺構と遺物

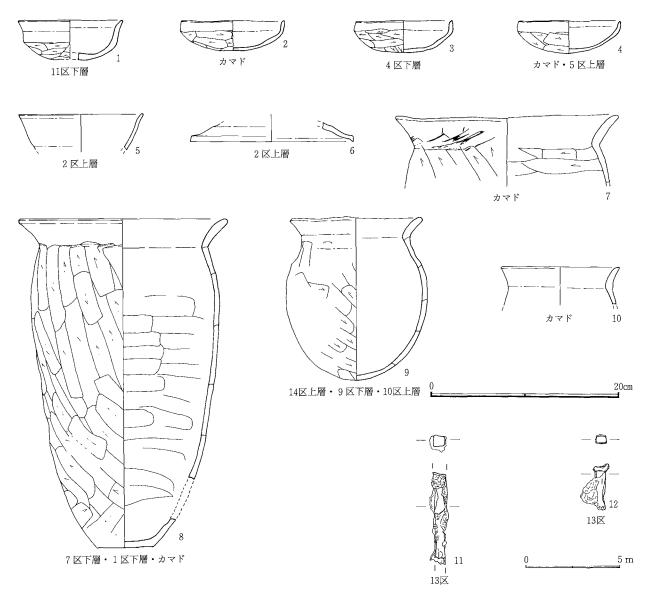
住 居 址	規 模 (m) 主 軸
H-1号	4.3×4.4 N—15°—W
住居構造	平面形はほぼ正方形であり、掘り込みは確認面から約32cm。ピットを2基確認したが、掘り込みが浅く、住居に伴う柱穴と明確に判断できるものではなかった。住居址北東隅には、貯蔵穴を思わせる掘り込みも確認したが、ピット同様掘り込みが浅く、明確に貯蔵穴といえるものではなかった。
カマド構造	住居址北壁やや南寄りに設けられる。袖などの部分は確認することができなかった。
遺物出土状況	多くの遺物が検出された。上層・下層共に土師器の破片が多く、特にカマド付近に土師 器甕の出土が顕著である。下層では南西部に土師器甕が多く検出されている。須恵器は カマド付近に坏・蓋が少量出土した。また、南西部からは鉄製品、礫が検出された。

住 居 址	規模(m)	主 軸					
H-2号	_	N−79°−E					
住 居 構 造		が確認されたが掘り込み みは確認面から約10cm。	*が浅く、また大半が調査区外のため平面形				
カマド構造	住居址東壁部分に設	住居址東壁部分に設けられており、ローム混じりの褐色土及び礫で構築されている。					
遺物出土状況	全体から土器破片を	<b>倹出しているが、特に</b> な	マドから土師器甕の検出が顕著である。				

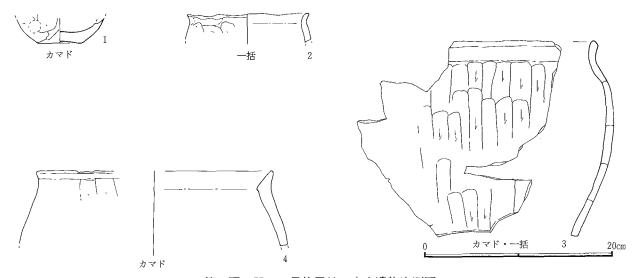
住 居 址	規 模 (m) 主 軸
H-3号	
住居構造	平面形は住居址北側、西側が調査区外のため確認できず不明。掘り込みは確認面から約 55cm。柱穴は住居址内外共に確認されなかった。
カマド構造	
遺物出土状況	比較的多くの遺物が検出された。上層、下層共に住居址西部から多く出土している。住居址全体から礫が出土しているが上層では南部、下層では北部に集中する。また、北西部床面直上から須恵器高台付椀がほぼ完形で出土した。鉄製品では刀子など数点が検出された。No.25の刀子は柄の部分に木質が残存し、この木質と柄との滑り止めと思われる繊維紐が柄の部分に巻かれている。



第7図 H-2号住居址実測図



第8図 H-1号住居址·出土遺物実測図



第9図 H-2号住居址·出土遺物実測図

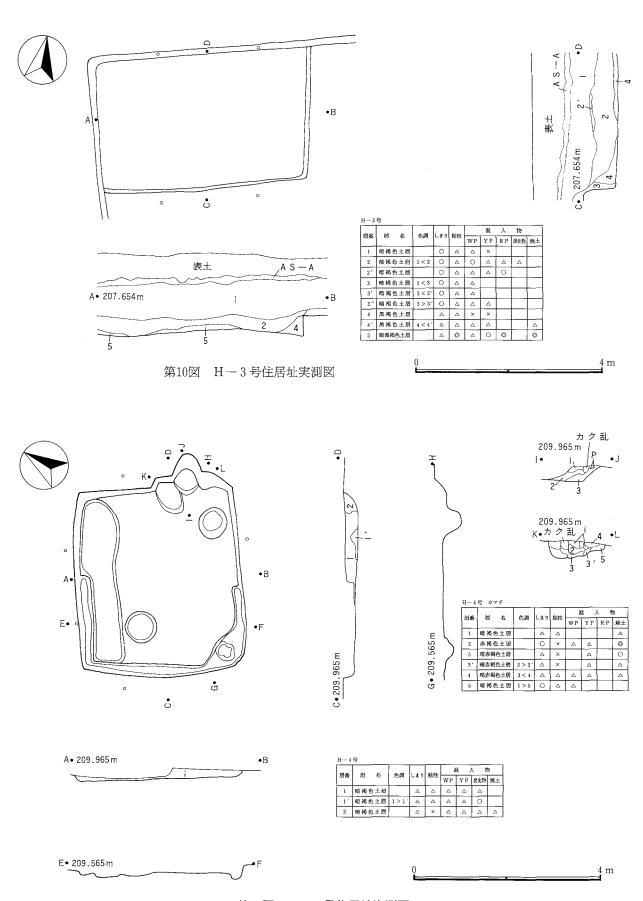
#### H-1号住

No.	岩	景 種	Î	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
1	土	師坏	器	11区下層	口 11.0 底 — 高 4.2	外面口辺部横ナデ 体底部不定方 向へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 にぶい黄橙色 焼 良	1/5
2	土	師坏	器	カマド	口 11.0 底 — 高 3.2	外面口辺部横ナデ 体底部不定方 向へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 にぶい赤褐色 焼 良	1/2
3	土	師坏	器	D-1 4区下層	口 10.2 底 一 高 3.4	外面口辺部横ナデ 体底部不定方 向へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 にぶい赤褐色 焼 良	ほぼ完形
4	土	師坏	器	カマド 5 区上層	口 11.0 底 — 高 3.5	外面口辺部横ナデ 体底部不定方 向へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 橙色 焼 良	1/2
5	須	恵坏	器	2区上層	口 13.2 底 一 高 3.8	内外面共回転横ナデ	胎 細砂粒含む 色 灰色 焼 やや不良	口縁部〜体部の 一部
6	須	恵蓋	器	2 区上層	ロ 17.3 ツマミ — 高 2.0	内外面共回転横ナデ	胎 細砂粒含む 色 灰色 焼 やや不良	端部の一部
7	土	師甕	器	カマド	口 23.9 底 一 高 一	内外面口縁部回転横ナデ 外面頸 部〜胴上部へラ削り 内面胴上部 横方向へラナデ		破片
8	土長	師胴	器甕	カマド 7・1区 下層	口 22.0 底 6.0 高 34.8	外面口辺部横ナデ 体部縦方向体 底部斜方向へラ削り 内面口縁部 及び体部横ナデ		2/3
9	土小	師型	器甕	14・10区 上層 9 区下層	口 14.0 底 — 高 17.2	部〜底部斜方向へラ削り 内面横		1/3
10	土小	師型	器甕	カマド	口 12.7 底 — 高 —	内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 赤褐色 焼 良	口縁部〜頸部の 2/3
11	不(金		明 ')	13区下層	現存長 4.5、	幅 0.7、厚 0.6、重量 4.2		
12		釖		13区下層	現存長 2.4、	幅 0.8、厚 0.4、重量 2.5		

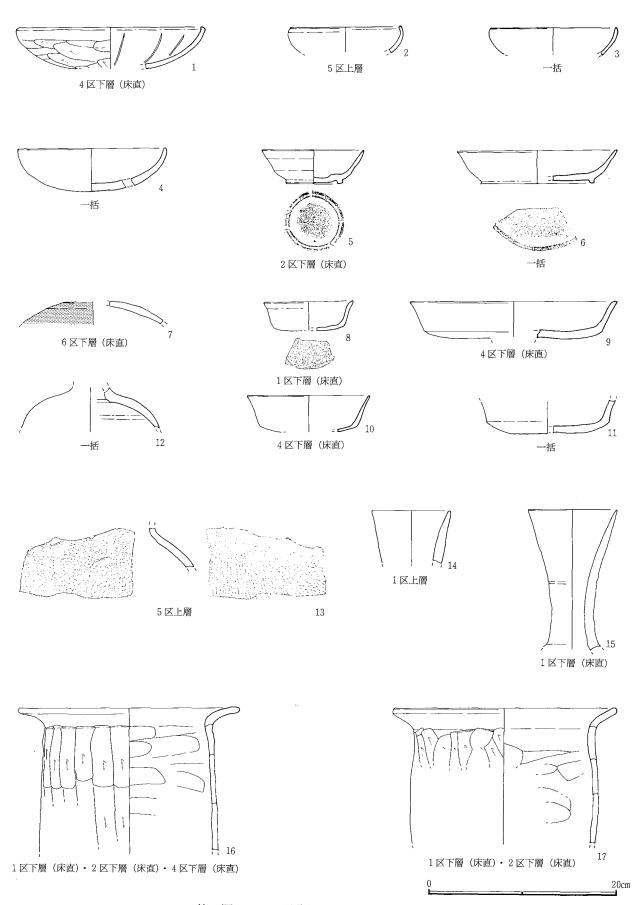
#### H-2号住

No.	器種	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
1	土 師 器	カマド	口 — 底 4.6 高 2.6	内面横ナデ 外面へラ削り	胎 砂粒含む 色 にぶい黄褐色 焼 やや不良	底部のみ 内外 面スス付着
2	土 師 器小 型 甕	一括	口 13.0 底 一 高 3.0	内外面口縁部指先ナデ 外面胴上 部不定方向ヘラ削り	胎 砂粒含む 色 にぶい黄褐色 焼 良	口縁部〜胴上部の一部
3	土 師 器	カマド 一括	口 — 底 — 高 20.6	外面口辺部横ナデ 胴部縦方向へ ラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒多量含む 色 暗褐色 焼 良	1/5
4	土 師 器	カマド	口 24.8 底 — 高 8.0	内外面口辺部横ナデ 外面胴上部 ヘラ削り 内面胴上部ヘラナデ	胎 荒砂粒含む 色 橙色 焼 やや不良	口縁部〜胴上部の一部

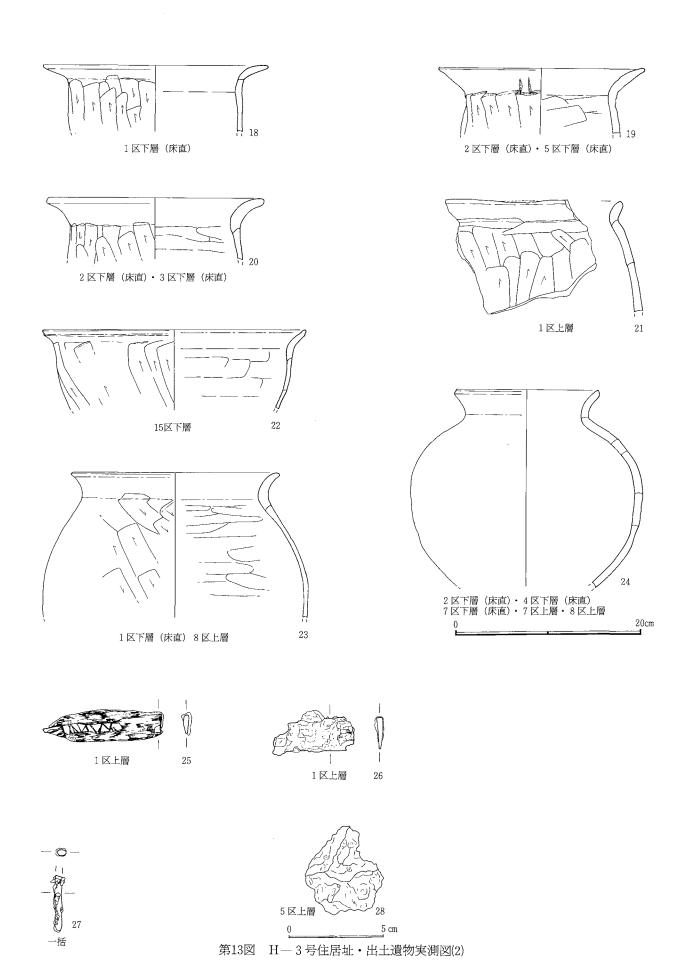
第1表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(1)

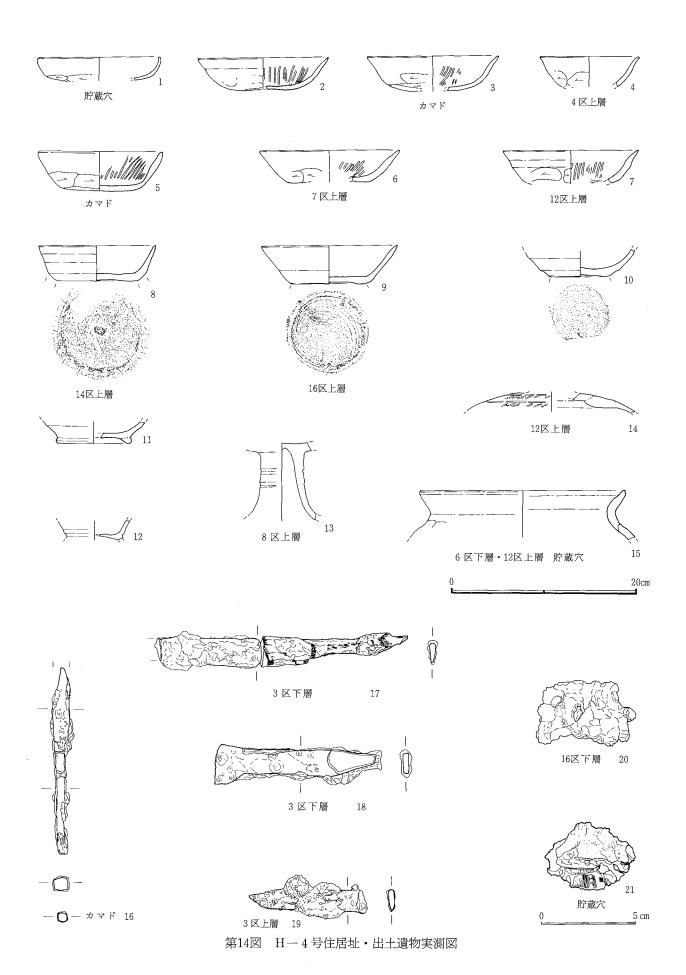


第11図 H-4号住居址実測図



第12図 H-3号住居址・出土遺物実測図(1)





#### H-3号住

No.	暑	号 種	į	出土位置	法量	t(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
1	土	師坏	器	4 区床直	口底高	20.0 — 4.4	外面口縁部横ナデ 体底部へラ削 り 内面横ナデ 磨き痕	胎 砂粒含む 色 赤褐色 焼 良	1/4
2	土	師坏	器	5 区上層	口底高	11.8 — 2.8	内面回転横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 橙色 焼 良	口縁部〜体部の 一部
3	土	師坏	器	一括	口底高	13.4 - 2.9	外面口縁部・内面回転横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 橙色 焼 良	口縁部〜体部の 一部
4	土	師坏	器	一括	口底高	15.8 — 4.6	内外面口縁部回転横ナデ 外面体 部不定方向へラ削り	胎 砂粒含む 色 橙色 焼	1/5
5		惠 台 付	器坏	2 区床直	口底高	10.3 6.0 3.6	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り後付高台	胎 砂粒含むB 色 灰色 焼 良	9/10
6	,,,	惠 台 付		一括	口底高	17.0 12.0 3.5	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り後付高台	胎 砂粒含むA 色 灰色 焼 良	1/5 外面自然灰釉付着
7		釉 陶	器壺	6 区床直	口底高		内外面胴上半部回転横ナデ	胎 砂粒含む 色 灰色(釉-緑灰) 焼 良	1/15
8	須	恵盤	器	1区床直	口底高	9.5 7.4 3.1	内外面共回転横ナデ 底部ヘラ削 り	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 やや不良	1/5
9	須高	恵	器盤	4 区床直	口底高	22.0	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 青灰色 焼 良	1/5
10	須	恵盤	器	4 区床直	口底高	13.0 10.2 3.8	内外面共回転横ナデ 底部へラ削 り	胎 砂粒含むA 色 灰色 焼 良	1/8
11	須高	恵	器盤	一括	口底高	6.5 3.4	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含むB 色 灰色 焼 良	底部と体部の一 部
12	須	恵	器	一括	口底高		内外面共回転横ナデ	胎 細砂粒含む 色 黄灰色 焼 良	破片
13	須	恵壺	器	5区上層	口底高		外面平行叩き 内面当て具痕	胎 砂粒含む 色 灰色 焼	破片
14	須	恵壺	器	1区上層	口底高	8.0 — 5.6	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含むA 色 灰色 焼 良	破片 内面自然 灰釉付着
15	須長	恵頸	器壺	1区床直	口底高	9.4 — 14.8	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含むB 色 灰色 焼 良	頸部上半のみ 1/5
16	土長	師胴	器甕	1・2・4 区床直	口底高	23.5 — 15.3	外面口辺部横ナデ 胴上部縦方向 ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒多量含む 色 暗褐色 焼 良	ロ辺部〜胴上部 の1/2

第2表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(2)

#### H-3号住

No.		- 程	É	出土位置		器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
17	土長	師胴	器甕	1 · 2 区 床直	口 23. 底 — 高 —	へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒多量含む 色 にぶい赤褐色 焼 良	口縁部1/3
18	土長	師胴	器甕	1 · 2区 床直	口 24. 底 - 高 7.	デ 外面胴部縦方向へラ削り	胎 砂粒少量含む 色 にぶい赤褐色 焼 良	口辺部〜胴部の 一部
19	土長	師胴	器甕	5 · 2区 床直	口 22. 底 — 高 —	- ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 赤褐色 焼 良	口辺部1/2
20	土長	師胴	器甕	2 · 3区 床直	口 23. 底 - 高 -	部縦方向へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 赤褐色 焼 良	口縁部〜頸部の全部
21	土	師甕	器	1区上層	口 — 底 — 高	W. L. C. STATE STA	胎 砂粒多量含む 色 にぶい黄橙色 焼 良	破片
22	土		師	15区下層	口 28. 底 - 高 -	-	胎 砂粒含む 色 にぶい橙色 焼 良	ロ辺部〜胴上部 の一部
23	土	師甕	器	8 区上層 1 区床直	口 22. 底 — 高 15.	へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒多量含む 色 赤褐色 焼 良	口縁部〜胴上部の一部
24	須	恵甕	器	7・2・4区 床直 7・8区 上層	口 15. 底 - 高 21.	部当て具痕	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 やや不良	1/2
25	刀		子	1区上層	柄部:現在	長 6.3、幅 1.0、厚 0.3 長 6.4、幅 1.8、厚 1.1 t 12.5	柄部の木質、茎部にき 維残存	巻き付けられた繊
26	刀		子	1区上層		·長 4.2、刀幅 1.7、厚 0.3 t 12.5	大部分の茎と、関かり 損関は両区	ら3 cm以降刃部欠
27	紡軸	錘	車 ?	一括	現存長 3.	)、幅 0.4、厚 0.3、重量 1.2		
28	鉄		滓	5 区上層	長 4.5、韓	4.1、重量 50.6		

#### H-4号住

11	# 1	J	_	_	_				_
No.	岩	器 種 出土位置		法量(cm)		器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考	
1	土	師坏	器	貯蔵穴	口底高	13.0	内外面共横ナデ 外面体部へラ削り	胎 細砂粒含む 色 橙色 焼 良	1/7
2	土	師坏	器		口底高	14.0 — 3.5	外面口縁部横ナデ 内面横ナデ後 ヘラ磨き	胎 砂粒少量含む 色 橙色 焼 良	1/5
3	土	師坏	器	カマド	口底高	14.0	外面口縁部横ナデ 体部横方向へ ラ削り 内面横ナデ後へラ磨き 底部不定方向へラ削り	胎 砂粒多量含む 色 橙色 焼 良	1/4

第3表 續·下原II遺跡遺物観察表(3)

H-4号住

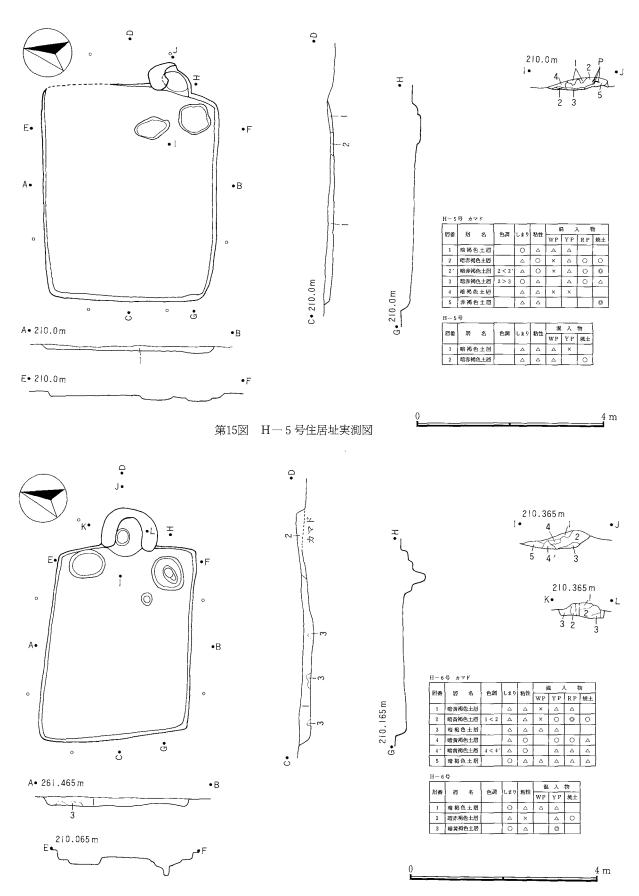
11		7 11					T	
No.		F 種	Ì	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
4	土	師坏	器	4 区上層	口 10.6 底 一 高 —	外面口縁部横ナデ 体部横方向へ ラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒多量含む 色 橙色 焼 良	1/8
5	土	師坏	器	カマド	口 13.2 底 8.7 高 4.2	外面口辺部横ナデ 体部横方向底 部不定方向へラ削り 内面横ナデ 後へラ磨き	胎 砂粒含む 色 橙色 焼 良	2/3
6	土	師坏	器	7区上層	口 14.8 底 8.8 高 —	外面口縁部横ナデ 体部横方向へ ラ削り 底部へラ削り 内面横ナ デ後へラ磨き	胎 砂粒含む 色 橙色 焼 良	1/14
7	土	師坏	器	12区上層	口 14.4 底 一 高 —	外面口縁部横ナデ 体部横方向へ ラ削り 内面横ナデ後へラ磨き	胎 細砂粒少量含む 色 にぶい橙色 焼 良	1/14
8	須	恵坏	器	14区上層	口 12.4 底 8.4 高 3.8	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り後へラ削り	胎 砂粒含むA 色 灰色 焼 良	3/4
9	須	恵坏	器	16区上層	口 14.6 底 7.8 高 4.1	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒少量含むB 色 にぶい黄褐色 焼 良	6/7 内外面自然 灰釉付着
10	須	恵坏	器		口 — 底 6.2 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 底部圧痕	胎 砂粒多量含む A 色 灰白色 焼 やや不良	1/3
11		惠 台 付	器坏	15区下層	口 — 底 7.8 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台 底部圧痕	胎 砂粒含むA 色 にぶい黄橙色 焼 やや不良	1/9 内面酸化還 元焰によるスス 吸着
12	土台	師付	器甕		口 — 底 — 高 —	内外面共横ナデ	胎 色 にぶい赤褐色 焼 良	内面スス付着
13	須高	恵	器盤	8区上層	口 — 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 細砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	脚部1/2 外面スス付着
14	須長	恵頸	器壺	12区上層	口 — 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含む B 色 灰色 焼 良	1/15
15	土	師甕	器	6 区下層 12区上層 貯蔵穴	口 22.0 底 — 高 —	外面口辺部・内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 にぶい褐色 焼 良	口辺部1/3
16		鏃		カマド	1	長 4.4、幅 0.9、厚 0.7 長 5.4、幅 0.5、厚 0.4 20.3	ほぼ完形、先端一部	欠損
17	刀		子	3区下層		重量 26.5 長 5.6、幅 1.5、厚 0.3 長 6.7、幅 0.8、厚 0.3	ほぼ完形、刃部先端 関は両区 柄部木質	
18		鏨		3区下層	現存長 18.5	、幅 1.9、厚 0.6、重量 43.5		
19	刀		子	3区下層	刀身:現存」 重量	長 6.3、幅 1.9、厚 0.3 13.7	刃部のみ残存	
20	鉄		滓	16区下層	長 5.3、幅	3.5、重量 36.4		
21	鉄		滓	貯蔵穴	長 4.7、幅	3.6、重量 17.2		

第4表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(4)

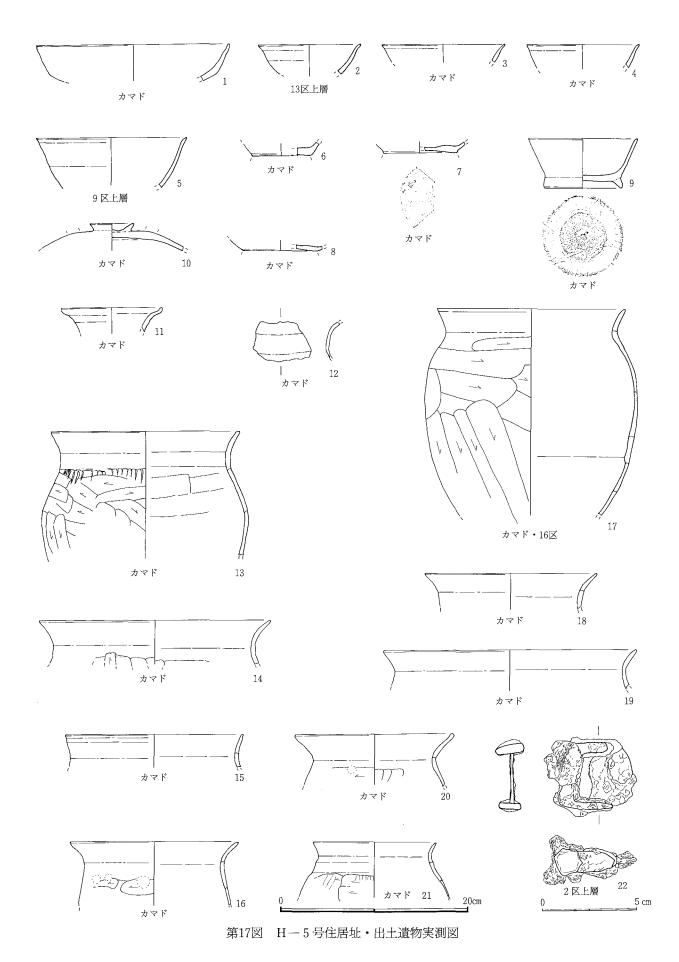
住 居 址	規模(m)	主軸	
H-4 号	3.6×4.2	N-54°-E	
住居構造	柱穴と言えるものでは 込みのしっかりとした	はない住居址北壁中央部 <sup>-</sup> こ周溝が廻っている。また	から約27cmピットは確認されたが、明確に 下から、西壁、南壁中央部下にかけて掘り た、北壁下には周溝と平行して幅の広い周 こは、貯蔵穴状の掘り込みを確認した。
カマド構造	住居址東壁南寄りに認	とけられ、褐色土で構築 で精築さ	されている。
遺物出土状況		まとまる傾向がある。カマ	主居址東部、南部に集中し、下層では遺物マドからは土師器甕、坏を多く検出した。

住 居 址	規模(m)	主軸	
H-5号	3.8×4.6	N-81°-E	
住 居 構 造		あり、掘り込みは確認面z 東隅には貯蔵穴状の浅いま	から約14cm柱穴は住居址内外共に確認され 屈り込みを確認した。
カマド構造	住居址東壁南寄りに 分は一部分天井が残る		の褐色土で構築されている。カマド北側部
遺物出土状況	カマド付近は土師器	鷹、坏、須恵器坏、蓋が	は住居址西部に集中して出土し、カマド・ 倹出された。下層は遺物が少ないが、北東 上層からバックル状金具が検出された。

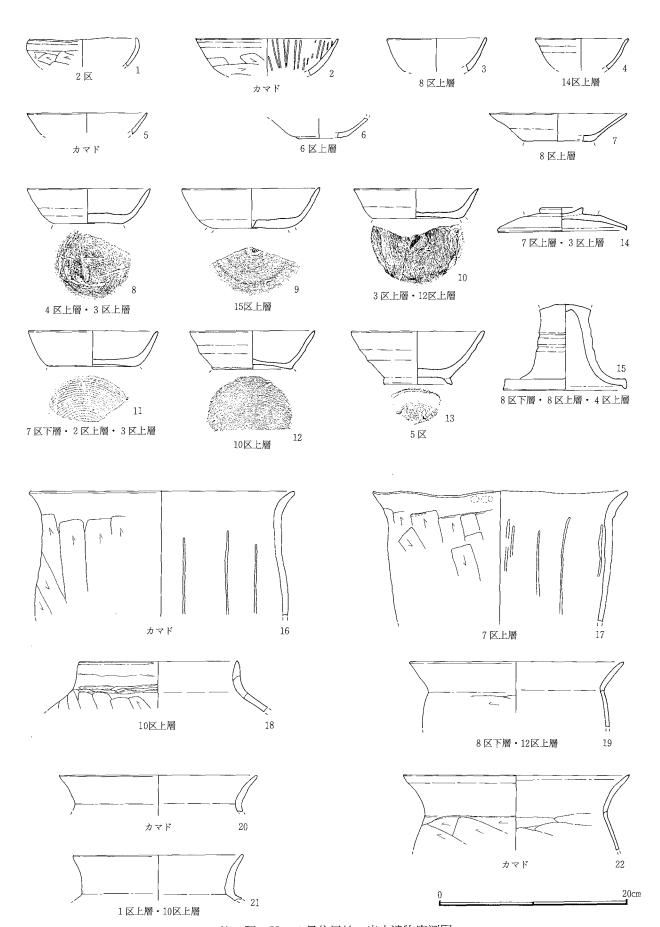
住 居 址	規 模 (m)	主軸	
H-6号	3.2×4.2	N-78°-E	
住 居 構 造			から約18cm柱穴は住居址内外共に確認され また、住居址北東隅にも貯蔵穴状の掘り
カマド構造	住居址東壁中央に設	けられ、ローム混じりの神	場色土で構築されている。
遺物出土状況	1-11-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1	7 - 7 - 7 - 7	は北東部に集中する傾向があり、下層では からは土師器甕が多く検出された。



第16図 H-6号住居址実測図



**—** 23 **—** 



第18図 H-6号住居址·出土遺物実測図

H-5号住

No.	暑			出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考		
1	土	師坏	器	カマド	口 20.4 底 一 高 —	外面口縁部・内面横ナデ	胎 細砂粒多量含む 色 にぶい黄橙色 焼 良	1/20		
2	須	恵坏	器	13区上層	口 11.0 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 細砂粒少量含C 色 灰色 焼 良	1/10		
3	須	恵坏	器	カマド	口 13.2 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 灰黄褐色 焼 良	口縁部1/5 外面酸化還元焰 によるスス吸着		
4	須	恵坏	器	カマド	口 12.0 底 一 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 細砂粒含む 色 にぶい黄橙色 焼 良	1/15 外面酸化 還元焰によるス ス吸着		
5	須	恵椀	器	9区上層	口 16.0 底 一 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 細砂粒少量含C 色 灰色 焼 良	1/15		
6	須	恵坏	器	カマド	口 — 底 6.2 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 底部圧痕	胎 砂粒少量含むA 色 灰白色 焼 良	1/9		
7	須	恵坏	器	カマド	口 — 底 8.0 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 底部圧痕	胎 砂粒含むA 色 灰白色 焼 良	底部1/4		
8	須	恵坏	器	カマド	口 — 底 8.0 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 細砂粒含む 色 灰白色 焼 やや不良	底部1/5		
9		惠 台 付	器坏	カマド	口 11.6 底 8.2 高 5.3	ラ切り後付高台 内面渦巻き	胎 砂粒少量含む B 色 灰白色 焼 良	4/5 内外面スス 少量付着		
10	須	恵蓋	器	カマド	ロ - ツマミ 4.5 髙 -	内外面共回転横ナデ 天井部へラ 切り 中央突出リング状つまみ貼 付	胎 砂粒含む 色 灰白色 焼 良	1/4		
11	須	恵壺	器	カマド	口 10.8 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含むA 色 暗灰黄色 焼 良	口辺部1/3		
12	土	師甕	器	カマド	口 — 底 — 高 —	内外面共横ナデ 頸部圧痕	胎 細砂粒多量含む 色 にぶい褐色 焼 良	破片		
13	土	師甕	器	カマド 8区下層	口 20.2 底 — 高 13.0	斜方向へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 赤褐色 焼 良	ロ辺部〜胴上部 の全部		
14	土	師甕	器	カマド	口 24.8 底 — 高 —	内外面口縁部横ナデ 外面胴上部 縦方向へラ削り	胎 細砂粒多量含む 色 にぶい赤褐色 焼 良	口縁部1/6		
15	土	節甕	器	カマド	口 19.0 底 — 高 —	外面口縁部横ナデ 体部へラ削り 内面横ナデ	胎 細砂粒多量含む 色 にぶい赤褐色 焼 良	口縁部〜頸部の 1/6		
16	土	師甕	器	カマド	口 18.0 底 — 高 —	外面口縁部横ナデ 胴上部横方向 ヘラ削り 指圧痕 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 橙色 焼 やや不良	口辺部〜頸部の 1/5		

第5表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(5)

#### H-5号住

No.	芸	界 種	Ē	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態•備考	
17	土	師甕	器	カマド 16区	口 20.0 底 — 高 22.0	内外面口辺部・内面胴部回転横ナ デ 外面頸部横方向・胴部縦方向 ヘラ削り 口辺部指圧痕	胎 砂粒少量含む 色 橙色 焼 良	1/3	
18	土	師甕	器	カマド	口 18.4 底 — 高 —	外面口縁部横ナデ 体部へラ削り 内面横ナデ	胎 細砂粒多量含む 色 赤褐色 焼 良	口縁部〜頸部の 1/5	
19	土	師甕	器	カマド	口 27.0 底 一 高 —	外面口縁部横ナデ 体部へラ削り 内面横ナデ	胎 細砂粒含む 色 明褐色 焼 良	口縁部〜頸部の 1/10	
20	土	師甕	器	カマド	口 16.8 底 一 高 —	外面口縁部横ナデ 胴上部横方向 ヘラ削り 指圧痕 内面横ナデ	胎 細砂粒多量含む 色 橙色 焼 良	口縁部〜頸部の 1/10	
21	土	師甕	器	カマド	口 13.0 底 — 高 —	外面口縁部横ナデ 胴上部横方向 ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 にぶい赤褐色 焼 良	口縁部〜頸部の 1/4 内外面スス 付着	
22	不		明	2 区上層	現存長 4、幅 4.2、厚 1.5、重量 69.9				

#### H-6号住

No.	岩	器 種 出土位置		出土位置	法量(cn	n)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態•備考
1	土	師坏	器	2区	底	1.4	内外面口辺部回転横ナデ 外面体 部不定方向へラ削り	胎 細砂粒含む 色 にぶい赤褐色 焼 良	破片 外面スス 少量付着
2	土	師坏	器	カマド	底	5.2	外面口縁部横ナデ 体部不定方向 ヘラ削り 内面横ナデ後ヘラ磨き	胎 砂粒少量含む 色 橙色 焼 良	口縁部〜体部の 1/6
3	須	恵坏	器	8区上層	口 10 底 高	0.4	内外面共回転横ナデ	胎 細砂粒含む 色 灰色 焼 良	1/4 内面口縁部 重ね焼き痕
4	須	恵坏	器	14区上層	口底高	9.8 — —	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒含むC 色 灰色 焼 良	1/7 外面自然灰釉付着
5	須	恵坏	器	カマド	口 12 底 高	2.8	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒含むA 色 灰黄色 焼 良	口縁部1/5 内外面口縁部自 然灰釉付着
6	須	惠坏	器	6区上層	口 底 。	- 4.6 -	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒少量含むA 色 灰色 焼 良	1/8
7	須	恵坏	器	8区上層	底 7	4.8 7.3 3.0	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	1/6 外面底部自然灰釉付着
8	須	恵坏	器	4・3区 上層	底 7	3.0 7.5 3.8	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後へラ削り 底部圧痕	胎 砂粒含むA 色 灰白色 焼 良	1/2
9	須	恵坏	器	15区上層	底 7	4.8 7.8 4.3	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り	胎 砂粒少量含む 色 灰白色 焼 良	1/4

第6表 嶺・下原Ⅱ遺跡遺物観察表(6)

#### H-6号住

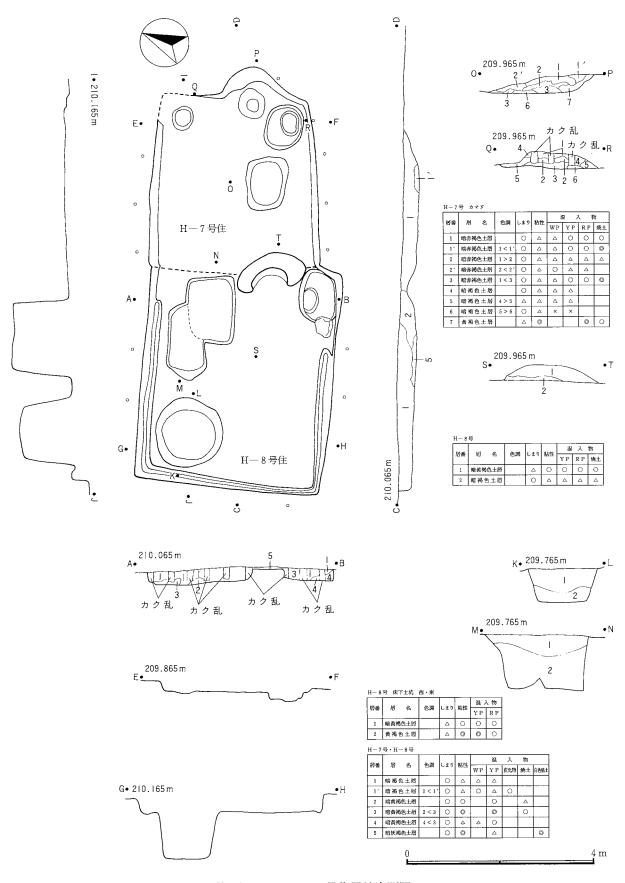
No.	岩	界 種		出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
10	須	恵坏	器	12・3区 上層	口 13.4 底 9.4 高 3.2	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り 内面渦巻き	胎 細砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	1/2
11	須	恵坏	器	7区下層 3・2区 上層	口 13.8 底 9.6 高 3.8	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒少量含む 色 にぶい黄橙色 焼 良	1/4
12	須	恵坏	器	10区上層	口 12.4 底 8.4 高 4.1	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 内面渦巻き	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	1/3
13		惠 台 付	器坏	5区	口 14.0 底 7.0 高 5.7	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台 底部圧痕	胎 砂粒少量含むA 色 灰白色 焼 良	1/4 内外面酸化 還元焰によるス ス吸着
14	須	惠蓋	器	7 · 3区 上層	ロ 13.7 ツマミ 4.7 高 2.5	外面天井部回転へラ削り 内面回 転横ナデ リング状つまみ貼付 ●	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	2/3 外面自然灰 釉付着
15	須高		器盤	8・4区 上層 8区下層	口 13.2 底 — 高 9.0	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含むA 色 褐灰色 焼 良	脚部の2/3
16	土	師甕	器	カマド	口 28.2 底 — 高 13.2	外面口辺部横ナデ 胴上部へラ削 り 内面口辺部回転横ナデ 胴上部横ナデ 縦方向へラ磨き	胎 荒砂粒含む 色 にぶい橙色 焼 良	口縁部〜胴上部 の1/5 内外面一 部スス付着
17	土	節甕	器	7区上層	口 27.0 底 — 高 13.7	内外面口辺部・内面胴部横ナデ内 面頸部〜胴上部不定方向へラ削り 縦方向へラ磨き 外面指圧痕	胎 荒砂粒含む 色 にぶい橙色 焼 良	口縁部〜胴上部 の一部 内面一 部スス付着
18	土	師甕	器	10区上層	口 17.0 底 — 高 —	外面口辺部横ナデ 胴上部斜方向 ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 にぶい赤褐色 焼 良	口縁部〜頸部の 1/3
19	土	師甕	器	12区上層 8区下層	口 23.0 底 — 高 —	外面口辺部横ナデ 胴上部横方向 ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 にぶい橙色 焼 良	口辺部の一部
20	土	甕	器	カマド	口 21.2 底 — 高 3.8	内外面共横ナデ	胎 砂粒含む 色 橙色 焼 良	破片
21	土	師甕	器	10・1区 上層	口 18.1 底 一 高 4.8	内外面口辺部横ナデ	胎 砂粒含む 色 赤褐色 焼 良	破片
22	土	師甕	器	カマド	口 24.0 底 — 高 8.0	外面口辺部横ナデ 胴上部横及び 斜方向ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 にぶい橙色 焼 良	口辺部〜胴上部 の1/2

第7表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(7)

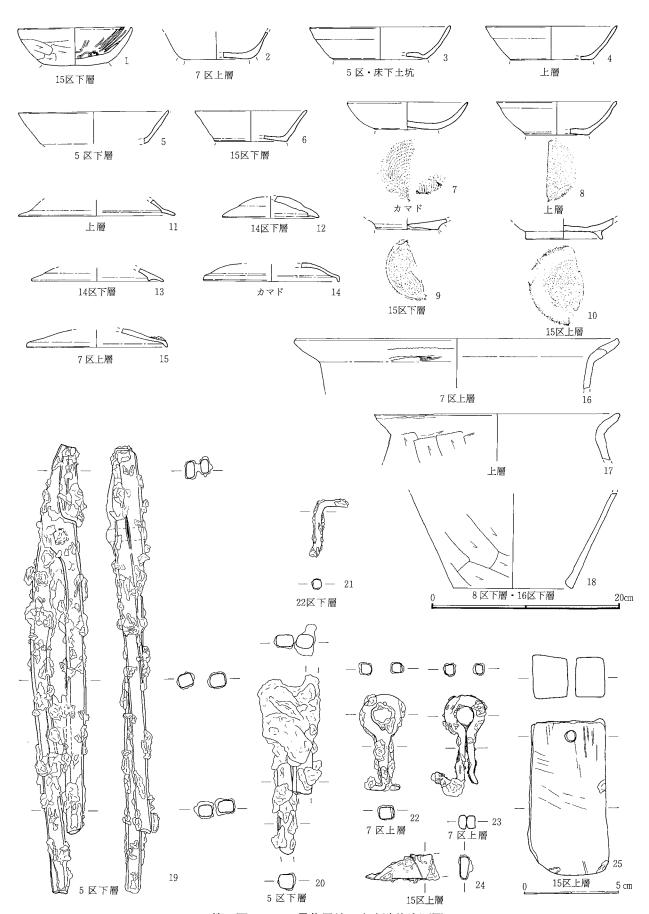
住 居 址	規模(m)	主 軸	
H-7号	3.6×3.8	N-69°-E	
住 居 構 造	住居址内外共に明確なた、住居址中央南にF	な柱穴は確認されなかった	形であり、掘り込みは確認面から約25cm。 た。住居址南東隅に貯蔵穴を確認した。ま である。
カマド構造	住居址東壁やや南より	りに設けられ、ローム混	じりの褐色土で構築されている。
遺物出土状況	部にかけて出土する個	傾向がある。カマドとその の出土は多く、鉄鉗1点、	は土師器が多く、下層では中央部から南東 の周辺からは、土師器甕、須恵器坏、礫が 、割ピン状金具 2 点等が出土した。また砥

住 居 址	規模(m)	主軸	
H-8号	4.1×4.8	N-72°-E	
住居構造	は住居址内外ともにる 居址北側に床下土坑 かりとした掘り込みる	<b>潅認されなかった。貯蔵</b>	
カマド構造	住居址東壁の南寄りに	に設けられ、ローム混じ	りの褐色土で構築されている。
遺物出土状況	下層では東部から北部	部にかけて遺物が集中す マドとその周辺からは土	は住居址中央部から北部に集中しており、 る傾向がある。また、北東部からは灰釉陶 師器甕が多く出土した。この他、下層より

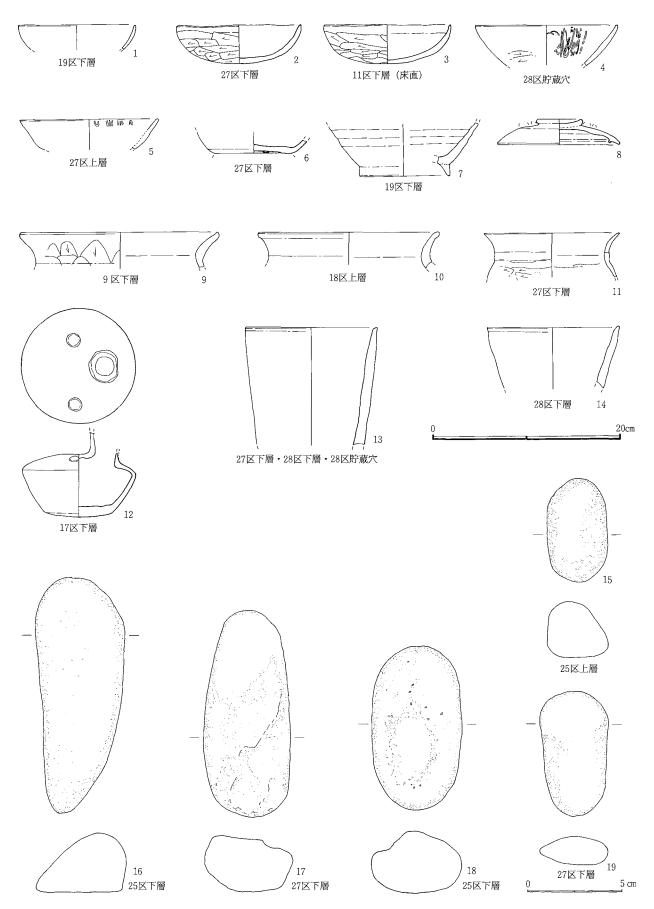
住 居 址	規模(m)	主軸				
H-9号	3.3×4.2	N-55°-E				
住居構造	面から約31cm。柱穴は住居	   址内外ともに確認   西壁、南壁下に周	平面形は縦長方形であり、掘り込みは確認されなかった。住居址東隅に貯蔵穴を確認 構が廻り住居址中央寄りに床下土坑2基を である。			
カマド構造	住居址東壁のほぼ中央に設けられ、褐色土で構築されている。					
遺物出土状況			南部に遺物が集中する傾向がある。カマド 寄りからは、鉄製の紡錘車も検出された。			



第19図 H-7・8号住居址実測図



第20図 H-7号住居址·出土遺物実測図



第21図 H-8号住居址·出土遺物実測図(1)

H-7号住

H-	- 1 4	プエ						
No.	岩	号 種	Ì	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
1	土	師坏	器	15区下層	口 12.0 底 7.0 高 4.0	外面口縁部横ナデ 体部底部ヘラ 削り 内面横ナデ後ヘラ磨き	胎 砂粒含む 色 橙色 焼 不良	1/4
2	須	恵坏	器	7区上層	口 — 底 4.0 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り	胎 細砂粒含む A 色 褐灰色 焼 良	1/8 外面自然灰釉付着
3	須	恵坏	器	5 区床下土 坑	口 15.0 底 9.8 高 3.5	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り	胎 砂粒含むB 色 灰白色 焼 良	1/5 内外面自然 灰釉付着
4	須	恵坏	器	上層	口 14.0 底 8.8 高 3.6	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り	胎 砂粒少量含むA 色 灰色 焼 良	1/6 内面自然灰釉付着
5	須	恵坏	器	5区下層	口 16.0 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含むA 色 灰黄褐色 焼 良	1/5 内外面口緣 部自然灰釉付着
6	須	恵坏	器	15区下層	口 12.0 底 7.6 高 3.3	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 底部圧痕	胎 細砂粒含む 色 褐灰色 焼 良	1/6
7	須	恵坏	器	上層カマド	口 12.8 底 6.8 高 2.9	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 底部圧痕	胎 砂粒少量含む 色 にぶい褐色 焼 やや不良	1/2
8	須	恵坏	器	上層	口 12.8 底 6.6 高 3.6	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 底部圧痕	胎 砂粒少量含む 色 灰白色 焼 やや不良	1/4 外面酸化還 元焰によるスス 吸着
9	須	恵坏	器	15区下層	口 — 底 6.6 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒含む 色 灰白色 焼 良	底部1/2
10		惠 台 付	器坏	15区上層	口 — 底 8.0 高 2.2	底部回転糸切り後付高台 内面渦 巻き	胎 砂粒含む A 色 黄灰色 焼 良	底部1/2
11	須	恵蓋	器	上層	ロ 16.8 ツマミ — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 細砂粒含む 色 灰白色 焼 良	1/10
12	須	恵蓋	器	14区下層	ロ 10.3 ツマミ — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒含む A 色 灰色 焼 良	1/4
13	須	恵蓋	器	14区下層	ロ 14.0 ツマミ — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 細砂粒含む C 色 黄灰色 焼 良	1/10 外面自然 灰釉付着
14	須	恵蓋	器	カマド	ロ 14.6 ツマミ — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 細砂粒含むA 色 灰色 焼 良	1/7
15	須	恵蓋	器	7区上層	ロ 15.0 ツマミ — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 細砂粒少量含B 色 黄灰色 焼 良	1/8 外面自然灰釉付着 窯壁融着
16	土	師甕	器	7区上層	口 17.2 底 一 高 5.2	内外面口縁部横ナデ	胎 砂粒含む 色 にぶい褐色 焼 良	口縁部1/5

第8表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(8)

# H-7号住

No.	器	- 種	f	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
17		師甕	器	上層	口 26.2 底 — 高 5.0	外面口辺部横ナデ 胴下半部へラ 削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 赤褐色 焼 良	ロ辺部と胴上半 部の一部 内面 スス付着
18	土	師甑	器	8 • 16区 下層	口 — 底 12.6 高 10.0	外面へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 黒褐色 焼 良	胴下半部1/5 外面スス付着
19	鉄		鉗	5 区下層		口先から鋲 4.8、肩幅 1.9 E厚 0.7、重量 175		
20	不		明	5区下層		9.2、幅 0.9、厚 0.6 6.3、幅 0.9、厚 0.7 5	棒状の鉄器2本付着	断面は方形
21	釘		?	22区下層	現存長 3.9、	幅 0.4、厚 0.4、重量 3.2		
22	割状	- ピ 金	ン 具	7区上層	5.1×2.1(円	形部)×0.6、重量 18.3		
23	割状	ピ 金	ン 具	7区上層	5.4×2.2 (F	9形部)×0.7、重量 15.4		
24	不		明	15区上層	現存長 3.9、	幅 2.1、厚 0.8、重量 8.1	刃部先端と思われる している	部分は鋭角を呈
25	砥		石	15区上層	長 8.2、幅	4.4、厚 2.4、重量 162		

## H-8号住

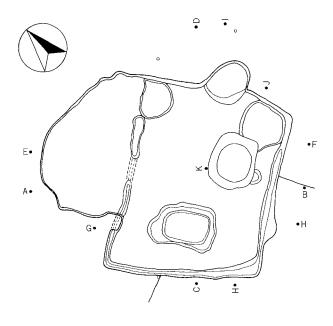
No.	暑	景 種	Ē	出土位置	法量(cm)	)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態 • 備考
1	土	師坏	器	19区下層	口 12. 底 - 高 -	.4	外面口縁部横ナデー内面横ナデ	胎 細砂粒少量含む 色 橙色 焼 良	1/12
2	土	師坏	器	27区下層 貯蔵穴	口 13. 底 高 4.		内外面共回転横ナデ 外面体底部 ヘラ削り	胎 砂粒少量含む 色 にぶい橙色 焼 良	7/8 底部スス付着
3	土	師坏	器	11区下層 (床直)	口 13. 底 - 高 4.	_	外面口辺部横ナデ 体底部不定方 向へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 橙色 焼 良	ほぼ完形
4	土	師坏	器	28区 貯蔵穴	口 15. 底 - 高 -	.2	外面口縁部横ナデ 体部へラ削り 内面横ナデ後へラ磨き	胎 細砂粒含む 色 橙色 焼 良	1/10 外面スス 付着
5	土	師坏	器	27区上層	口 14. 底 - 高 -	.8	内外面共横ナデ後ヘラ磨き	胎 砂粒少量含む 色 にぶい橙色 焼 良	1/10 外面スス 付着
6	須	恵坏	器	27区下層	口 - 底 8. 高 2.		内外面共回転横ナデ	胎 細砂粒含むB 色 暗灰色 焼 良	底部のみ 外面 底部自然灰釉付 着 窯壁融着
7	須高	恵台 付	器椀	19区下層	口 - 底 9. 高 -	_ .5 _	内外面共回転横ナデ 底部切り離 し後付高台	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	1/7
8	須	惠蓋	器		ロ 12. ツマミ 4. 高 2.	.7	内外面共回転横ナデ 外面天井部 回転へラ削り リング状つまみ貼 付 ●	胎 砂粒少量含む B 色 灰色 焼 良	ほぼ完形 外面 自然灰釉付着

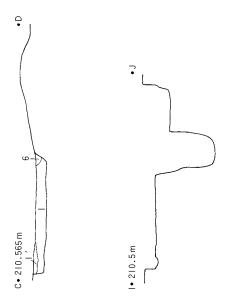
第9表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(9)

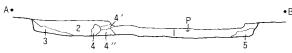
## H-8号住

No.	岩	景 積	É	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
9	土	師甕	器	9区下層	口 21.0 底 — 高 3.6	外面胴上部縦へラ削り 内面口縁 部横ナデ	胎 細砂粒含む 色 橙色 焼 良	1/15
10	土	師甕	器	18区上層	口 19.2 底 — 高 —	内外面共横ナデ	胎 砂粒多量含む 色 橙色 焼 良	口縁部〜頸部の 1/10
11	土	師甕	器	27区下層	口 14.4 底 — 高 —	外面口縁部横ナデ 体部横方向へ ラ削り 内面横ナデ	胎 細砂粒多量含む 色 にぶい褐色 焼 良	口縁部〜頸部の 1/10
12	須平	恵	器瓶	17区下層	口 2.8 底 7.0 高 9.0	外面回転横ナデ 底部へラ削りボ タン貼付	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	口部のみ欠損 外面自然灰釉少 量付着
13	須長	恵頸	器壺	27・28区 下層 28区貯蔵穴	口 14.0 底 — 高 12.4	内外面共横ナデ	胎 砂粒少量含む A 色 灰白色 焼 良	頸部1/2
14	須長	恵頸	器壺	28区下層	口 13.8 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 灰白色 焼 良	1/10
15	編	物	石	25区上層	長 5.5、幅	3.2、厚 3.0、重量 8.0		
16	編	物	石	25区下層	長 12.5、幅	4.8、厚 3.1、重量 253		
17	編	物	石	27区下層	長 11.0、幅	4.6、厚 3.0、重量 205		
18	編	物	石	25区下層	長 8.7、幅	4.8、厚 3.3、重量 175		
19	編	物	石	27区下層	長 6.2、幅	3.6、厚 1.5、重量 54		
20	編	物	石	27区下層	長 5.9、幅	3.1、厚 2.2、重量 53		
21	編	物	石	27区下層	長 6.6、幅	4.2、厚 2.6、重量 100		
22	編	物	石	28区下層	長 5.4、幅	3.5、厚 2.3、重量 72		
23	編	物	石	27 下層	長 5.7、幅	3.3、厚 2.4、重量 55		

第10表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(10)



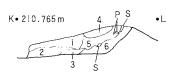




	3	4 4"	 5
E• 210.5	im		•F

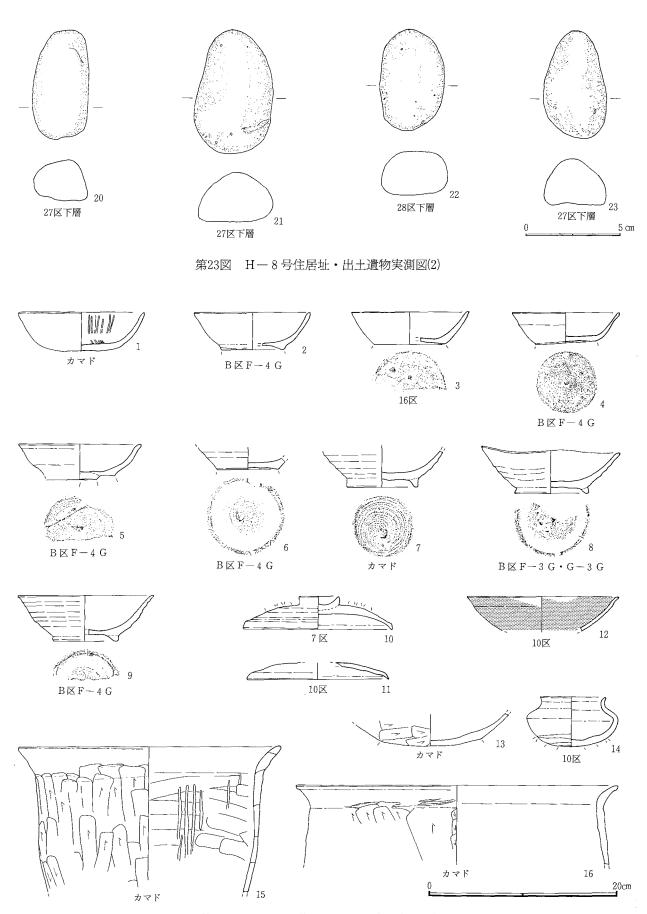




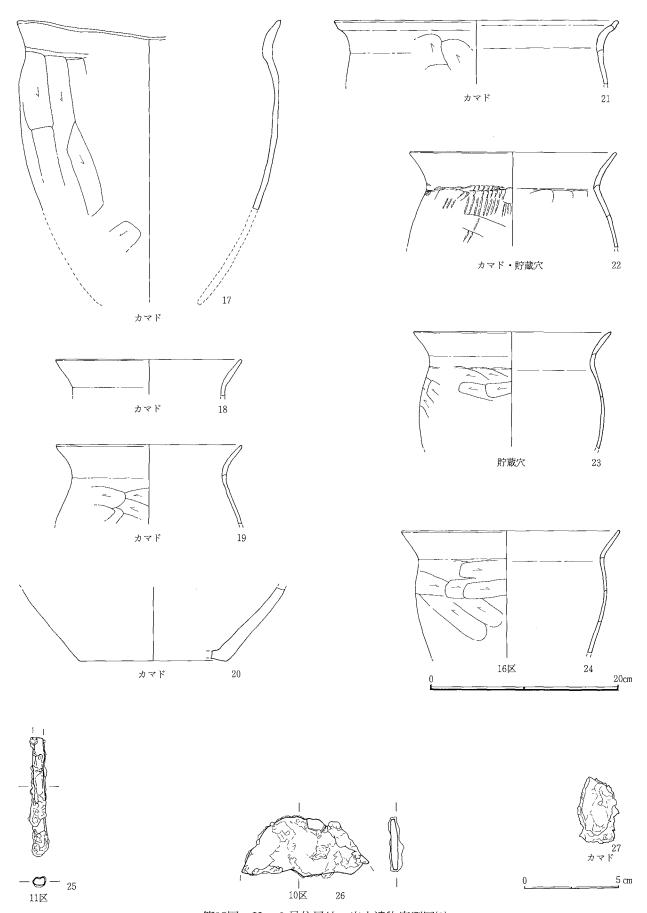




第22図 H-9号住居址実測図



第24図 H-9 号住居址・出土遺物実測図(1)



第25図 H-9号住居址·出土遺物実測図(2)

H-9号住

No.	- 9 号任  器 種	出土位置	法量(cm)	 器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
190.			+			
1	土師器	景 カマド	口 13.4 底 — 高 4.1	外面口縁部横ナデ 体底部へラ削 り 内面へラ磨き	胎 砂粒含む 色 にぶい橙色 焼 良	ほぼ完形
2	須 恵 器 坏	₩ F — 4 G	口 12.4 底 6.6 高 4.0	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 底部圧痕	胎 砂粒少量含む A 色 灰白色 焼 やや不良	1/3
3	須 恵 岩 坏	署 16区	口 12.6 底 7.6 高 3.5	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り	胎 砂粒少量含むA 色 灰色 焼 良	1/3
4	須 恵 暑 坏	F-4G	口 11.4 底 6.4 高 3.5	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り後へラ削り 内面渦巻き	胎 砂粒含む 色 オリーブ褐色 外面一部灰色 焼 良	4/5 外面自然灰釉付着
5	須 恵 暑	₩ F-4G	口 13.0 底 7.1 高 3.8	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り(糸切り方向違い二重底状を 呈する)内面渦巻き	胎 砂粒含む B 色 灰白色 焼 やや不良	1/4
6	須 恵 括 坏	肾 F−4G	口 — 底 6.4 高 —	外面横ナデ 底部回転糸切り 内面回転横ナデ 内面渦巻き	胎 細砂粒含む 色 灰白色 焼 良	底部のみ
7	須 恵 詞高台付出	器 カマド	口 12.8 底 7.6 高 3.8	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台 内面渦巻き	胎 砂粒少量含む 色 にぶい橙色 焼 やや不良	1/3
8	須 恵 詞 高 台 付 5	器 10区 不 F−3G G−3G	口 14.8 底 7.8 高4.2~5.0	内外面共回転横ナデ 底部圧痕	胎 砂粒少量含むA 色 灰黄色 焼 良	1/2
9	須 恵 暑 高台付与	₩ F — 4	口 14.6 底 6.6 高 4.9	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 砂粒少量含むA 色 黄灰色 焼 やや不良	2/5 内面酸化還 元焰によるスス 吸着
10	須 恵 岩蓋	器 7区	ロ 15.8 ツマミ 4.1 高 3.5	内外面共回転横ナデ 外面天井部 回転へラ削り リング状つまみ貼 付 ●	胎 砂粒含む A 色 灰色 焼 良	ほぼ完形
11	須 恵 岩	器 10区	ロ 15.2 ツマミ — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 細砂粒含む B 色 灰白色 焼 良	1/7
12	灰釉陶岩皿	器 10区	口 16.0 底 一 高 一	内外面共回転横ナデ	胎 細砂粒少量含む 色 灰黄色 焼 良	1/4
13	土師	器カマド	口 10.6 底 — 高 —	外面胴下半部不定方向へラ削り底 部手持へラ削り 内面横ナデ	胎 荒砂粒少量含む 色 にぶい黄橙色 焼 良	胴下半部〜底部 の2/3
14		器 10区	口 7.0 底 — 高 5.3	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ削り	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	ほぼ完形
15	土師報	器 カマド	口 28.0 底 一 高 15.5	外面口辺部横ナデ 頸部〜胴部縦 方向へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 にぶい褐色 焼 良	口辺部〜胴中部 の1/3
16	土師報	器カマド	口 34.2 底 — 高 8.3	外面口縁部横ナデ 胴上部縦方向 ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 橙色 焼 良	1/15

第11表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(II)

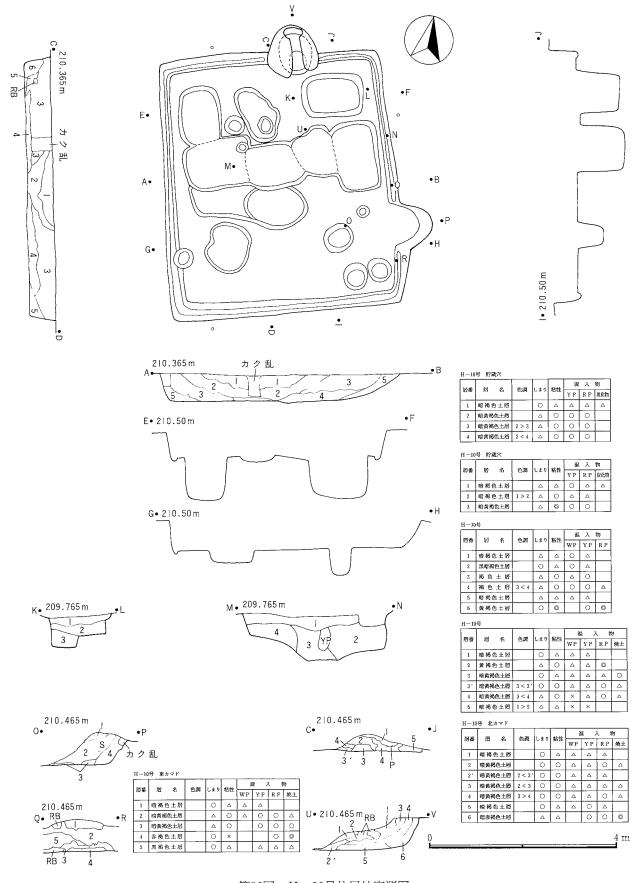
# H-9号住

No.	 	景 種	Î	出土位置	法量(	cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
17	土	師甑	器	カマド	底	28.0 10.4 30.2	外面口辺部横ナデ 頸部〜胴部へ ラ削り 内面横ナデ	胎 荒砂粒含む 色 褐色 焼 良	1/4 外面胴部一部スス付着
18	土	師甕	器	カマド	口底高	19.8 — 3.9	内外面共横ナデ	胎 細砂粒含む 色 橙色 焼 良	口縁部1/2
19	土	師甕	器	カマド	口底高	19.8 — 8.3	内外面口縁部横ナデ 胴上部横方向へラ削り	胎 細砂粒含む 色 明赤褐色 焼 良	1/8
20	須	恵甕	器	カマド	口底高	15.8	外面底部斜方向平行叩き 内面当 て具痕	胎 砂粒少量含む 色 灰黄色 焼 良	1/10
21	土	師甕	器	カマド	口底高	30.2 — 6.8	外面口縁部横ナデ 胴上部縦方向 ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 にぶい橙色 焼 良	1/20
22	土	節甕	器	カマド 貯蔵穴	底	22.0 — 10.0	外面口辺部横ナデ 胴上部横及び 斜方向へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 にぶい褐色 焼 良	口縁部〜胴上部
23	土	師甕	器	貯蔵穴	底	21.0 — 12.5	外面口辺部横ナデ 胴部横及び斜 方向へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 にぶい橙色 焼 良	口辺部〜胴部の一部
24	土	師甕	器	カマド 16区	底	23.3 — 13.0	向・胴中央部斜方向へラ削り	胎 砂粒含む 色 明赤褐色 焼 良	口辺部〜胴上部 の1/3
25	紡軸	錘	車?	11区	現存長	6.4、	幅 0.8、厚 0.6、重量 6.1		
26	紡	錘車	?	10区	現存長	3.3、	幅 6.8、重量 6.1		
27	鉄		滓	カマド	現存長	3.6、	幅 2.2、厚 1.5		

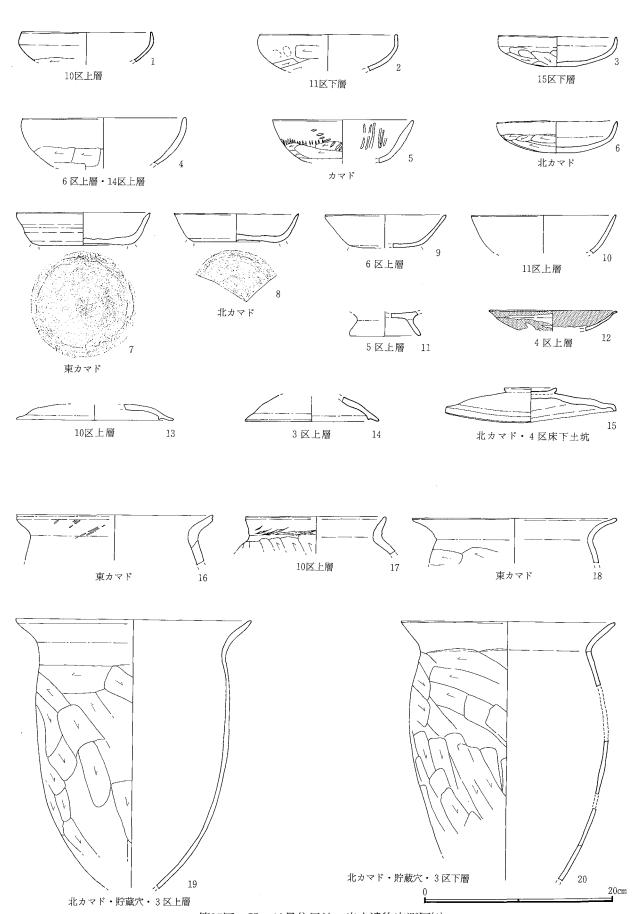
第12表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(12)

住 居 址	規 模 (m)	主軸				
H-10号	5.2×5.6	N-74°-E				
住 居 構 造	居址内に柱穴を確認し りした周溝が住居址を した。	る。平面形はほぼ正方形であり、掘り込みは確認面から約59cm。 住した。住居址北東隅に貯蔵穴を確認した。壁下に掘り込みのしっかを全周している。住居址中央から北側にかけて床下土坑を $5$ 基確認 $H-10$ 号住 $\to$ $H-13$ 号住である。				
カマド構造	住居址北壁東寄りと、 が良好で、天井部分が		設けられている。北側のカマドは遺存状態			
遺物出土状況	は須恵器坏が多く、ほ	まぼ完形の坏も出土して 南部、中央部に土師器甕	らは土師器甕が多く出土した。東カマドにいる。上層からは北西部に須恵器甕が多くが多く検出された。鉄製品では刀子が出土			

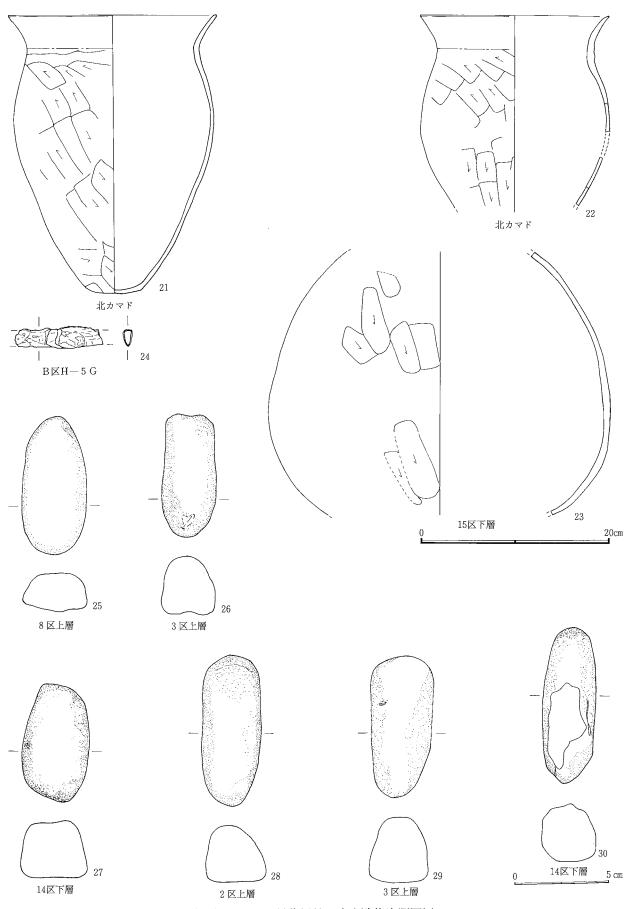
住 居 址	規模(m)	主軸	
H-11号	5.8× —	N-76°-E	
住居構造	持った立ち上がりがる 棚状施設あるいは拡張 に確認され、西壁と 西壁については内側の 注目される。	確認され、南西のコーナー 長等が考えられる。 掘りる 南壁に沿うように小規模な	と推測される。住居址西壁部分では段差を部分にも段差が認められていることから、込みは確認面から約14cm。柱穴は住居址内は柱穴も確認された。これら小規模柱穴はては壁から多少の距離をもっていることがである。
カマド構造	住居址東壁南寄りに記 されていた。	設けられ、ローム混じり6	り褐色土で構築され、袖部南には礫が設置
遺物出土状況		会出された。カマドからに 鉄製品は紡錘車、刀子がと	は土師器甕が多く出土した。また、硯2点、 出土した。



第26図 H-10号住居址実測図



第27図 H-10号住居址·出土遺物実測図(1)



第28図 H-10号住居址·出土遺物実測図(2)

## H-10号住

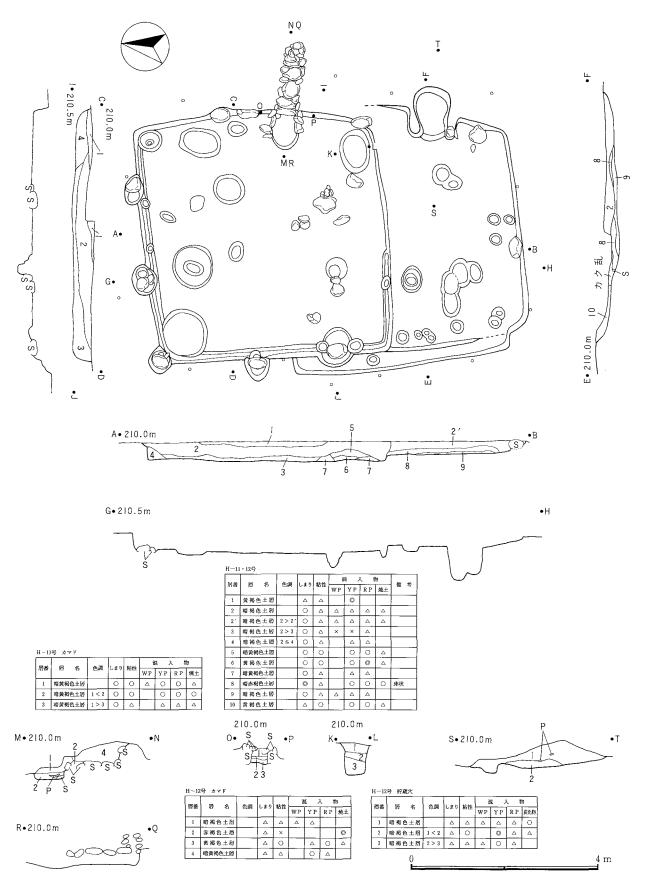
No.	岩	景 種	ĺ.	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態•備考
1	土	師坏	器	10区上層	口 13.8 底 — 高 3.5	外面口縁部横ナデ 体部横方向へ ラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 橙色 焼 良	破片
2	土	師坏	器	11区下層	口 14.6 底 — 高 3.9	内外面口辺部横ナデ 外面体底部 不定方向ヘラ削り	胎 細砂粒含む 色 にぶい橙色 焼 良	破片
3	土	師 坏 	器	15区下層	口 12.6 底 一 高 3.2	外面口縁部横ナデ 体底部不定方 向へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 橙色 焼 良	1/2
4	土	師坏	器	6 区上層 14区上層	口 17.3 底 — 高 5.0	外面口辺部横ナデ 体底部横方向 ヘラ削り 内面回転横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 にぶい赤褐色 焼	破片
5	土	師坏	器	カマド	口 15.2 底 9.6 高 4.6		胎 砂粒含む 色 橙色 焼 良	3/5
6	土	師坏	器	カマド北	口 12.8 底 一 高 3.3	外面口辺部横ナデ 体底部不定方 向へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 橙色 焼 良	ほぼ完形
7	須	恵坏	器	カマド東	口 14.2 底 9.3 高 3.5	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り後手持へラ削り 内面渦巻 き	胎 砂粒少量含む 色 暗灰色 焼 良	ほぼ完形 内面 口縁部及び底部 重ね焼き痕
8	須	恵坏	器	カマド北	口 12.8 底 9.0 高 3.0	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り	胎 砂粒含むA 色 灰色 焼 良	1/4 外面重ね焼 き痕
9	須	恵坏	器	6区上層	口 12.8 底 7.4 高 3.5	内外面共回転機ナデ 底部回転へ ラ切り	胎 砂粒少量含む 色 灰白色 焼 良	1/5
10	土	師坏	器	11区上層	口 — 底 — 高 —	外面口縁部横ナデ 体部不定方向 ヘラ削り 内面横ナデ	胎 色 橙色 焼 やや不良	口縁部〜胴部の一部
11		惠 台 付	器椀	15区上層	口 14.2 底 7.4 高 2.5	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 橙色 焼 不良	高台の一部
12	灰	釉陶皿	器	4区上層	口 13.6 底 一 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 細砂粒少量含む 色 灰白色 焼 良	1/8
13	須	惠蓋	器	10区上層	ロ 16.8 ツマミ — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒含む A 色 黄灰色 焼 良	1/5 外面全体自 然灰釉付着
14	須	惠蓋	器	3区上層	ロ 14.6 ツマミ — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒含むB 色 灰白色 焼 良	1/5 外面自然灰 釉付着
15	須	恵蓋	器	カマド北 4区 床下土坑	ロ 18.3 ツマミ 5.3 高 3.7	内外面共回転横ナデ 天井部ヘラ 削り後リング状つまみ貼付	胎 砂粒含むB 色 黄灰色 焼 良	ほぼ完形 内外 面自然灰釉付着 重ね焼き痕
16	土	師甕	器	カマド東	口 — 底 — 高 —	内外面横ナデ 外面胴上部へラ削り	胎 砂粒含む 色 橙色 焼 良	口縁部〜胴上部の一部

第13表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(I3)

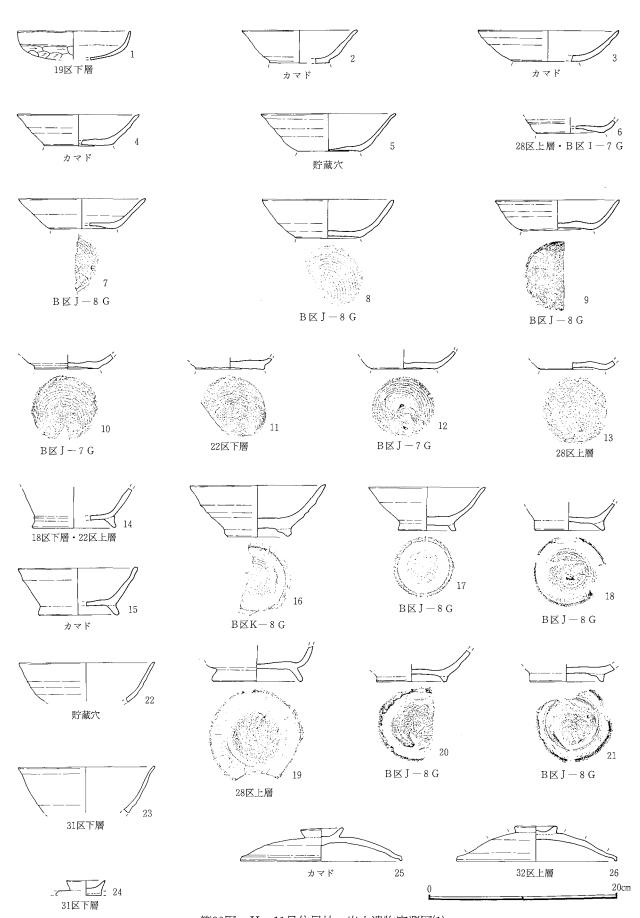
## H-10号住

No.	器	1 種	Í	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
17	土	師甕	器	10区上層 貯蔵穴	口 15. 底 - 高 -	0 外面口辺部横ナデ 胴上部斜方向 - ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 にぶい赤褐色 焼 良	口縁部〜頸部の 1/3
18	土	師甕	器	カマド東	口 21. 底 - 高 4.	- 胴上部横方向へラ削り 内面口辺	胎 砂粒少量含む 色 にぶい赤褐色 焼 良	破片
19	土長	師胴	器甕	カマド北 貯蔵穴 3 区上層	口 25. 底 - 高 28.	- 外面頸部横方向・胴部斜及び縦方	胎 砂粒少量含む 色 明赤褐色 焼 良	1/2
20	土長	師胴	器甕	貯蔵穴 3 区下層 カマド北	口 22. 底 - 高 27.	- 向・胴中部~下部縦方向へラ削り	胎 砂粒含む 色 赤褐色 焼 良	底部除く2/3
21	土長	師胴	器甕	カマド北	口 22. 底 5. 高 29.	6 ラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 明褐色 焼 良	1/4 底部外面スス付着
22	土長	師胴	器甕	カマド北	口 20 底 - 高 20	一 方向へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 明赤褐色 焼 良	口辺部〜胴部の 1/4
23	土球	師胴	器甕	15区下層	底	- 外面斜下方向へラ削り 内面不定 - 方向へラナデ	胎 砂粒少量含む 色 にぶい褐色 焼 良	1/5 外面スス少 量付着
24	刀		子	H-5G	現存長 4	6、幅 1.2、厚 0.5、重量 6.0	<b>刃部一部残存</b>	
25	編	物	石	8 区上層	長 7.3、	畐 3.4、厚 2.0、重量 35		
26	編	物	石	3区上層	長 6.6、	畐 3.0、厚 3.0、重量 45		
27	編	物	石	14区下層	長 6.3、「	畐 3.6、厚 3.0、重量 50		
28	編	物	石	2 区上層	長 8.0、	届 3.2、厚 3.0、重量 50		
29	編	物	石	3区上層	長 7.5、	届 3.2、厚 3.5、重量 50		
30	編	物	石	14区下層	長 8.2、「	届 2.9、厚 3.1、重量 50		

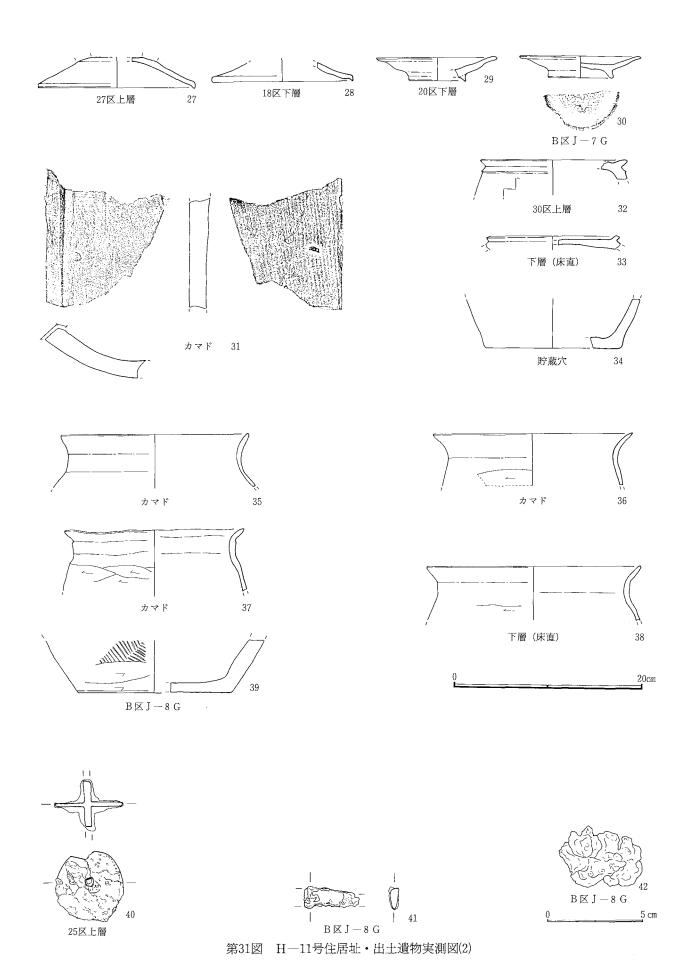
第14表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(14)

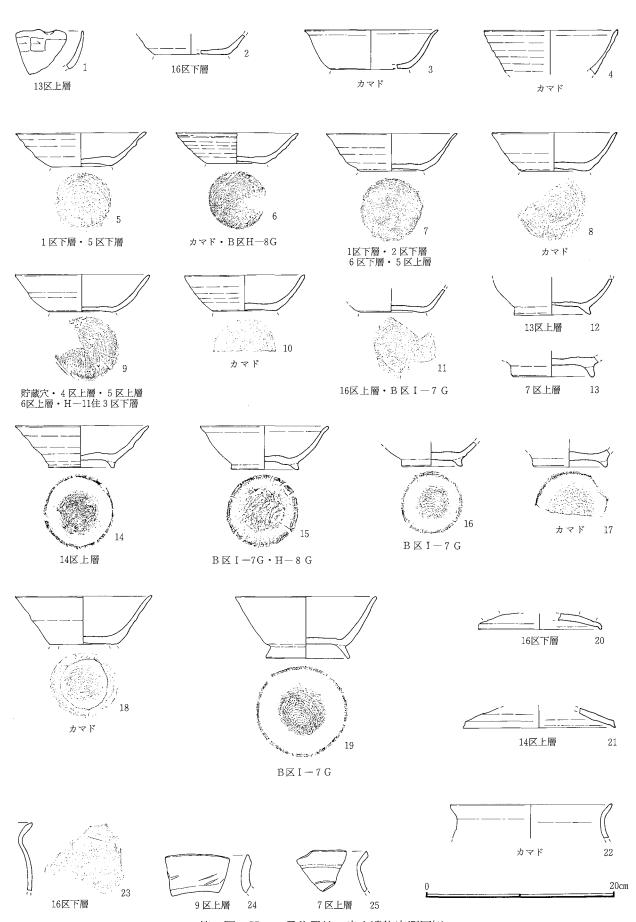


第29図 H-11・12号住居址実測図

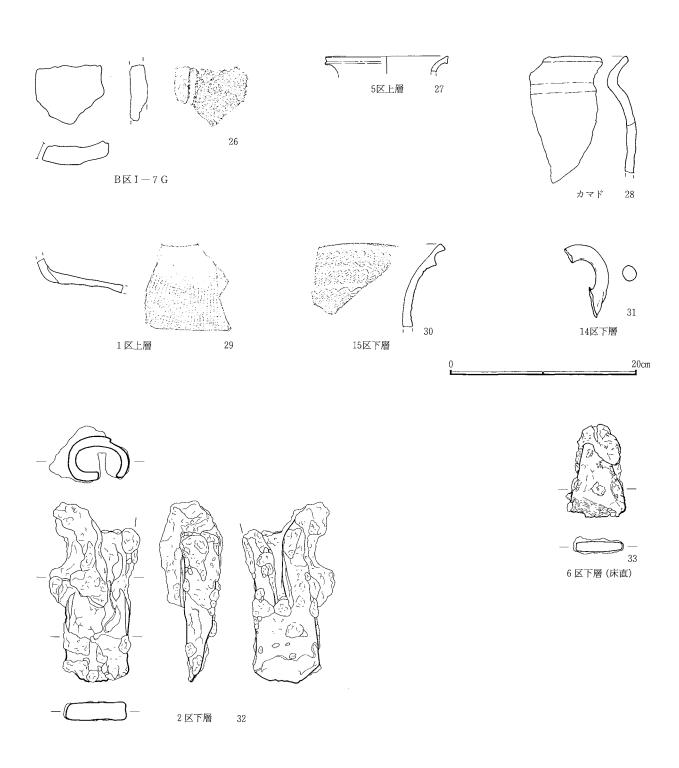


第30図 H-11号住居址·出土遺物実測図(1)





第32図 H-12号住居址·出土遺物実測図(1)









## H-11号住

11							HIT YES (Like) I. Sefer on the filst	The Arms No. 10	70-4-10-68 M-M
No.	器			出土位置	法量 	(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
1	土	師坏	器	19区下層	口底高	12.0 — 3.0	外面口辺部横ナデ 体底部不定方向へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 にぶい橙色 焼 良	1/5
2	須	恵坏	器	カマド	口底高	12.3 6.4 3.5	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒含む A 色 灰色 焼 良	1/8
3	須	恵坏	器	カマド	口底高	15.0 7.0 3.3	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒少量含む 色 褐灰色 焼 やや不良	1/5
4	須	恵坏	器	カマド	口底高	13.0 7.0 3.3	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒少量含む 色 にぶい橙色 焼 やや不良	1/4 内外面スス 付着
5	須	惠坏	器	貯蔵穴	口底高	14.4 6.4 4.0	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒少量含む 色 にぶい橙色 焼 やや不良	1/4 内外面スス 付着
6	須	恵坏	器	28区上層 I — 7 G	口底高	7.2 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒含むA 色 黄灰色 焼 良	底部のみ
7	須	恵坏	器	J — 8 G	口底高	13.6 6.6 3.2	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒含む A 色 灰白色 焼 不良	1/3
8	_ 須	恵坏	器	J — 8 G	口底高	14.0 6.8 4.1	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒含む 色 黄灰色 焼 良	1/2 内外面酸化 還元焰によるス ス吸着
9	須	恵坏	器	J — 8 G	口底高	13.2 7.4 3.2	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 内面渦巻き	胎 細砂粒含む C 色 灰色 焼 良	1/2
10	須	恵坏	器	J — 7 G	口底高	7.0	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 内面渦巻き	胎 砂粒含む C 色 暗灰黄色 焼 良	底部のみ 外面 自然灰釉付着
11	須	恵坏	器	22区下層	口底高	7.3	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 底部圧痕	胎 砂粒少量含むA 色 灰白色 焼 良	底部のみ 外面 スス付着
12	須	恵坏	器	J — 8 G	口底高	6.6	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒含む 色 灰白色 焼 やや不良	1/3 外面酸化還 元焰によるスス 吸着
13	須	恵坏	器	28区上層	口底高	6.8	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 内面渦巻き 底部圧痕	胎 細砂粒含むB 色 灰色 焼 良	底部のみ 外面 自然灰釉付着
14	須 高 ·		器坏	22区上層 18区下層	口底高	8.8	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含むA 色 灰色 焼 良	1/5
15		惠 台 付		カマド	口底高	12.6 8.4 5.0	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	1/4 内外面酸化 還元焰によるス ス吸着
16		惠 台 付		K-8 G	口底高	14.4 6.4 5.5	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 砂粒少量含む 色 灰黄色 焼 良	2/5 口縁部ター ル状にスス付着

第15表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(I5)

# H-11号住

11	-11 <i>=</i>	1111					
No.	器	種	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態•備考
17		恵 器台付椀	J — 8 G	口 12.4 底 6.2 高 4.6	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台 内面渦巻き	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	2/5
18		恵器台付坏	J-8G	口 — 底 7.2 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 砂粒含むA 色 灰色 焼 不良	底部のみ
19	須 高 ī	恵 器台付椀	28区上層	口 — 底 9.2 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台 内面渦巻き	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	底部のみ
20		恵器台付坏	J — 8 G	口 — 底 7.4 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台 内面渦巻き 底部 圧痕	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 やや不良	1/3 内外面酸化 還元焰によるス ス吸着
21	須高 高	恵器台付坏	J-8 G	口 — 底 7.8 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 細砂粒含む A 色 灰白色 焼 不良	底部のみ
22	須	恵器坏	貯蔵穴	口 14.4 底 — 高 4.1	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒含む 色 灰白色 焼 やや不良	口縁部〜体部の 一部
23	須	恵 器	31区下層	口 14.5 底 一 高 5.0	内外面共回転横ナデ	胎 荒砂粒少量含む 色 暗灰黄色 焼 やや不良	1/4
24	須	恵器蓋	31区下層	ロ - ツマミ 4.0 高 -	内外面共回転横ナデ リング状つ まみ貼付	胎 細砂粒含む 色 灰色 焼 良	破片
25	須	恵器	カマド	ロ 17.0 ツマミ 4.4 高 3.6	内外面共回転横ナデ 天井部へラ 削り後リング状つまみ貼付 ●	胎 砂粒少量含むA 色 灰色 焼 良	3/4
26	須	恵器	32区上層	ロ 17.0 ツマミ 4.4 高 3.7		胎 砂粒少量含むB 色 灰色 焼 良	ほぼ完形 外面 灰付着
27	須	恵器蓋	27区上層	ロ 16.6 ツマミ — 高 3.3	内外面共回転横ナデ 天井部回転 ヘラ切り及び回転糸切り	胎 荒砂粒少量含A 色 灰白色 焼	1/5 外面端部 重ね焼き痕
28	須	恵器蓋	18区下層	ロ 15.2 ツマミ — 高 2.0	内外面共回転横ナデ	胎 C 色 黄灰色 焼 不良	1/7
29	須	恵器皿	20区下層	口 14.0 底 6.0 高 2.5	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	1/3
30	須	恵器皿	J-7G	口 13.0 底 6.8 高 2.3	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 砂粒含むB 色 灰色 焼 良	2/5
31		瓦	カマド	狭 — 広 — 長 — 厚1.8~2.2		胎 色 橙色 焼	破片
32	須円	恵 器面 硯	30区上層	口 15.4 底 — 高 4.0	内外面共回転横ナデ 窓部ヘラ切 り込み 海部・陸部の境界に突帯 有り	胎 砂粒少量含むA 色 灰色 焼 良	内面端部〜脚部の一部

第16表 嶺・下原Ⅱ遺跡遺物観察表(低)

#### H-11号住

No.	岩	品 種	É	出土位置	法量	(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
33	須円	恵面	器硯	下層床直	口底高	13.6 — 1.5	外面海部回転へラ削り 内面回転 横ナデ	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	硯部1/4
34	須	恵鉢	器	貯蔵穴	口底高	14.2 5.2	内外面共回転横ナデ 底部手持へ ラ切り 不定方向へラ削り	胎 砂粒多量含む 色 黄灰色 焼 やや不良	体底部〜底部の 一部
35	土	師甕	器	カマド	口底高	20.0 - 5.6	口辺部内外面共横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 橙色 焼 良	口辺部の一部
36	土	師甕	器	カマド	口底高	21.2 — 5.5	外面口辺部横ナデ 頚部横方向へ ラ削り 内面口辺部〜頚部横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 にぶい赤褐色 焼 良	口辺部〜頚部の 一部
37	土	節甕	器	カマド	口底高		外面口辺部横ナデ 胴上部横方向 へラ削り 内面口辺部〜頚部横ナ デ 胴上部横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 明赤褐色 焼 良	破片
38	土	師甕	器	下層床直	口底高	_	外面口辺部〜頚部横ナデ 胴上部 横方向へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 明赤褐色 焼 良	破片
39	須	恵甕	器	J-8G	口底高	16.4 5.5	外面体部横方向へラ削り 当て具 痕 底部静止へラ切り 内面横ナ デ	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	底部と体部の一部
40	紡軸	錘	車?	25区上層	11.11.17		浸 2.6、幅 0.5、厚 0.5 9.車径 3.7、厚 0.2、重量 14.3		
41	刀		子	J — 8 G	刀身	長 3.0、	幅 1.0、厚 0.4、重量 2.5	刃部の一部か?	
42	鉄		滓	J — 8 G	長 4.	3、幅	3.2、重量 27.4		

### H-12号住

	一1.7万生 四 括 山上片翠 注息() 四 形 针 计									
No.	器	景 積	į	出土位置	法量	(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考	
1	土	師坏	器	13区上層	口底高		外面口縁部横ナデ 体部横方向へ ラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 橙色 焼 良	破片	
2	須	恵坏	器	16区下層	口底高	7.8 2.0	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ削り	胎 砂粒少量含む 色 灰白色 焼 良	体部〜底部の一部	
3	須	惠坏	器	カマド	口底高	14.2 8.6 4.2	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒含む 色 灰白色 焼 不良	2/5 内外面ス ス付着	
4	須	恵坏	器	カマド	口底高	14.2 — 4.7	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 にぶい黄橙色 焼 やや不良	口縁部〜体部の 1/4	
5	須	恵坏	器	1・5区 下層	口底高	14.0 6.4 3.6	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 内面渦巻き	胎 砂粒少量含むA 色 灰白色 焼 良	1/2 内外面スス 少量付着	
6	須	恵坏	器	カマド H-8G	口底高	13.0 6.0 3.3	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒含む B 色 灰白色 焼 やや不良	2/3	

第17表 嶺・下原Ⅱ遺跡遺物観察表(17)

## H-12号住

No.	器	星 種	1	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
7	須	恵 坏	器	6・2・1 区 下層 5 区上層	口 14. 底 6 高 4.	6 切り	胎 砂粒含むA 色 黄灰色 焼 良	1/2
8	須	恵坏	器	カマド	口 13 底 7 高 4	2 切り	胎 砂粒含む A 色 灰白色 焼 良	1/2 内外面スス 付着
9	須	惠坏	器	貯蔵穴 4・5・6 区 上層 3 区下層 (11住)	口 14 底 4 高 4	0 切り	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	3/5
10	須	恵坏	器	カマド	口 12 底 6 高 3	6 切り 底部圧痕	胎 砂粒少量含むA 色 灰白色 焼 良	2/5 外面スス付着
11	須	恵坏	器	16区上層 I-7G		- 内外面共回転横ナデ 底部回転糸 6 切り 内面渦巻き -	胎 砂粒含むA 色 灰白色 焼 良	底部のみ 外面 スス付着
12	須 高	惠 台 付	器椀	13区上層	底 8	- 内外面共回転横ナデ 底部回転糸 2 切り後付高台 8	胎 砂粒含むA 色 灰白色 焼 良	1/4
13		惠 台 付		7区上層	1	- 底部回転糸切り後付高台 4 1	胎 砂粒少量含む 色 灰白色 焼 良	底部の一部
14	須 高·	惠 台 付	器坏	14区上層		3 内外面共回転横ナデ 底部回転糸 0 切り後付高台 内面渦巻き 5	胎 砂粒含むA 色 灰色 焼 良	9/10
15		惠 台 付	器坏	I — 7 G H— 8 G		8 内外面共回転横ナデ 底部回転糸 2 切り後付高台 内面渦巻き 6	胎 砂粒含む 色 暗灰黄色 焼 やや不良	2/5
16		惠 台 付	器坏	I — 7 G	( ' '	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 3 切り後付高台 高台圧痕 -	胎 砂粒含むA 色 灰色 焼 良	底部のみ
17		- 恵 台 付		カマド	底 7	底部回転糸切り後付高台 6 8	胎 砂粒含むB 色 灰色 焼 良	底部の一部
18	1	恵合付が		カマド		8 内外面共回転横ナデ 底部回転糸 2 切り 1	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	4/5 内外面酸化 還元焰によるス ス吸着
19	l	恵台 付	器椀	I — 7 G		<ul><li>2 内外面共回転横ナデ 底部回転糸</li><li>7 切り後付高台</li><li>6</li></ul>	胎 砂粒含むB 色 灰白色 焼 良	1/3 外面スス付 着 内面重ね焼 き痕
20	須	恵蓋	器	16区下層	ロ 13 ツマミ 高 1		胎 砂粒少量含む A 色 灰色 焼 良	破片 内面自然 灰釉少量付着
21	須	恵蓋	器	14区上層	ロ 16 ツマミ 高 2	3 内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	破片

第18表 嶺・下原Ⅱ遺跡遺物観察表(18)

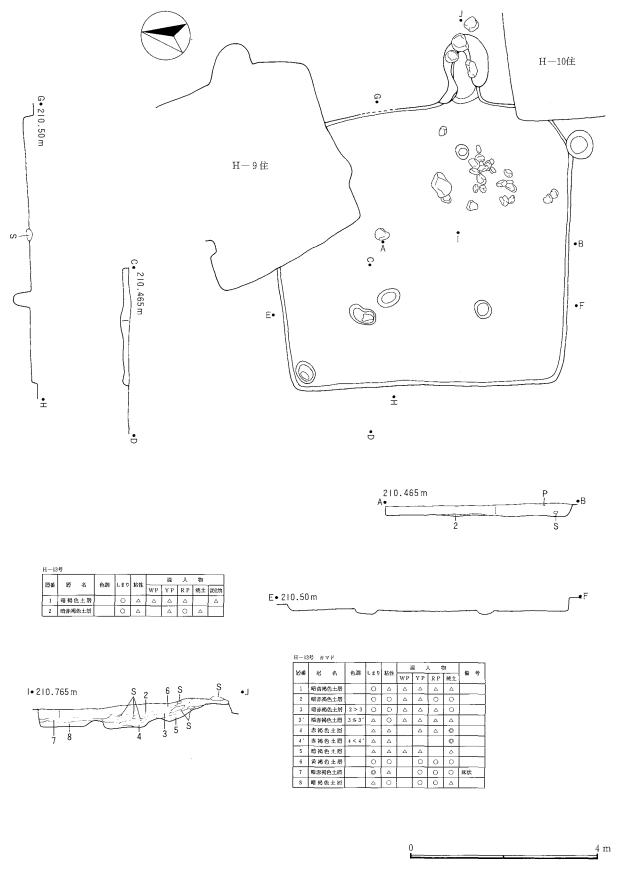
## H-12号住

11	14.	, <u>, , , , , , , , , , , , , , , , , , </u>						
No.	岩	種	de la	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
22	土	師甕	器	カマド	口 17.2 底 — 高 3.6	内外面共横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 橙色 焼 良	口辺部の一部
23	土	師甕	器	16区下層	口 — 底 — 高 —		胎 砂粒少量含む 色 にぶい黄橙色 焼 良	破片
24	土	師甕	器	9区上層	口 — 底 — 高 —	内外面共横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 にぶい褐色 焼 良	口辺部の一部
25	土	師甕	器	7区上層	口 — 底 — 高 —	内外面共横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 赤褐色 焼 良	口辺部の一部
26		瓦		I — 7 G	狭 — 広 — 長 — 厚 1.8~2		胎 砂粒少量含む 色 橙色 焼 良	破片
27	須	恵甕	器	5 区上層	口 13.0 底 — 高 2.3	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	口辺部の一部
28	須	恵甕	器	カマド	口 — 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 荒砂粒含む 色 にぶい黄橙色 焼 不良	破片
29	須	恵壺	器	1区上層	口 — 底 — 高 —	内外面頚部回転横ナデ 外面胴上 部平行叩き 内面胴上部当て具痕	胎 砂粒含むB 色 灰色 焼 良	破片
30	須	恵壺	器	15区下層	口 — 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ 外面口辺部 波状紋	胎 砂粒含むA 色 灰色 焼 良	破片 外面自然 灰釉付着
31	須	恵	器	14区下層	口 — 底 — 高 —		胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	把手部のみ
32	鉄		斧	2区下層	現存長 9.6、 重量 170.7	袋状部幅 3.2、厚 2.3		
33		鏨		6区下層	現存長 4.9、	幅 3.2、厚 0.6、重量 36.1	刃部先端欠損	
34	鉄		滓	10区上層	長 5.8、幅	5.6、重量 61.1		
35	鉄		滓	J — 7 G	長 6.3、幅	4.5、重量 165		
36	鉄		滓	9区下層	長 4.2、幅	3.6、重量 26.5		

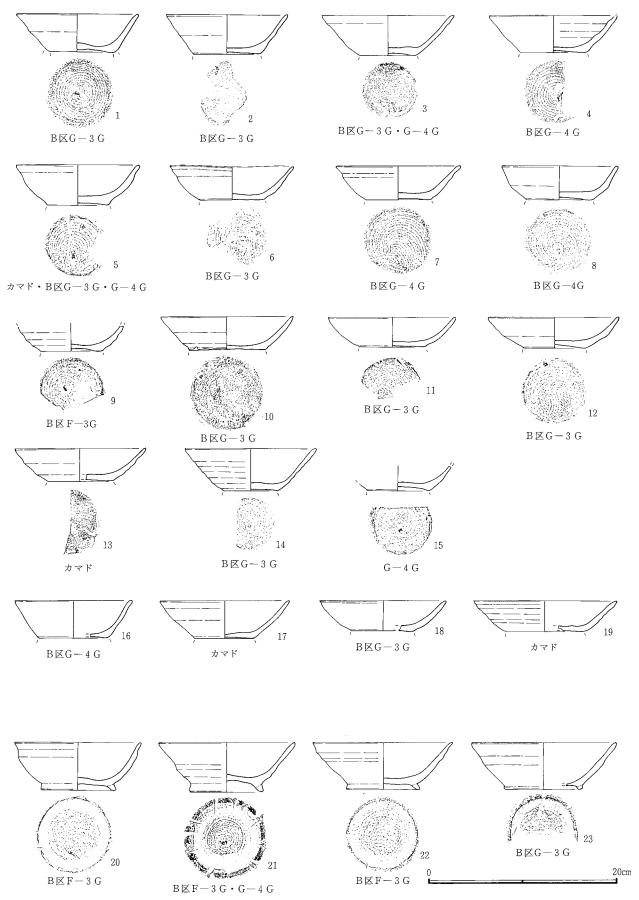
第19表 嶺・下原Ⅱ遺跡遺物観察表(19)

住 居 址	規模(m)	主軸	
H-12号	5.2×5.3	N-76°-E	
住 居 構 造	穴は住居址床面と周壁れ、北壁と西壁にほん ででである。 ででである。 では、住居地北壁下がまた、住居址北壁下が	壁に確認された。周壁のたま でいるではいる。 ままま でんしょう ままま でんしょう ままま でんしょ こうしゅう はいい はいま しゅう はい	
カマド構造		受けられ、礫により構築さ 構築され住居外に長く延び	されている。遺存状態が良く、煙道部は側 びている。
遺物出土状況	は瓦、西部中央には別く、灰釉陶器も検出る	灰釉陶器が出土している。 され、南東部には須恵器勢	東部隅に須恵器蓋が多く、中央西部寄りに 下層では北西部隅に須恵器坏の破片が多 悪が多く出土している。カマドからは土師 れた。鉄製品では、鉄斧、鏨、鉄滓が検出

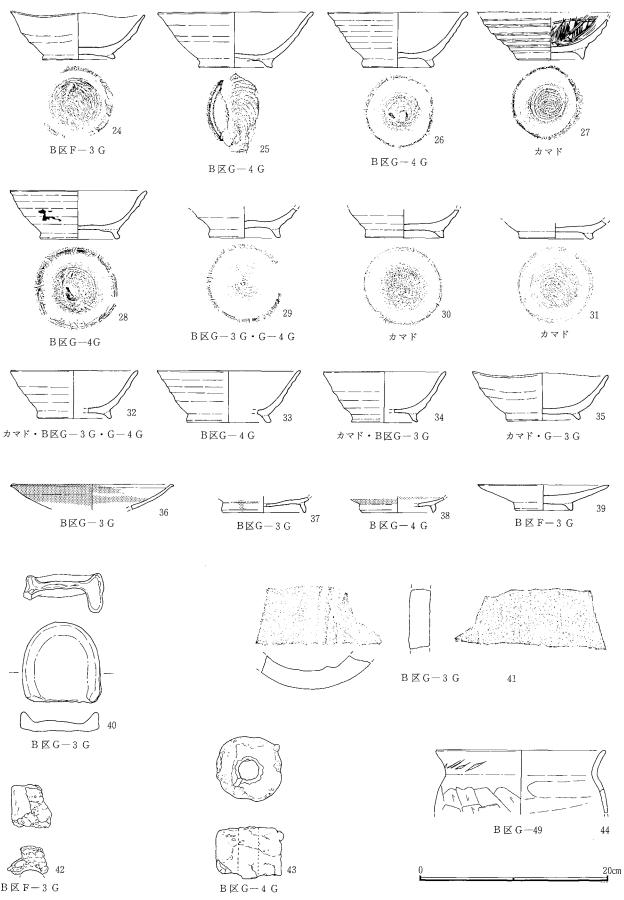
住 居 址	規 模 (m)	主軸	
H-13号	6.0× —	N-79°-E	
住居構造	面から約17cm。住居均	上内に柱穴を確認した。	はほぼ正方形と推測され、掘り込みは確認 $H-13号住  ightarrow H-9$ 号住である。
カマド構造			つ褐色土及び礫で構築されている。他の住 上の散らばり方が顕著であった。
遺物出土状況	遺物以外は各グリット る多くの遺物を検出し	、毎に行った。グリッドは した。土師器、須恵器のほ 失製品では刀子、紡錘車、	遺物の取り上げについてはカマド出土の 出土遺物中、本住居址に帰属すると思われ まかに灰釉陶器、風字硯、瓦、羽口等が出 鉄滓等が検出された。また、銅碗と思わ



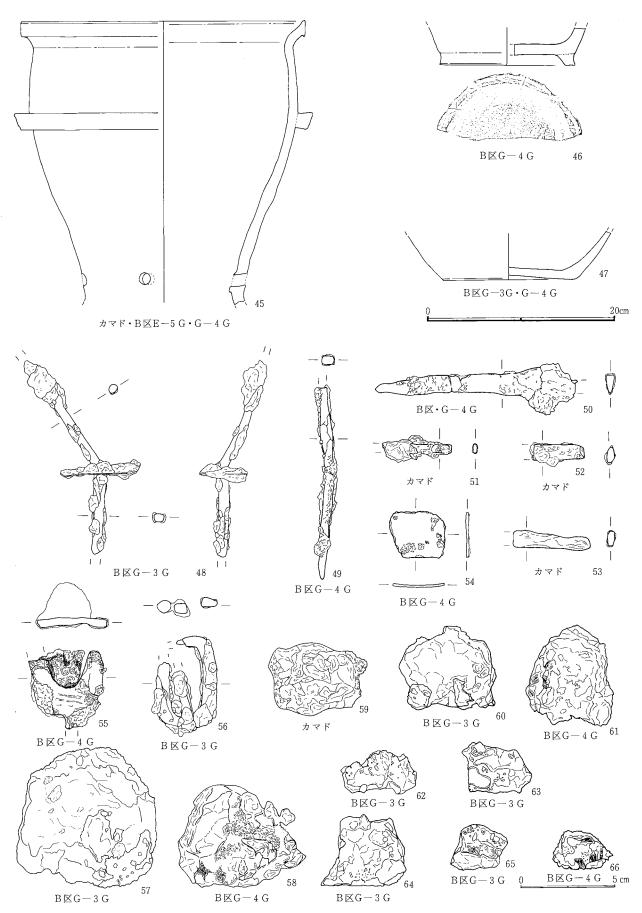
第34図 H-13号住居址実測図



第35図 H-13号住居址·出土遺物実測図(1)



第36図 H-13号住居址·出土遺物実測図(2)



第37図 H-13号住居址·出土遺物実測図(3)

## H-13号住

No.	器	早種	Ē	出土位置	法量	t(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
1	須	恵坏	器	G — 3 G	口底高	13.2 7.0 4.1	内外面共回転横ナデ 底部回転 切り 底部圧痕	伝糸 胎 砂粒含む A 色 灰白色 焼 やや不良	4/5
2	須	恵坏	器	G — 3 G	口底高	13.0 7.2 4.2	内外面共回転横ナデ 底部回転 切り	伝糸 胎 砂粒少量含む A 色 灰白色 焼 やや不良	1/4
3	須	恵坏	器	G-3 G G-4 G	口底高	14.0 6.0 4.3	内外面共回転横ナデ 底部回転 切り	<ul><li>伝糸 胎 砂粒少量含む A</li><li>色 灰黄色</li><li>焼 やや不良</li></ul>	3/4
4	須	恵坏	器	G-4 G	口底高	13.6 7.0 4.0	内外面共回転横ナデ 底部回転 切り 内面渦巻き 底部圧痕	伝糸 胎 砂粒少量含む 色 暗灰色 焼 良	2/3 内外面酸化 還元焰によるス ス吸着
5	須	恵坏	器	カマド G-3G G-4G	口底高	13.0 6.6 4.3	内外面共回転横ナデ 底部回転 切り 内面渦巻き	伝糸 胎 砂粒少量含むA 色 にぶい黄橙色 焼 やや不良	1/2
6	須	恵坏	器	G — 3 G	口底高	13.2 6.8 3.7	内外面共回転横ナデ 底部回転 切り	伝糸 胎 砂粒含むB 色 灰白色 焼 良	9/10
7	須	恵坏	器	G-4 G	口底高	13.4 7.0 3.5	内外面共回転横ナデ 底部回転 切り	伝糸 胎 砂粒少量含む A 色 灰黄色 焼 良	4/5
8	須	恵坏	器	G-4 G	口底高	12.2 7.0 3.6	内外面共回転横ナデ 底部回車 切り	伝糸 胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	1/2
9	須	恵坏	器	F-3 G	口底高	6.6 2.6	内外面共回転横ナデ 底部回車 切り	伝糸 胎 砂粒少量含む A 色 灰白色 焼 良	底部と体部の一 部
10	須	恵坏	器	G-3 G	口底高	14.2 8.1 3.5	内外面共回転横ナデ 底部回車 切り	伝糸 胎 砂粒含むA 色 にぶい黄橙色 焼 やや不良	ほぼ完形 外面 酸化還元焰によ るスス吸着
11	須	恵坏	器	G — 3 G	口底高	13.6 7.0 3.2	内外面共回転横ナデ 底部回転 切り	伝糸 胎 砂粒少量含む 色 暗灰色 焼 良	1/3 内外面酸化 還元焰によるス ス吸着
12	須	恵坏	器	G-3 G	口底高	14.1 6.8 3.3	内外面共回転横ナデ 底部回車 切り	伝糸 胎 細砂粒含む A 色 灰白色 焼 やや不良	ほぼ完形 外面 全体酸化還元焰 によるスス吸着
13	須	恵坏	器	カマド	口底高	14.0 6.8 3.5	内外面共回転横ナデ 底部回転 切り	伝糸 胎 砂粒少量含むA 色 にぶい黄橙色 焼 やや不良	1/2 内外面スス 少量付着
14	須	恵坏	器	G-3 G	口底高	14.0 5.7 4.5	内外面共回転横ナデ 底部回転 切り 内面渦巻き	伝糸 胎 砂粒含むA 色 灰白色 焼 良	1/3
15	須	恵坏	器	G-4 G	口底高	6.4	内外面共回転横ナデ 底部回転 切り	伝糸 胎 細砂粒少量含む 色 暗灰色 焼 やや不良	底部完 内外面 全体酸化還元焰 によるスス吸着
16	須	恵坏	器	G-4G	口底高	12.4 7.4 4.0	内外面共回転横ナデ 底部回車 切り	伝糸 胎 砂粒少量含む A 色 灰色 焼 やや不良	1/3

第20表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(20)

## H-13号住

No.	器種	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
17	須 恵 器 坏	カマド	口 14.0 底 6.0 高 4.0	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒少量含むA 色 にぶい橙色 焼 やや不良	1/5 内外面酸化 還元焰によるス ス吸着
18	須 恵 器	G-3 G	口 13.4 底 6.4 高 3.2	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒含む 色 にぶい黄橙色 焼 やや不良	1/4 内外面酸化 還元焰によるス ス吸着
19	須恵器	カマド	口 15.2 底 8.6 高 3.3	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 細砂粒含む 色 外一暗灰黄色 内一 橙色 焼 良	1/5 外面全体酸 化還元焰による スス吸着
20	須 恵 器 高台付坏	F-3 G	口 13.6 底 8.0 高 5.1	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 砂粒少量含むA 色 灰色 焼 良	2/3
21	須 恵 器 高台付坏	G-4 G F-3 G	口 14.6 底 7.8 高 5.3	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 砂粒少量含む 色 灰白色 焼 良	1/3
22	須 恵 器 高台付坏	F-3 G	口 15.0 底 7.8 高 5.0	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台 高台底部圧痕	胎 砂粒少量含むA 色 灰色 焼 良	ほぼ完形 外面 酸化還元焰によ るスス吸着
23	須 惠 器 高台付坏	G-3G	口 15.4 底 8.0 高 5.0	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台 底部圧痕	胎 砂粒含む 色 灰白色 焼 不良	1/2
24	須 恵 器 高台付坏	F-3G	口 14.4 底 7.6 高4.6~5.2	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台 高台底部圧痕	胎 砂粒少量含むA 色 灰色 焼 良	4/5
25	須 恵 器 高台付椀	G-4 G	口 16.4 底 7.6 高 5.9	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 砂粒少量含む 色 暗灰色 焼 良	2/5 内外面酸化 還元焰によるス ス吸着
26	須 恵 器 高台付坏	G-4 G	口 14.8 底 7.4 高 5.9	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	1/2 内外面酸化 還元焰によるス ス吸着
27	須 恵 器 高台付椀	カマド	口 — 底 7.2 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台 内面黒磨き	胎 砂粒少量含む 色 にぶい橙色 焼 良	1/2
28	須 恵 器 高台付坏	G-4 G	口 14.6 底 8.2 高 5.2	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台 外面墨書有り	胎 細砂粒含むA 色 にぶい黄橙色 焼 良	ほぼ完形
29	須 恵 器 高台付坏	G-3 G G-4 G	口 — 底 7.5 高 3.1	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	底部と体部の一部
30	須 恵 器高台付坏	カマド	口 — 底 8.4 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台 内面渦巻き	胎 砂粒含むA 色 灰白色 焼 良	1/2
31	須 恵 器 高台付椀	カマド	口 — 底 7.8 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 砂粒少量含む 色 褐灰色 焼 やや不良	底部のみ 内外 面酸化還元焰に よるスス吸着
32	須 惠 器高台付坏	カマド G-3G G-4G	口 13.6 底 7.8 高 5.1	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	1/3

第21表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(21)

## H-13号住

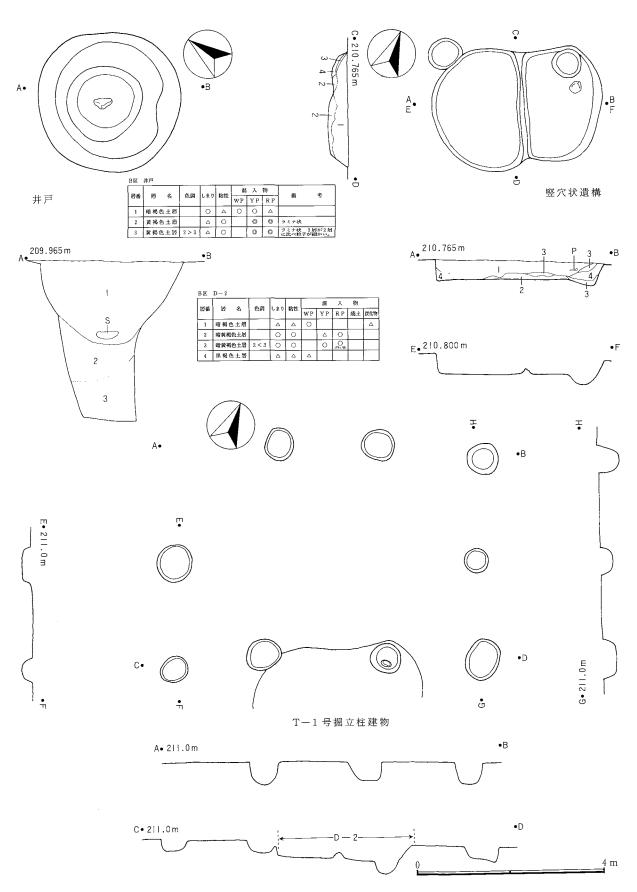
No.	器	種	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
33		惠 器 付坏	G — 4 G	口 15.4 底 8.6 高 5.5	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含む A 色 灰色 焼 良	1/4
34	須高台	惠 器 付坏	カマド G-3G	口 13.0 底 7.0 高 5.4	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 砂粒少量含むA 色 灰色 焼 良	1/4
35	須高台	惠 器 付坏	カマド G一3G	口 14.4 底 7.6 高4.7~5.3	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒少量含むA 色 灰色 焼 良	2/3
36		陶器	G — 3 G	口 16.8 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 細砂粒少量含む 色 灰白色 焼 良	1/8
37		陶器付椀	G — 3 G	口 — 底 8.8 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 砂粒少量含む 色 灰黄色 焼 良	1/5
38		陶器付椀	G-4 G	口 — 底 7.5 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 細砂粒含む 色 灰黄色 焼 良	1/10 内面底部 自然灰釉付着
39	須 ñ	恵 器	F-3 G	口 14.0 底 6.0 高 2.7	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 砂粒少量含むA 色 灰色 焼 良	3/5
40	須瓦	恵 器字 硯	G-3 G	幅 8.5 縦 8.5 高 4.2	内面ナデ 底部一部へラ削り	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	片足欠損のみ
41	- ز	瓦	G — 3 G	狭 — 広 — 長 — 厚2.1~2.5		胎 砂粒少量含む 色 橙色 焼 良	破片
42	羽	口	F-3 G	口 — 長 4.5		胎 色 にぶい橙色 焼	破片
43	羽	П	G — 4 G	口 7.0 底 5.5		胎 色 浅黄橙色 焼	破片
44	土貞	新 器 遷	G — 4 G	口 18.0 底 — 高 6.6	外面口縁部〜頚部横ナデ 胴上部 斜方向へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 淡橙色 焼 良	口辺部〜胴上部 の1/2
45		恵 器	カマド E-5G G-4G	口 30.2 底 — 高 3.0	内外面共回転横ナデ 胴下半部 4 個の通し穴有り	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 やや不良	2/3
46		惠 器	G-4 G	口 — 底 14.4 高 4.0	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り後付高台	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	底部の一部
47		惠器	G-3 G G-4 G	口 — 底 14.0 高 5.0	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	底部と体部の一 部
48	紡翁	垂 車	G-3 G		長 11.3、幅 0.5、厚 0.5 み車径 4.2、厚 0.4、重量 170.7		

第22表 嶺・下原Ⅱ遺跡遺物観察表(22)

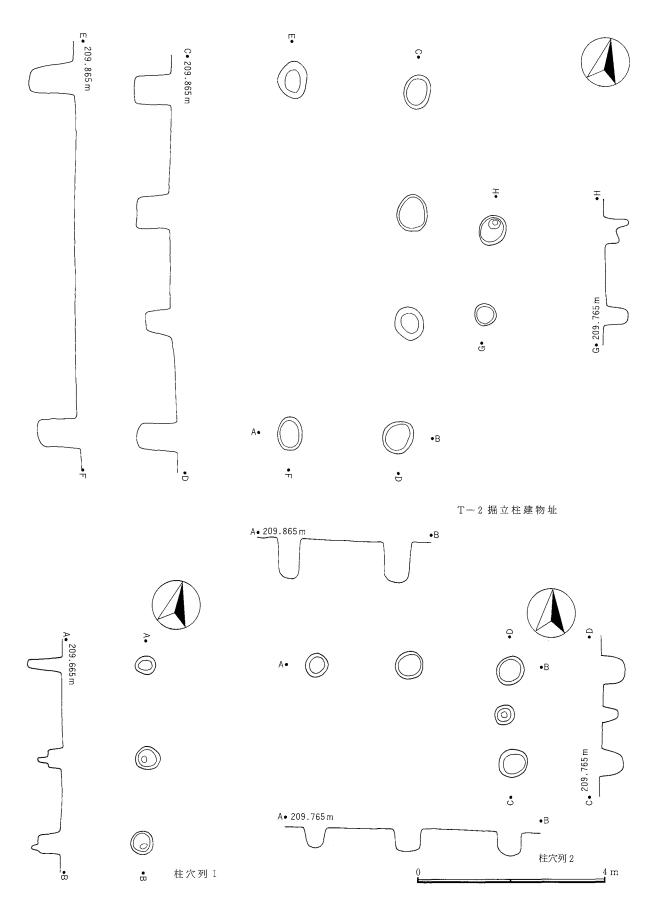
## H-13号住

No.	器 種	出土位置	法量(cm) 器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
49	紡 錘 車 軸 ?	G-4 G	現存長 10.3、幅 0.6、厚 0.5、重量 9.8		
50	刀 子	G-4 G	刀身長 10.6、幅 1.1、厚 0.5、重量 21.0		
51	刀 子	カマド	茎長 3.9、幅 0.6、厚 0.3、重量 3.0		
52	刀 子	カマド	茎長 2.9、幅 0.8、厚 0.4、重量 2.6		
53	刀 子	カマド	茎長 4.0、幅 0.9、厚 0.4、重量 2.9		
54	銅 碗	G — 4 G	現存長 3.0、幅 2.5、厚 0.1、重量 4.1	青銅製	
55	不 明	G — 4 G	現存長 4.3、幅 4.1、厚 2.3、重量 32.2		
56	不 明 バックル?	G-3 G	現存長 4.9、幅 3.0、厚 0.6、重量 22.7		
57	鉄 滓	G-3 G	長 7.5、幅 7.4、厚 2.2、重量 223		
58	鉄	G-4 G	長 6.8、幅 5.5、厚 2.4、重量 110		
59	鉄 滓	カマド	長 5.2、幅 3.8、厚 2.1、重量 52.2		
60	鉄 滓	G — 3 G	長 5.2、幅 4.4、厚 1.8、重量 66.4		
61	鉄 滓	G-4 G	長 5.3、幅 4.7、厚 3.7、重量 98.2		
62	鉄 滓	G-3 G	長 4.0 幅 3.2、厚 1.0、重量 16.0		
63	鉄 滓	G-3 G	長 3.7 幅 2.7、厚 1.7、重量 28.9		
64	鉄 滓	G-3G	長 4.5 幅 3.7、厚 1.5、重量 38.1		
65	鉄 滓	G-3G	長 3.1 幅 2.9、厚 1.4、重量 12.5		
66	鉄 滓	G—4 G	長 3.2 幅 2.2、厚 1.0、重量 4.5		

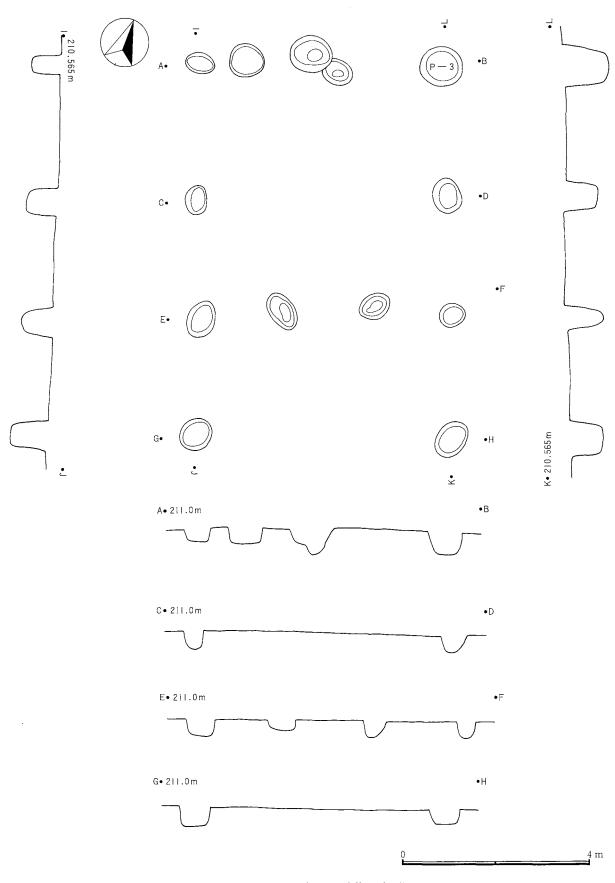
第23表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(23)



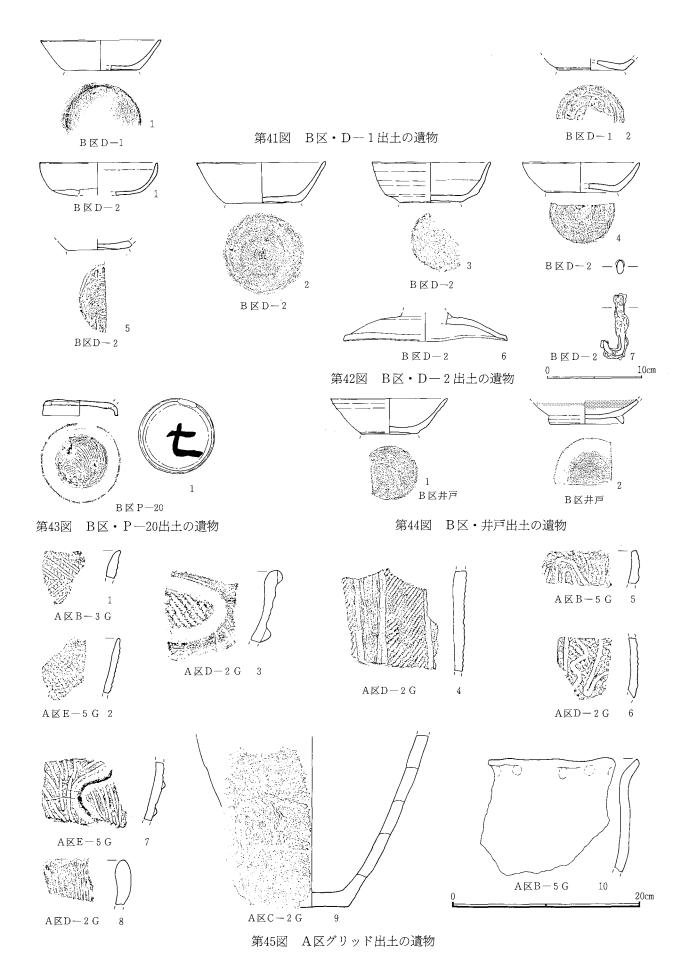
第38図 井戸、竪穴状遺構、T-1号掘立柱建物址実測図

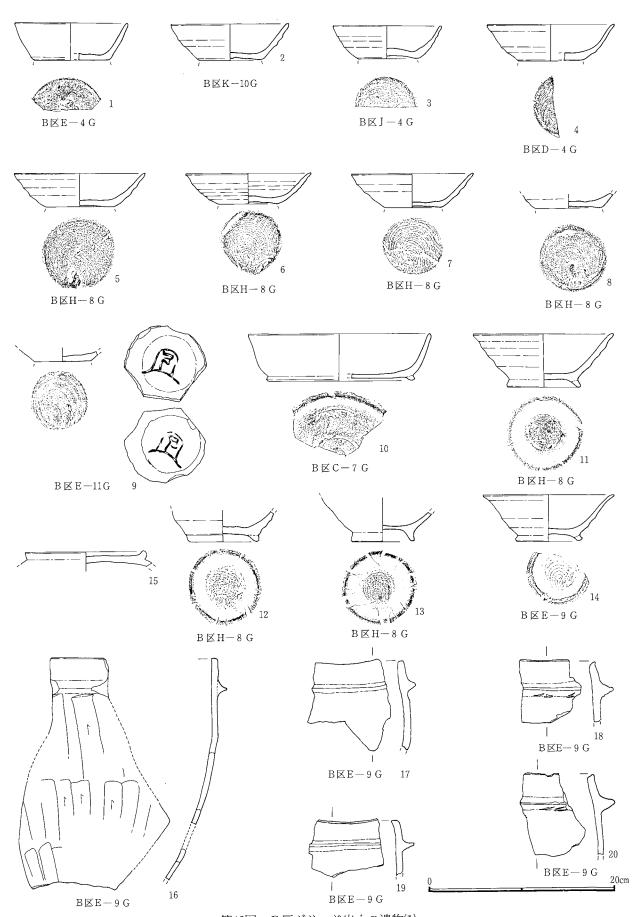


第39図 T-2号掘立柱建物址、柱穴列 $1\cdot 2$ 実測図

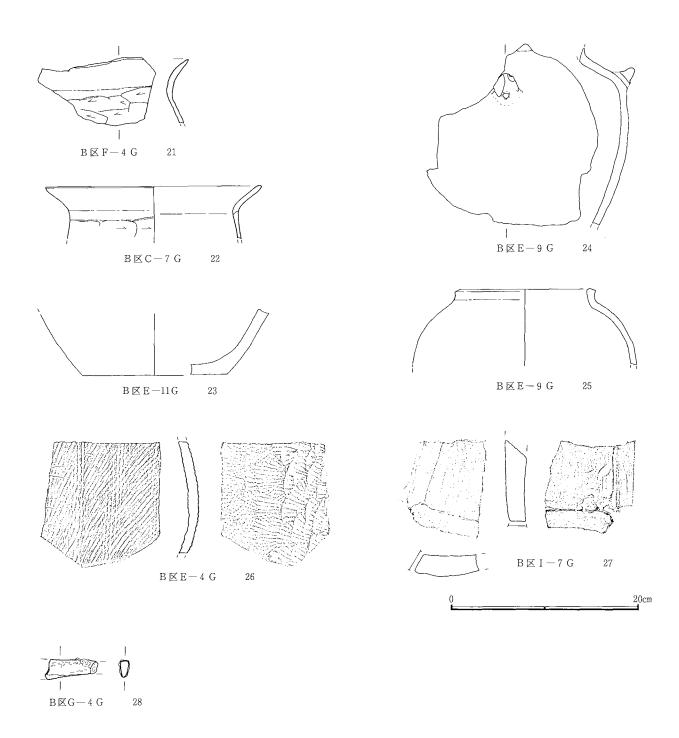


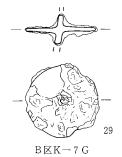
第40図 T-3号掘立柱建物址実測図



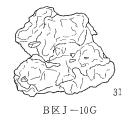


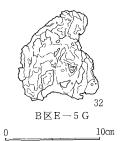
第46図 B区グリッド出土の遺物(1)











第47図 B区グリッド出土の遺物(2)

## D-1

No.	器種	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態•備考
1	須 恵 器 坏	D-1	口 12.9 底 7.8 高 3.2	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	1/2
2	須 恵 器 高台付坏	D-1	口 — 底 7.0 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り 底部圧痕	胎 細砂粒含む 色 黄灰色 焼 良	底部1/2

## D-2

No.	器	種	出土位置	法量(cm	1)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
1	土師坏	器	D-2	底	2.6 — 3.5	外面口辺部横ナデ 底部不定方向 へラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 橙色 焼 良	1/3
2	須 恵 坏		D-2	底 8	3.8 3.0 4.3	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ削り	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	1/2
3	須 恵 坏		D-2	底 6	2.8 5.5 1.3	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒含む 色 灰白色 焼 良	2/5
4	須 恵 坏		D-2	底 7	2.6 7.4 3.2	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 底部圧痕	胎 砂粒含む 色 灰白色 焼 やや不良	2/5 外面スス付着
5	須 恵 坏	器	D-2	1.1	- 6.6 -	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	底部のみ
6	須 恵蓋		D-2	口 ツマミ 高	_	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒含む 色 灰色 焼 良	1/2
7	J字状	金具	D-2	長 3.5、		湾曲径 1.5、厚 0.8、重量 5.0		

## P-20

No	器 種	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
1	須 恵 器高台付椀	P-20	口 — 底 8.0 高 —	底部回転糸切り後付高台 内面渦 巻き 底部外面墨書有り	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	底部のみ

## 井戸

No.	器種	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
1	須 恵 器	B区井戸	口 12.4 底 5.8 高 3.8	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒含む 色 灰黄色 焼 不良	2/5
2	灰釉陶器 高台付椀	B区井戸	口 — 底 7.6 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台	胎 砂粒多量含む 緻密 色 黄灰色 焼 良	底部のみ

第24表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(24)

## A区グリッド

No.	器	種	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
1	縄深	文鉢	B-3 G	口 — 底 — 高 —		胎 繊維を含む 色 焼	破片
2	縄深	文鉢	E-5 G	口 — 底 — 高 —		胎 繊維を含む 色 焼	破片
3	縄深	文鉢	D-2 G	口 — 底 — 高 —	沈潜による楕円区画内に単節斜縄 文を施す	胎 色 焼	破片
4	縄深	文鉢	D-2 G	口 — 底 — 高 —	垂下する沈潜による区画内に単節 斜縄文を施す	胎 色 焼	破片
5	縄深	文鉢	B-5 G	口 — 底 — 高 —	沈潜による区画内に単節斜縄文を 施す	胎 色 焼	破片
6	縄深	文鉢	D-2 G	口 — 底 — 高 —	沈線と単節斜縄文により文様を施す	胎 色 焼	破片
7	縄深	文鉢	E-5 G	口 — 底 — 高 —	沈線文と隆帯により文様を施す	胎 色 焼	破片
8	縄深	文鉢	D-2 G	口 — 底 — 高 —		胎 色 焼	破片
9	縄深	文鉢	C-2G H-2住 一括	口 — 底 7.5 高 —		胎 砂粒多量含む 色 橙色 焼 良	胴中部〜底部の 1/2
10	土	師 器	B-5 G	口 — 底 — 高 12.0	内外面口辺部横ナデ 外面胴上部 ヘラ削り後ヘラナデ 頚部指圧痕 内面胴上部ヘラ削り	胎 砂粒含む 色 にぶい褐色 焼 良	口縁部〜胴上部 の一部 外面ス ス付着

## B区グリッド

No.	器種	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態•備考
1	須 恵 器 坏	E-4 G	口 12.0 底 8.0 高 4.0	内外面共回転横ナデ 底部回転へ ラ切り	胎 砂粒含む B 色 外一灰 内一灰黄 焼 良	1/3 外面自然灰 釉付着 内面砂 粒付着
2	須 恵 器 坏	K-10G	口 12.6 底 6.6 高 3.9	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 内面渦巻き 底部圧痕	胎 砂粒少量含むA 色 灰白色 焼 良	1/3
3	須 恵 器	J — 4 G	口 11.6 底 6.2 高 3.5	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 底部圧痕	胎 砂粒少量含む B 色 灰白色 焼 良	1/2 外面自然灰釉付着
4	須 恵 器	D-4 G	口 13.6 底 6.8 高 3.9	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 外面底部境界指圧痕	胎 砂粒含む 色 外一黄灰色 内一にぶい黄橙 色 やや不良	2/5 口唇部〜外 面酸化還元焰に よるスス吸着

第25表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(25)

## B区グリッド

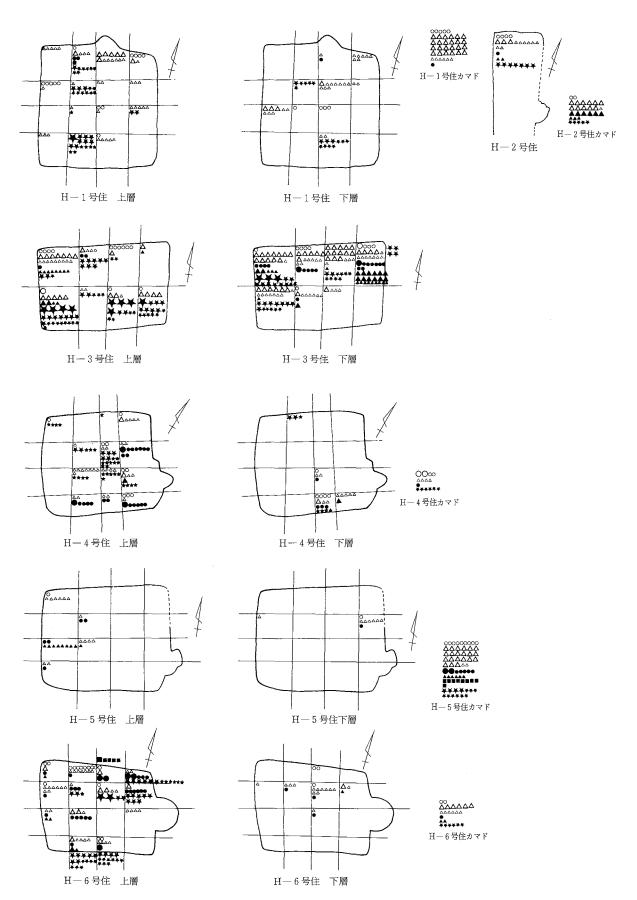
DZ	×Z J y γ F									
No.	器	種	出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態•備考			
5	須 恵 ゼ		H-8 G	口 14.0 底 7.0 高 3.6	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒含むA 色 にぶい黄橙色 焼 やや不良	3/5			
6	須 恵		H-8 G	口 13.4 底 6.0 高 3.3	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 内面渦巻き 底部圧痕	胎 砂粒少量含む 色 黒色 焼 やや不良	7/8 内外面酸化 還元焰によるス ス吸着			
7			H-8 G	口 13.0 底 6.0 高 3.6	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り	胎 砂粒含むA 色 灰白色 焼 不良	3/4			
8	須恵		H-8G	口 — 底 7.0 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 内面渦巻き	胎 砂粒含むA 色 浅黄橙色 焼 不良	底部完形			
9	須恵		E-11G	口 — 底 6.2 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り 内面渦巻き 内外面底部に 墨書有り	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	底部のみ			
10	須高台			口 19.4 底 15.4 高 5.0		胎 細砂粒少量含A 色 灰白色 焼 良	1/4			
11	須高台			口 15.0 底 7.8 高 5.7	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台 高台底部圧痕	胎 砂粒少量含む 色 にぶい橙色 焼 やや不良	1/3			
12	須 高 台		<b>I</b>	口 — 底 7.2 高 —	内外面共回転横ナデ 底部回転糸 切り後付高台 内面渦巻き	胎 砂粒含む A 色 灰色 焼 やや不良	体底部完形			
13	須高台			口 — 底 6.4 高 4.7		胎 砂粒含む A 色 灰白色 焼 やや不良	底部完形			
14	須 原 高 台			口 14.0 底 6.6 高 5.0	切り後付高台	胎 砂粒少量含むA 色 灰黄色 焼 良	2/5			
15	須原円面			口 13.0 底 一 高 1.6	横ナデ	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	2/3			
16	土間羽	币 器 釜		口 — 底 — 高 24.0	外面口辺部横ナデ 突帯貼付後体 部縦方向ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 明褐灰色 焼 やや不良	口縁部〜胴下部 の1/4 外面一部 スス付着			
17	須見羽	息 器	<b>I</b>	口 — 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 小石含む 色 灰白色 焼 良	破片			
18	須履羽	思器		口 — 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ 胴上部ヘラ 削り	胎 砂粒含む 色 灰白色 焼 不良	破片			
19	須思羽	· 器 釜	1	口 — 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒含む 色 灰黄色 焼	破片			
20	須履羽	惠 器 釜		口 — 底 — 高 —	内外面口辺部横ナデ 胴上部ヘラ削り	胎 砂粒含む 色 浅黄橙色 焼 不良	破片			

第26表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(26)

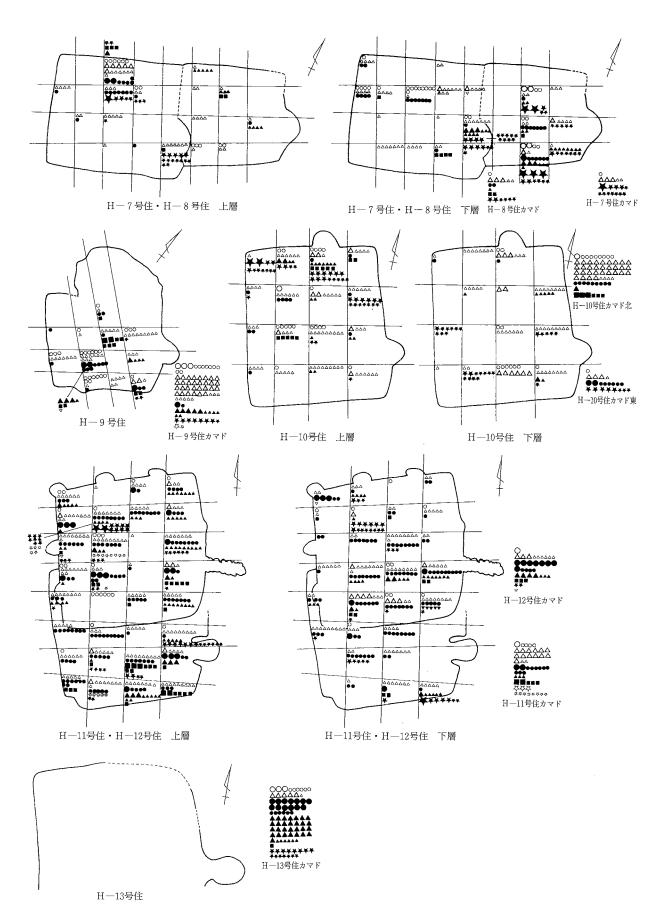
## B区グリッド

No.	器	景 種		出土位置	法量(cm)	器形・技法等の特徴	胎土・色調・焼成	残存状態・備考
21	須	恵甕	器	F-4 G	口 — 底 — 高 —	内外面共回転横ナデ 胴上部横方 向へラ削り	胎 砂粒含む 色 橙色 焼 良	破片
22	土.	師	器	C-7 G	口 23.0 底 — 高 —	外面口辺部横ナデ 胴上部横方向 ヘラ削り 内面横ナデ	胎 砂粒含む 色 にぶい橙色 焼 良	口辺部1/4
23	須	恵甕	器	E-11G	口 — 底 15.4 高 —	外面体部横方向へラ削り 底部へ ラ切り 内面横ナデ 外面当て具 痕	胎 砂粒少量含む 色 灰色 焼 良	破片
24	須	恵壺	器	E-9 G	口 — 底 — 高 19.0	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒含む A 色 灰色 焼	体部1/4
25	須	恵壺	器	E-9 G	口 13.8 底 — 高 8.1	内外面共回転横ナデ	胎 砂粒含むA 色 灰色 焼	口縁部〜胴上部の一部
26	須	恵甕	器	E-4 G	口 — 底 — 高 —		胎 色 焼	破片
27		瓦		I — 7 G	狭 — 広 — 長 — 厚2.0~2.5		胎 砂粒少量含む 色 橙色 焼 良	破片
28	刀		子	G-4 G	現存長 2.9、	幅 1.1、厚 0.4、重量 21.0	茎の先端?	
29	紡	錘	車	K-7 G		浸 1.6、幅 0.3、厚 0.3 み車径 3.8、厚0.2、重量 21.0		
30	鉄		滓	H - 8 G	長 5.8、幅	5.2、厚 2.2、重量 89.4		
31	鉄		滓	J —10 G	長 5.4、幅	4.7、厚 2.1、重量 63.5		
32	鉄	:	滓	E-5G	長 4.7、幅	4.3、厚 2.5、重量 77.1		

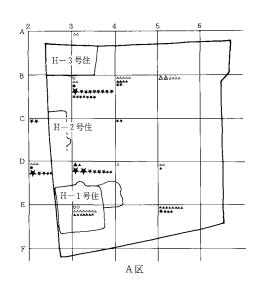
第27表 嶺·下原II遺跡遺物観察表(27)



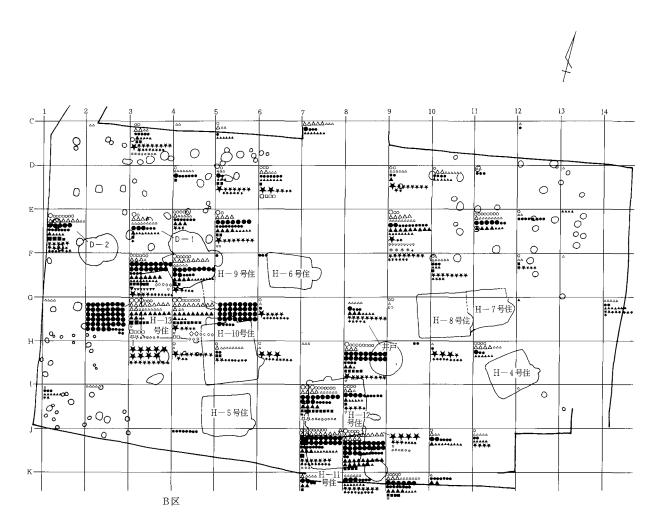
第48図 住居址16分割遺物出土状況(1)



第49図 住居址16分割遺物出土状況(2)







第50図 グリッド遺物出土状況

# VII 成果と問題点

## 1 嶺・下原Ⅱ遺跡における土器群の変遷について

本遺跡からは、13軒の住居址が検出されている。これらの住居の内、H-7号住居址とH-8号住居址、H-11号住居址とH-12号住居址が重複している。しかしこれらそれぞれの住居間には、あまり時期差がなく近時した時期に存在していたと思われる。そのため、住居内の組み合わせから画期を求め、期の設定に導きたい。しかし、住居間の遺物出土量にばらつきが見られ、また、良好な資料が得られなかったため、遺跡内独自に土器の編年を見ることはできない。よって、同じ安中市内で今までに調査された同時代の遺跡の土器資料及び、群馬県内の当期の土器編年案に当てはめ、当遺跡の土器群の変遷過程を見てみたい。

#### 第一段階

この段階はH-3号住居址出土の遺物を指標とした。器種組成は、土師器坏、甕、甑、須恵器坏、甕、壺、長頸壺、灰釉陶器 である。

この段階の土師器坏は、口縁部に顕著な屈曲を持つものは消え、前段階に出現した体部から丸みをもって内湾して口縁部に至るタイプが主流となり、以後この種の形態が土師器坏の基本的なものとなる。また、前段階の厚みのあるタイプとは系統を異にすると考えられる。当住居からは、完形の土師器坏は出土していないが、破片からも大ぶりな事がわかる。土師器甕は、長胴化の傾向が顕著である。構成器種の大半は、土師器でしめられ、須恵器は数器種に限られている。

各器種の特徴は次のとおりである。

土師器坏:1 丸底で、口縁部が「く|字状に内傾している。

2 口縁部は横ナデ、体底部はヘラ削り成形が施される。

土師器甕: 1 長胴で口縁部は水平方向に開き、最大径を口縁部に有する。整形は、胴部外面に縦方向のへう削り、内面に横方向のナデを施す。

- 2 長胴で、口縁部は強く外反する。胴部最大径は、ほぼ中位に位置し、口径と大差無い。 整形は、胴部外面に縦方向のヘラ削り、内面に横方向のナデを施す。
- 3 最大径を胴部中位に持ち、球状の胴部から直立して外反する口縁部を持つ。

須恵器高台付坏:器肉の厚い底部から、体部下位に僅かな丸みを持ち、外反気味の口縁部に至り、断面 台形の短い台部が内側で接地する。

須恵器甕:横に張った器肉の厚い胴部から、短く外反する口縁部に至る。

#### 第Ⅱ段階

この段階は、H-1、H-4、H-7、H-8、H-10号住居址出土の遺物を指標とした。 機種組成は土師器坏、甕、甑、台付甕、小形甕、球胴甕、須恵器坏、椀、高坏、蓋、小形瓶、長頸壺、 灰釉陶器である。

この段階の土師器坏は平底化が進み、形態が多様化する。同形態の中で大小の別が見られる。また、

暗文を施すものが出現する。土師器甕は、器肉が薄くなり短胴化が進む。口縁部は「く」の字状となり、 最大径が胴部中位に位置する。前段階よりも、膨らみのある長胴部を持つものもある。須恵器は、当遺 跡において、器種内容が最も充実した構成を示し、出土量が増加する。しかし、土師器を凌駕するまで には至っていない。蓋は、内面に"かえり"がつくものが存在する。

各器種の特徴は次のとおりである。

- 土師器坏: 1 器肉が厚く、平底気味の底部から深い体部が直線的に立ち上がり、内面に螺旋あるいは 放射状、または両者の組合わさった暗文へラ磨きを施す。
  - 2 薄手で、僅かな丸底から浅い体部に至り、口縁部が内湾気味に直立するもの。大小の別があり、扁平な形状を呈する。
  - 3 内湾する体部から外反気味の口縁部に至る。
  - 4 平底気味の底部から内湾し、口縁部が短く立ち上がり大ぶりなもの。
  - 5 整形は、口縁部横ナデ、体部は全面へラ削り。
- 土師器甕: 1 長胴で、強く外反した口縁部に、口径と大差ない最大径を胴部上位に持つ。整形は胴部 上位に縦、下位に斜位のヘラ削りが施される。
  - 2 口縁部が「く」の字状に外反し、最大径を胴部中位に持つ。整形は、胴部上位に斜位、 下位に横位のヘラ削りが施される。
  - 3 口縁部が「く」の字状に外反し、最大径を胴部中位に持つ。整形は、胴部上位に横位、 下位に斜位にへう削りが施される。
  - 4 口縁部が、緩やかに外反し、最大径を胴部中位に持つ。整形は、胴部上位に斜位、下位 に縦位のヘラ削りが施される。
  - 5 直立気味の短い口縁部は、器肉が厚く、肩部に顕著な縦位のヘラ削りが施される。
  - 6 「く」の字状の短く厚い口縁部を持つ。
- 須恵器坏:1 径の大きい底部から、直線的に外傾する体部に至る。
  - 2 上げ底気味の底部で、口縁部に向かって薄くなる。
  - 3 底部調整は、回転ヘラ切り後手持ちのヘラ削りを基調にしている。
- 須恵器高台付椀:器肉は、厚い底部から口縁部に向かうにしたがい薄くなる。体部は、直線的に外傾し、 断面三角形で「ハ」の字に開く高台を付す。
- 須恵器蓋:1 天井部から緩やかに内湾し、口縁部に短い返りが付く。
  - 2 水平な天井部から、緩やかに内湾する体部を経て、口縁部が垂直に折れる。

### 第||段階

この段階は、H-6号住居址出土の遺物を指標としたが、良好な資料が少なく明瞭ではない。器種組成は、土師器坏、甕、須恵器坏、甕、蓋、高坏の脚である。

土師器坏の口縁部が内湾気味に直立していた形状が、若干変化して外傾してくる。また、内面に暗文を施すタイプの坏は、螺旋暗文と放射状暗文が単独で成されることが多くなる。土師器甕は、口縁部の外反が弱まり、前段階よりも胴部の張りが上位に移動する。そして、器肉が、顕著な薄手になる。 各器種の特徴は次のとおりである。

土師器坏: 内面に放射状暗文のみを施し、口縁部に行くにしたがい器肉が薄くなる。

土師器甕:1 口縁部が緩やかに外反し、胴部上位に横位のヘラ削りを施す。

2 口縁部の器肉が、厚く短く外反する。

#### 第Ⅳ段階

この段階は、H-5号住居址出土の遺物を指標とした。器種組成は土師器坏、甕、須恵器坏、椀、蓋、壺である。

この段階より、土師器の衰退傾向が見られる。土師器坏は、体部の丸みが消え、直線的になり平底化の傾向が強く、底部と体部の区別が明確になる。土師器甕は、前段階とほとんど変化が見られないが、小形化の傾向にあり、口縁部の外反の度合いが弱く、胴部に膨らみのあるものが一般化する。この段階の須恵器は、底部の切り放し技法が富んでいるが、当遺跡からの須恵器坏については、完形のものが出土していないため、明瞭にする事が出来ない。

各器種の特徴は次のとおりである。

土師器坏:底部を意識させるように体部下半に緩い屈折を形成し、体部は、丸みが消え直線的なもの。 口縁部はつまみ出され、外反気味に内湾する。

土師器甕: 1 短い口縁部が緩やかに外反し、肩部の張りが大きく、口径と大差ない最大径が胴部上位 に位置する。整形は、胴部上位に横位、下位に斜位のヘラ削りを施す。

- 2 器肉は薄くなり、胴部中位に膨らみを持って短胴化が進む。
- 3 口縁部の屈曲は弱くなる。
- 4 口縁部が短く立ち上がり、胴部が球状のもの。
- 5 胴部上位に横位、中位下位に斜縦位のヘラ削りを施すもの。

須恵器坏:口縁部は、緩く外反して開き、器高が低く偏平な形状を呈する。

須恵器高台付坏:深く直線的に立ち上がる体部をなす。高台は底部の外縁に巡り、断面三角形の高台から直接体部が延びる。

須恵器蓋:直線的な体部から内傾する口縁部に至る。

### 第Ⅴ段階

この段階は、H-9、H-11、H-12、H-13号住居址出土の遺物を指標とした。器種組成は土師器坏、甕、甑、須恵器坏、甕、高台付椀、皿、蓋、甕、小形甕、壺、鉢、硯、把手、甑、瓦、ふいご、灰釉陶器、墨書土器である。

この段階の土師器坏の体部には、ほとんどの場合指頭による整形痕が明瞭に残されるが、指標とした 当住居からは出土していない。土師器甕の全体的傾向としては、「コ」の字口縁甕の口縁形態の崩壊段階 として位置づけられる。須恵器の底部調整は、全て回転糸切り無調整となる。

各器種の特徴は次のとおりである。

土師器坏:胴部に丸みを持ちやや深く、体部と口縁部は緩く外傾して開く。内面に放射状の暗文を施す。 土師器甕:1 「コ」の字状口縁部の痕跡を止めないもので、口縁部の器肉が厚く、屈曲に鋭さがみられ ない。胴部上半部の張りも弱い。

- 2 「コ」の字状口縁の痕跡を止めるもので、胴部上半の張りがわずかに残る。
- 3 全体に器肉が薄く、丸みを持つ胴部上位から、直立して上位が短く外反する「コ」の字

状の口縁部に至る。

須恵器坏:1 浅い体部が直線的に開く。

- 2 底径が小さく下位に僅かな膨らみを持って外反する。
- 3 体部に丸味を持ち、口縁部が外反するものに分かれ、いずれも底部は回転糸切りである。

須恵器高台付坏:1 直線的に外傾する体部を持つ。

- 2 やや丸味を持って開く体部で、断面三角形の高台を付す。
- 3 丸味を持って開く体部で、轆轤痕が顕著なもの。

須恵器蓋:緩やかに湾曲する体部で垂直に折れる口縁部を持つ。

#### 小 結

#### a 各器種別の変遷

前述のように段階的に変遷した土器の各器種についての変遷を追ってみたい。土師器坏では、第Ⅰ段階で口縁部が「く」の字状に内傾していたものが、第Ⅱ段階になると短く立ち上がる様になる。体部も形態が多様化し、平底化が進む。内面に放射状、または螺旋状の暗文を施すものが現れる。第Ⅳ段階になると土師器が衰退し始め、底部と体部の区別が明瞭となる。

土師器甕は、第 I 段階では器肉が厚く口縁部の屈曲が顕著であり、胴部に膨らみを持たないが、第 II 段階では、口縁部の屈曲も弱まり、胴部に僅かな膨らみを持つようになる。第 III・IV 段階になると器肉が薄くなり、短胴化してくる。また、口縁部の外反の度合いも弱くなり、胴部に膨らみを持つ。第 V 段階では、器肉が厚くなり、既に「コ」の字状口縁の崩壊が始まり、短く外反するようになる。整形も雑になり、次第に退化へと向かう。

須恵器は当遺跡では7世紀後半から出現するが、出土量は少なく、また、底部まで残存しているものがより少ないために、底部整形技法の時期的変化を明確に追うことは出来なかった。しかし傾向として、底径はだんだんと小さくなり、口縁部は外反してくるようである。

須恵器蓋についても、明瞭な変化を追うことは出来なかったが、8世紀前半には、この時代に特徴的な口縁部に返りをもつものが観られた。

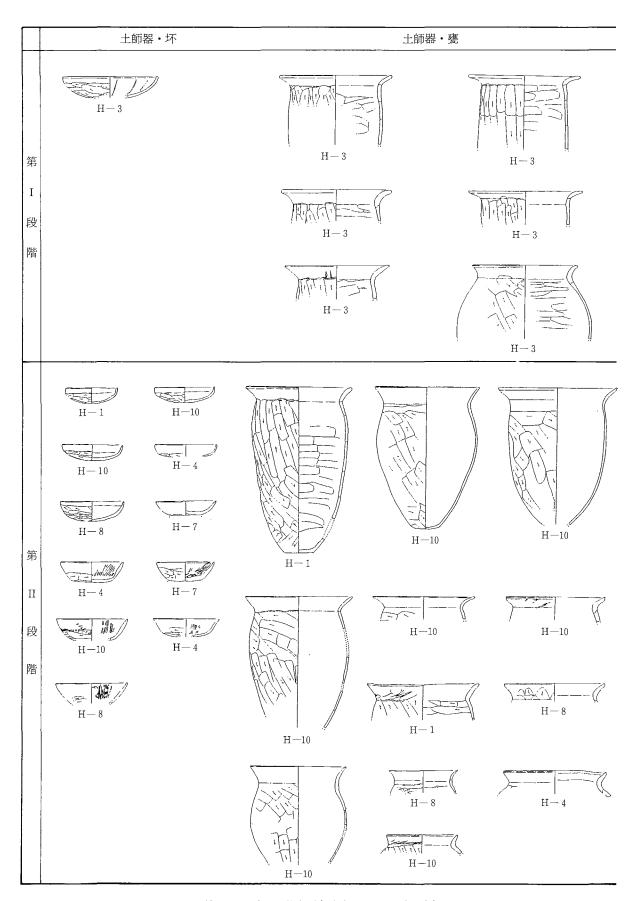
その他の器種についても出土遺物が少ないため、変化をたどることは出来なかった。

次に、当遺跡における土師器、須恵器の消長をたどってみたい。須恵器は第Ⅰ段階より出土するが、あまり観られず、主体は土師器である。土師器の盛行は第Ⅱ段階である。土師器坏は第Ⅱ段階の前後ではあまり出土していないが、土師器甕の出土量は多く、全段階で多くの資料を観ることが出来る。だが、口縁部のみの出土が多く、明確な資料提示は出来ない。須恵器の盛行は、第Ⅴ段階であり、甑も観られるようになる。須恵器は、全段階で出土量が少ない。

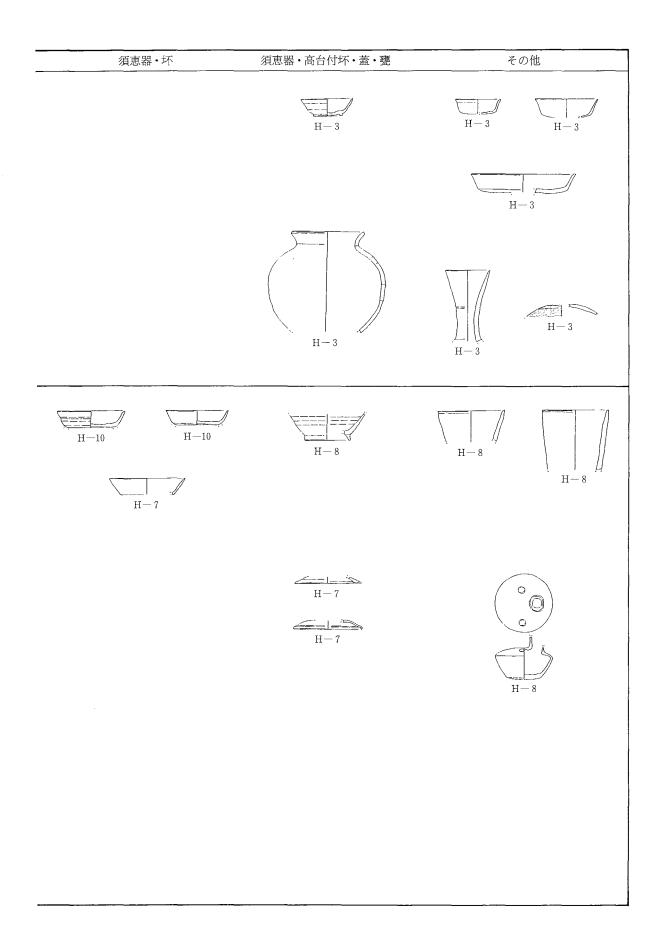
当遺跡では遺物量、器種とも数が少なく明瞭な変遷をたどることが出来なかったものの、概ね坂口一 氏、三浦京子氏の「奈良、平安の土器編年」に添った土器様相の変化を見いだすことが出来た。

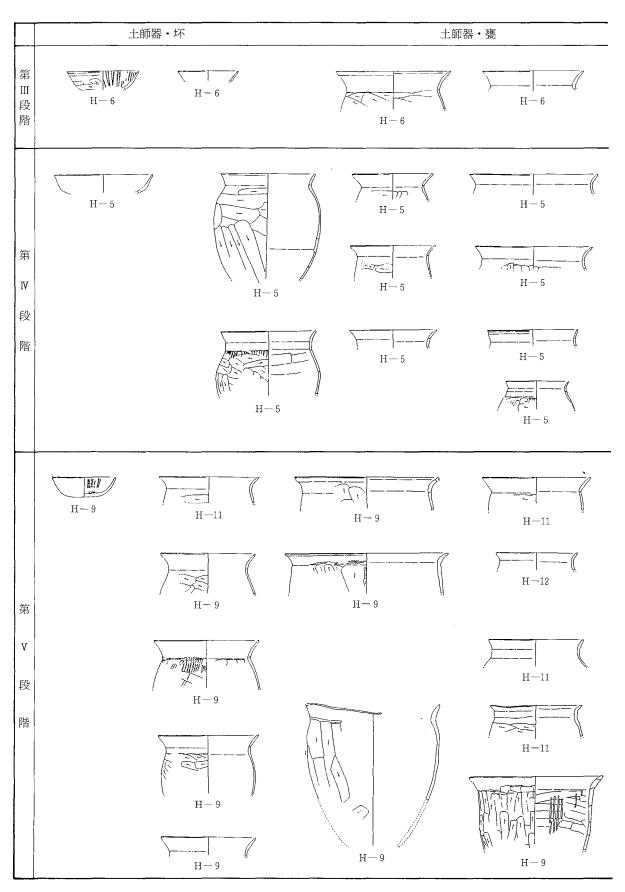
## b 実年代の推定

当遺跡においては、良好な資料と成り得る出土遺物が少なく、実年代を推定するのは非常に困難である。そこで、ここでは坂口一氏、三浦京子氏の「奈良・平安の土器編年」、また、今までに調査された安中市内の同時代の土器資料と対比しながら想定してみたい。

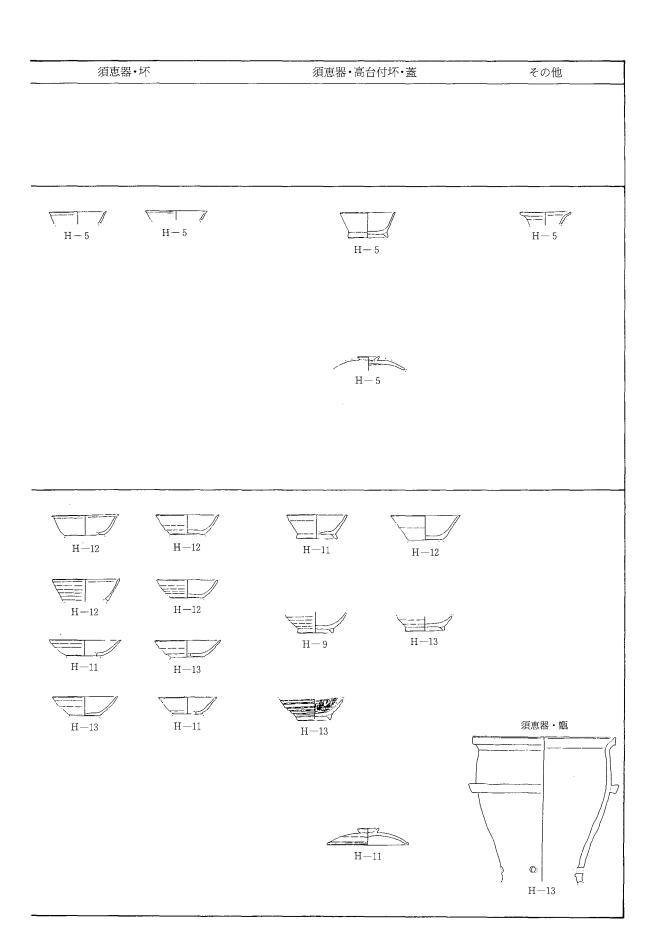


第51図 嶺・下原Ⅱ遺跡出土土器の変遷(1)





第52図 嶺・下原Ⅱ遺跡出土土器の変遷(2)



第Ⅰ段階においては、土師器坏の形態、甕のヘラ調整及び口縁部の形態から、「奈良、平安の土器編年」のⅧ、IX段階に対比され、7世紀後半と考えられる。第Ⅱ段階は、内面にミガキの施された土師器坏、頸部の屈曲が明瞭な甕、返りを持つ須恵器蓋等の形態から同、Ⅲ、IV段階に対比され、8世紀前半と考えられる。

第III段階は、土師器坏、甕の形態から同、IV、V段階に対比され、8世紀中頃と考えられる。 第IV段階は、土師器坏、甕、須恵器坏の形態から同、V、VI段階に対比され、8世紀後半と考えられ z

第V段階は、土師器坏の形態、「コ」の字状の口縁を持つ土師器甕、及び「コ」の字状口縁がくずれはじめていること、また、須恵器坏、蓋の形態より同、IX、X段階に対比され、9世紀後半と考えられる。

## 2 古墳時代~奈良・平安時代の住居構造について

### (1) 住居形態の分類

嶺・下原II遺跡からは13軒の住居址を検出した。嶺・下原遺跡(千田1991)で確認された28軒と併せ、合計41軒の住居址を分析対象とする。分類基準は嶺・下原遺跡を参考に次のとおりとした。

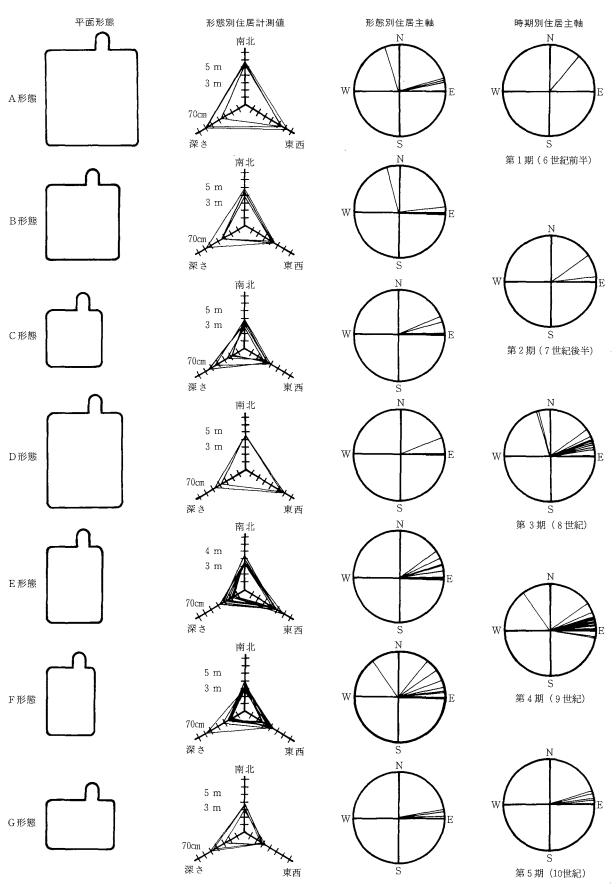
- ◆ 大型正方形 (A形態・一辺5~6 m、住居面積25m²以上)
- ◆ 中型正方形 (B形態・一辺3~4m、住居面積18m²前後)
- ◆ 小型正方形 (C形態・一辺3 m前後、住居面積12m²前後)
- ◆ 大型縦長方形(D形態・一辺4~5m、住居面積23m²前後)
- ◆ 中型縦長方形(E形態・一辺3~5m、住居面積17m²前後)
- ◆ 小型縦長方形 (F形態・一辺2~4m、住居面積12m²前後)
- ◆ 小型横長方形(G形態・一辺2~4m、住居面積12m<sup>2</sup>前後)

## A 形態 (大型正方形)

H-4号住(嶺・下原)・H-10号住(嶺・下原 II)・H-12号住(嶺・下原 II)がA 形態に属する。掘り込みをみるとH-12号住(嶺・下原 II)が約33cm、他 2 軒は約60cmと深い。柱穴はすべての住居址に認められ、H-4号住(嶺・下原)は主柱穴と思われる 4 基の柱穴が規則的に配置されている。H-12号住(嶺・下原 II)では住居址床面、周壁に柱穴が認められ、周壁の柱穴は北壁、西壁にほぼ等間隔で配され、礎石を思わせる礫も確認された。付属施設については、カマドはすべての住居址で東壁に付設されているが、H-10号住(嶺・下原 II)は北壁にも存在する。H-12号住(嶺・下原 II)は遺存状態が良好であり、煙道部は側壁と天井部が礫で構築され住居外へ長く延びる構造である。また 3 住居址に共通してカマド右側に貯蔵穴が存在し、周溝も確認された。主軸方向は $N-74^\circ-E\sim N-78^\circ-E$ の  $4^\circ$ の範囲となる。また、面積算出は不可能であるが、H-13号住(嶺・下原 II)も A 形態に属すると推測される。

### B形態(中型正方形)

H-8 号住(嶺・下原)・ H-12号住(嶺・下原)・H-1 号住(嶺・下原 II)が B 形態に属する。掘り込みは H-12号住(嶺・下原)・H-1 号住(嶺・下原 II)が約32cm であるのに対し、H-8 号住(嶺・



明確な形態区分が可能な住居址のみ表示。時期別主軸は一部重複する遺構が存在する。 第53図 形態別・時間別住居計測値

下原)は約56cmと深い。柱穴は、H-12号住(嶺・下原)に 7 基確認されている。付属施設は、H-1号住(嶺・下原II)のみ北壁やや南寄りにカマドが付設され、H-8号住(嶺・下原)は東壁南寄り、H-12号住(嶺・下原)は東壁中央に付設されている。周溝はH-12号住(嶺・下原)南壁下に確認された。貯蔵穴はH-1号住(嶺・下原II)に不明確なものが検出された。主軸方向は $N-15^\circ-W\sim N-91^\circ-E$ となり $106^\circ$ の範囲となる。

#### C形態(小型正方形)

H-11号住(嶺・下原)・H-16号住(嶺・下原)・H-21号住(嶺・下原)・H-23号住(嶺・下原)・H-23号住(嶺・下原)が C 形態に属する。掘り込みは約16cm~約52cmと幅がある。柱穴はすべての住居址において住居址内外共に確認されていない。付属施設はH-16号住(嶺・下原)・H-21号住(嶺・下原)・H-21号住(嶺・下原)・H-25号住(嶺・下原)の東壁南寄りにカマドが確認されたが、H-11号住(嶺・下原)では確認されなかった。また、H-21号住(嶺・下原)のカマドは遺存状態が良く、礫で構築された煙道部が住居外へ長く延びる構造となり、H-25号住(嶺・下原)も側壁に多量の礫を使用し、同様に煙道部が住居外へ長く延びる。貯蔵穴はH-16号住(嶺・下原)カマド右側に確認された。主軸方向はN-67°-E~N-90.5°-Eとなり、範囲は23.5°となる。

### D形態 (大型縦長方形)

H-5 号住(嶺・下原)・H-15号住(嶺・下原)がD形態に属する。掘り込みはそれぞれ約46cm、約36cmである。両住居址とも4 基の主柱穴が確認されており、H-15号住(嶺・下原)では西壁中央部にも1 基柱穴が認められた。付属施設は、共通してカマドが東壁南寄りに付設されており、H-5 号住(嶺・下原)には周溝も確認された。主軸方向はN-68° $-E\sim N-89.5$ °-Eとなり、範囲は21.5°となる。また、面積算出は不可能であるが、H-19号住(嶺・下原)がD形態に属すると推測される。

### E 形態(中型縦長方形)

H-1号住(嶺・下原)・H-9号住(嶺・下原)・H-13号住(嶺・下原)・H-14号住(嶺・下原)・H-4号住(嶺・下原 II)・H-5号住(嶺・下原 II)・H-8号住(嶺・下原 II)が E 形態に属する。据り込みは約14cm~約36cmである。柱穴はすべての住居址で明確なものは検出されなかった。付属施設は、すべての住居址で東壁南寄りにカマドが付設されている。貯蔵穴はH-1号住(嶺・下原)・H-13号住(嶺・下原)・H-8号住(嶺・下原 II)のカマド右側に確認された。また、H-4号住(嶺・下原 II)・H-5号住(嶺・下原 II)のカマド右側には貯蔵穴状の浅い掘り込みが存在する。H-4号住(嶺・下原 II)・H-8号住(嶺・下原 II)・H-14号住(嶺・下原)には周溝を確認し、H-4号住(嶺・下原 II)・H-14号住(嶺・下原)には、周溝に沿った小ピットと壁に数基の横穴を確認した。H-8号住(嶺・下原 II)には床下土坑が確認された。主軸方向はH-149年(〜H-149年)、範囲はH-149年(〜H-149年)、

### F形態(小型縦長方形)

H-3 号住(嶺・下原)・H-17号住(嶺・下原)・H-20号住(嶺・下原)・H-24号住(嶺・下原)・H-27号住(嶺・下原)・H-6 号住(嶺・下原 $\Pi$ )・H-7号住(嶺・下原 $\Pi$ )・H-9号住(嶺・下原

II)がF形態に属する。掘り込みはH-17号住(嶺・下原)が約56cmと深く、他は約20cm前後を計る。柱穴はすべての住居址で明確なものは確認されなかった。付属施設は、カマドが東壁南寄りに付設されたH-3号住(嶺・下原)・H-17号住(嶺・下原)・H-27号住(嶺・下原)・H-7号住(嶺・下原II)、東壁中央に付設されたH-20号住(嶺・下原)・H-6号住(嶺・下原II)・H-9号住(嶺・下原)はカマドが確認されなかった。H-20号住(嶺・下原)・H-27号住(嶺・下原)のカマドは礫が使用されており、煙道部が住居外へ長く延びる構造となっている。貯蔵穴はH-3号住(嶺・下原)・H-17号住(嶺・下原)・H-6号住(嶺・下原)・H-7号住(嶺・下原 II)・H-7号住(嶺・下原 II)・H-7号住(嶺・下原 II)・H-7号住(嶺・下原 II)のカマド右側に存在する。H-17号住(嶺・下原)・H-9号住(嶺・下原 II)には周溝が確認され、H-7号住(嶺・下原 II)・H-9号住(嶺・下原 II)には床下土坑が存在する。主軸方向はH-17号住(嶺・下原)がH-17号住(嶺・下原 II)には床下土坑が存在する。

## G形態 (小型横長方形)

H-7号住(嶺・下原)・H-10号住(嶺・下原)・H-22号住(嶺・下原)がG形態に属する。掘り込みはH-22号住(嶺・下原)が約28cm、H-10号住(嶺・下原)が約44cm、H-7号住(嶺・下原)は約50cmを計る。柱穴はすべての住居址で確認されなかった。付属施設は、カマドが東壁南寄りに付設され、H-22号住では、煙道部が住居外へ長く延びる構造となっている。主軸方向はN-80° $-E\sim N-88$ °-Eとなり、範囲は8°となる。

以上、形態別に住居址を概観したが、それらの特徴をまとめておきたい。A形態、D形態の住居址には明確な柱穴が確認され、周壁の柱穴内に礎石をもつものも検出された。柱穴は住居の小型化に伴いみられなくなることが一般的であるが、本遺跡の場合もその傾向が認められる。また、掘り込みに関しては住居の小型化に伴って浅くなる傾向を示すが、小型G形態においては、深い掘り込みを確認した。この他、住居址付属施設の周溝は比較的規模の大きいものに認められることが一般的であるが、本遺跡においては大型に区分したA形態・D形態の他、小型のF形態にも数軒確認されている。貯蔵穴はA形態のすべての住居址と、E・F形態の住居址に多く認められている。住居址の主軸方向をみると、住居の小型化に伴い主軸方向は北方向から東方向へ傾く。

なお、嶺・下原、嶺・下原Ⅱ遺跡において最も多く認められる形態はE・F形態であった。

### (2) 住居形態の段階変遷

これまでに分類した住居形態と検出された土器群から住居址の段階変遷について概観したい。住居址の年代観については、住居址そのものからは重複関係により相互の相対年代以外求めることができないため、住居址内出土の遺物により時期を判断し、この設定に従い位置づけを行うこととした。嶺・下原II遺跡では土器群を5細分しているが、嶺・下原遺跡では8細分しているため、これらを併せI~Ⅷ期に段階変遷した。また、住居形態、出土遺物による時期決定が可能な住居址に限り検討した。各住居形態と土器群からみた段階変遷を示したものが第29表である。平面形態が正方形の住居址はA形態・B形態であり断続的ではあるがII期からⅧ期にかけてみられるのに対し、C形態はVI期・Ⅷ期の9世紀にのみ出現している。縦長方形の平面形態はD形態がⅢ期からVI期に断続的に存在し、E形態は2軒から3

※H-1 IIは嶺・下原Ⅱ遺跡の住居址を示す

第1期6世紀		H-20		
—————————————————————————————————————				
第2期7世紀				
_	H – 8		Н-3 П	
第 3 期 8 世紀	H-4 H-5		H-4 II	H-1 II H-7 II H-8 II H-6 II
			H-13 H-14 H-5 II	
第 4 期 9 世紀	H-11 H-15 H-16	H-12	•	
	H — 9	$\begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	$ \begin{array}{c ccccccccccccccccccccccccccccccccccc$	$  \begin{array}{cccccccccccccccccccccccccccccccccccc$
第 5 期 10世紀	H-18	H-2 H-3 H-6		
_				

第28表 土器段階変遷による住居址の存続時期

		A形態	B形態	C形態	D形態	E形態	F形態	G形態
I	6 C 前 半						H-20	
II	7 C 後 半		H-8					
III	8 C 前 半	H-4 H-10 II	H—1 II		H—5	H-4 II H-8 II	H-7 II	
IV	8 C 中 半						H-6 II	
V	8 C 後 半	H—4			H-5	H—13 H—14 H—5 II		
IV	9 C 前 半		H—12	H-11 H-16	H-15			
VII	9 C 後 半	H-12II (H-13II)	H-12	H-21 H-25	(H—19)	H-1 H-9	H-17 H-24 H-27 H-9 II (H-26)	H-7 H-22
AIII	10 C 代	H—12II				H-9	H-3	

形態分類・土器による時期決定ができる住居址のみで検討。括弧はその形態に属すると思われる住居址を表す。

軒の数を保ちⅢ期からⅧ期、一部Ⅷ期まで断続的にみられる。F形態は同じ小型のC形態とは対照的に、I期からⅧ期まで断続的に存在し、Ⅷ期に住居址軒数のピークをむかえている。G形態はⅧ期にのみ認められる特徴をもつ。

以上見てきたように、本遺跡においては次のような特徴があげられる。

- ① 大型・中型の住居址は長い期間断続的に存在し、その中でもE形態の軒数が多い。
- ② 小型の住居址は、F形態が長期間断続的に存在するもののVI期、VII期にピークが認められる。

嶺・下原遺跡(和田・千田1991)において住居址の平面形態が大型から小型へ変化するとの結果を導き出したが、嶺・下原 II 遺跡と併せて検討した結果、かならずしも時代をおっての大型から小型へといった変化は認められない事が明らかとなった。大型・中型の住居址は継続的に存在し、9世紀に入るとそれらに小型の住居址が多く伴ってくるようである。

## 3 集落の変遷

これまでに住居形態、土器群の変遷をもとにした段階変遷を検討してきたが、これらもふまえて嶺・ 下原遺跡、嶺・下原Ⅱ遺跡の集落の変遷過程について概観したい。

本稿では土器群を8段階に細分しているが、集落全体の流れを見るためある程度の時間幅をもち検討したいと考え、土器群の段階変遷を以下のようにいくつかにまとめて区分し、観察することとする。

第1期	6世紀前半	I期
第2期	7世紀後半	II期
第3期	8世紀	∭∼V期
第4期	9 世紀	VI~VII期
第5期	10世紀	VIII期

なお、第 4 期のH-12号住(嶺・下原 II)、H-9 号住(嶺・下原)、H-18号住(嶺・下原)が第 5 期初頭に一部重複する。

## 第1期(6世紀前半)

本時期に相当するのは I 期であり、住居址軒数は 1 軒のみである。調査区内北東隅に単独で存在する。 周辺には 9 世紀代の住居址群が認められるが、それらとも離れた場所に位置している。住居址主軸方向 も他住居址が東向きであるのに対し、やや北を指している。本遺跡で検出された最も古い住居址である が資料が少なく、また検出された次段階の住居址群が 7 世紀後半と時間差があり軒数も少ないため、本 時期の傾向を示すことは難しい。

### 第2期(7世紀後半)

本時期に相当するのはII期であり住居址軒数は2軒である。調査区内北西隅と中央付近にそれぞれ単独で存在し、直線距離にして約95m離れている。第1期の住居址とはかなり離れたところに存在するが、次段階の第3期前半の住居址が周辺に存在する。本時期の住居址の掘り込みは約55cmと深い。

### 第3期(8世紀)

本時期に相当するのはIII~V期であり住居址軒数はI1軒である。調査区内西部にまとまって検出された。前期と比べ急激に住居址軒数が増加している。カマドの位置をみると、東壁やや南寄りに多い傾向がある。H-4号住(嶺・下原)・H-5号住(嶺・下原)は、大型の住居址であり周溝・主柱穴をもち、掘り込みが深く、多量の鉄製品・鉄滓が検出されるなどの共通点があり興味深い。なお、本時期では縦長方形の住居址が多く存在している。

### 第4期(9世紀)

本時期に相当するのはVI~VII期であり住居址軒数は21軒(次期に継続を含む)となり、遺跡内において最も多く住居址が存在し、分布範囲の拡大も認められた。後半においては小型の住居址の増加が顕著であり、前期、本時期の住居址軒数、規模から考えて人口の増加などが推測される。カマドの位置をみると住居址東壁に付設されており、第3期よりも南に傾く傾向がみられる。

### 第5期(10世紀)

本時期に相当するのはVIII期であり住居址軒数は6軒(前期からの継続を含む)と激減し、範囲も中央部に寄る傾向がある。前期からの継続住居址以外は、規模も小形化し掘り込みが浅く遺存状態も極めて悪い。

### まとめ

以上のように集落変遷について段階をおってみてきたが、検出された住居址のまとまりから、調査範囲外にも集落は広がるものと推測される。したがって様相がさらに変化することも考えられるが、本稿では今回の調査結果で把握できる、現時点における集落変遷をまとめてみたい。

第1期、第2期の住居址軒数は1、2軒と少なく、それぞれが単独で検出された。しかし第3期になると住居址軒数は11軒に増加すると共に、その分布範囲は調査区内西側にまとまりをみせる。第4期においては住居址軒数が21軒とさらに増加し、分布範囲は調査区内全域へと拡大し、特に後半期に顕著となる。また当期における特筆すべき点として、調査区内北東隅に確認された小型の住居址群と、南西隅に集中する大型住居址群の存在があげられる。大型の住居址群の中には、柱穴内に礎石を思わせる礫が配されたもの、住居の拡張または棚状施設を思わせる構造をもったものが検出され、他の住居址との相違がみられた。後に触れるが、本遺跡では住居址内から多くの鉄製品・鉄滓が確認されているにもかかわらず、小型の住居址群からは全く検出されていないことが注目される。現段階において最終期と位置づけられる第5期になると、住居址軒数は減少し6軒(前期からの継続を含む)となる。

次に本遺跡で多量に検出された鉄製品・鉄滓の出土状況について周辺遺跡との比較も行いながら概観してみたい。本遺跡では、検出された住居址41軒のうち23軒から116点、グリッド・土坑より計9点の鉄製品・鉄滓が確認されている。住居址より検出されたものを時期別にみると第2期6点、第3期60点、第4期39点、第4期後半から第5期に継続11点であり、第3期から第4期にかけて点数の増加が認められる。遺跡南、直線距離にして約7㎞に位置する、古墳時代から平安時代の集落遺跡である新寺地区遺跡群(大工原1991)では、58軒の住居址から鉄製品11点、鉄滓2点、その他土坑から多量の鉄滓が検出されている。その西側に位置する松井田工業団地遺跡群(田口1990)も、主として古墳時代から平安時

代の住居址445軒が確認されたが、検出された鉄製品・鉄滓は26点である。このように本遺跡では住居址 軒数に比べて多量の鉄製品が確認されたことに加え、刀子、釘、紡錘車、鉄鏃、鎌、鉄斧、鉄鉗、鏨な ど多種に及ぶ。またこれら以外にも砥石、羽口など鍛冶に関係する遺物が検出されたことは留意する必 要がある。

以上概観したように第3期、第4期に住居址の増加、分布域の広範化が起こっており、それに対応す るように鉄製品の出土量の増加が見られる。これらのことから、集落規模の拡大と鉄製品の間には密接 な関係が存在することが推測される。

## 鉄製品について

本節では嶺・下原遺跡、嶺・下原II遺跡出土の鉄製品についてのまとめであるが、まずはじめに日本 における製鉄について概観し、つぎに奈良・平安時代を主とする県内の鉄器集成を行ないたい。

## 日本での製鉄開始時期と製鉄法

古くはデンマークのトムセンによって三時代定義されたように鉄器は世界的に普及し、日本では弥生 時代以降が一般的に鉄器時代と認識されている。だが、鉄器時代の区分で捉える場合においても森浩一 氏が提言しているように、日本列島内において鉄・鉄器を取り扱う場合には、少なくとも三つの段階を 想定する必要がある(森1974)。

- ①鉄器を使用した段階
- ②鉄器を製作した段階
- ③鉄器を生産した段階
- ①段階は鉄の製造や鉄器の製作には関わらず、朝鮮半島経由で大陸から武具や工具が北九州にもたら されたものを使用する段階で、分布域は畿内までをその中心とする。
- ②段階は鉄素材をもとに製品を製作・加工する鍛冶段階である。それまで鋳造品の比重が大きかった ものが、弥生中期を境に鋳造品が姿を消し、鍛造品が増加する(窪田1973)。一方、古代での鋳造工房の 手掛かりとなる獣脚類や梵鐘類の鋳型が東日本では10世紀以降に出土し(潮見1989)、鋳造を行なったと はっきりわかっている最古の製鉄遺跡は埼玉県の猿貝北遺跡で、時期は11世紀中~末に求められるとい う (藤田・村上他1991)。このことから鉄器製作の開始期は鍛造を中心にして行われたと考えられ、初期 の鋳造品は外来からの移入によるものと考えられる。
- ③段階は砂鉄あるいは鉄鉱石を用いて製錬の過程が行わ れた段階である。穴澤義功氏も森氏と同様に古代鉄生産に おいていくつかの発展画期とその時期を想定し、V段階に 区分している(穴澤1984)。 I 段階(縄文晩期~弥生中期後 半)、II段階(弥生中期後半~古墳中期)は森氏での①、② 段階にほぼ相当し、森氏での③段階である鉄製錬をさらに 三段階、つまりIII~V段階として細分している。そこでは III段階を国内の砂鉄を原料として、北九州や中国地方の一 第30表 古代鉄生産の変遷(穴澤1984)

段階	画 期	時 期
I	鉄器の使用開始	縄文晩期~弥生中期
II	鉄精練の開始	弥生中期~古墳中期
III	鉄製錬の開始	古墳中期~奈良前期
IV	製鉄技術の拡散	奈良前期~平安末
V	鉄の量産化	平安末~室町

部で製錬が行われる開始期(古墳中期~奈良前期)、IV段階を東日本も含めた製鉄技術の定着・拡散期(奈良前期~平安末期)、V段階を送風施設や防湿保熱構造の改良が進み、量産化が計られる発展期(平安末期~室町)と位置付けている。

穴澤氏の論説・分析は、現在の製鉄史における一般的な通説とほぼ考えて良いようである。だが、氏の分類でのIII段階にあたる製鉄の起源の問題は、現在でも製鉄史の中で大きな課題として捉えられており、研究者の見解が別れるところである。製錬滓の分析からでは5世紀に、一方製鉄炉の遺構、つまり直接的な証拠では6世紀後半のものが最も古いという見解が大筋では金属学、考古学で認められる(藤田・村上他1991)。しかし、製錬から鉄器の製作に至るまでの技術を一貫したもの(潮見1989)と考える者や、6世紀以前では製錬と精練鍛冶が一緒であり、小量であれば短期間で鉄に還元できたのではないか(清水1991)との推測もある。これらの仮説では製錬開始を弥生時代までさかのぼる可能性も残し、調査方法の見直しや製鉄実験の結果、それと考古学、金属学、文献史学など多角的な視点からの分析が望まれる。

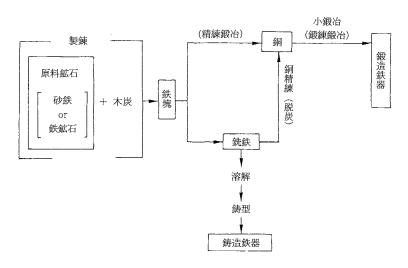
また古代、炉の形態がどのようであったのかも製鉄起源論と絡み製鉄史における重要課題である。土 佐雅彦氏や穴澤義功氏によって炉の形態には大きく長方形箱形炉と半地下式堅形炉の二つの系統があると言われている(土佐1984、穴澤1984)。前者は炉床部の平面形が100×50cm程度の長方形の掘りこみとして確認され、焼土や還元部があり、高さが60cm程度の箱形の炉と推定されている。後者は炉床部の径が50~80cm、高さが100cm以上と、炉断面に比べ炉高が高く、先のすぼまる円筒状や丸みをおびた方柱状の炉体をもつ。

二つの炉系統は分布域や出現時期も異なっている。長方形箱型炉の出現時期は製錬開始期である5世紀~6世紀に求められ、分布域は西日本、中でも北九州や中国地方を中心とする。これに対し、東日本を分布の中心域とする、半地下式堅型炉は出現が遅れ、関東地方の場合、最古の遺跡が7世紀後半に出現し、製鉄遺跡が増加するのは8世紀から9世紀以降と考えられる(穴澤1991)。このことから製錬初期は箱型炉系で操業されていたと考えられるが、日本全体でみた場合箱型炉系と堅型炉系とが相互に補完する形で鉄は生産されているようである。そのため、東北地方においても最古の製鉄炉は7世紀後半に箱型炉で操業され、8世紀以降、堅型炉が導入されていったようである(寺島1991)。県内では8世紀代

鉄遺構をもつとされてきたが(大 江1986)、上野国分僧寺・尼寺中間 地域では6世紀末から7世紀の始 めの段階で、すでに砂鉄の使用に よって製造された鋼を用いて製作 された鉄器が認められており(赤 沼1992)、県内のみならず関東地方 でも最古の類に入ると思われる。

の渋川市金井製鉄遺跡が最古の製

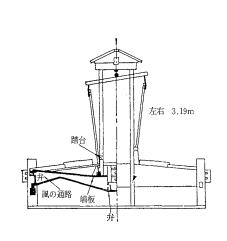
製錬の目的は大きく分けて、酸 化鉄を還元させて金属鉄に化学変 化させることと、原鉱中の不純物 を金属鉄から分離させ、鉱滓とし



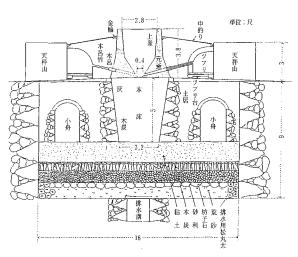
第54図 推定される鋼の製造法 (赤沼1996)

て排出することである(土佐1984)。二つの炉は形態の違いから、そこで製造される鋳鉄や鍛鉄(鋼)、それと生成過程で排出される製錬滓にも反映される。古代史の流れでは半地下式堅型炉の後に長方形箱型炉が出現したことはすでに述べたが、技術史的に解釈しても出現順序は矛盾しないようである(関1991)。炉高が高い堅型炉は箱型炉に比べ還元帯が長く、木炭が燃焼する際に発生する一酸化炭素との接触時間が長いと言われている。このため堅型炉は還元効率がよく、炉内残留滓も少ない。しかし、古代・中世の製鉄法に起源を求める近世のたたら吹き製鉄法は、長方形箱型炉の系譜を引いているということであり(古瀬1996)、箱型炉がどのように技術改良され、近世の製鉄法の完成に至るのかは興味深いところである。

これまで古代日本における鉄生産の発展過程について述べきた。次に具体的な製鉄の施設や方法の概要についても触れたいと思うが、古代・中世においては未だ不明な点が多い。そこで時代は下るが古代以来の製鉄史の流れを引き継ぎ、砂鉄を原料とし木炭を燃料とする、江戸時代のたたら吹き製鉄法を調べてみたい。たたら吹き製鉄の様相については川瀬正利と窪田蔵郎氏の著書に詳しく、基本的に両著を参考とする(川瀬1995・窪田1973)。



第55図 櫓天秤吹子の構造 (窪田1973)



第56図 床釣り横断面図 (河瀬1995より転載)

たたら吹き製鉄と言えば一般的に大型の送風装置である「天秤鞴」と防湿・保温施設である「床釣り」を炉にもって江戸時代の中国山地を中心に行われ、原料となる砂鉄は「鉄穴流し」という方法によって採取され、燃料となる木炭はマツ・クリ・マキが最上として用いられていた。「天秤鞴」(図55) は1691年(元禄四年)ごろ発明されたとされ、踏鞴子を二台向かい合わせにして支軸を両側に設置し、左右の嶋板を交互に踏むようにしたもので、これまでの板踏鞴に比べ、効率的でしかも大きな風を送ることができる。「床釣り」とは製鉄炉の下部の地下施設のことで、上半部(本床釣り)には大舟・小舟があり、その下の基礎となる下半部(床釣り)は木炭や砂利などを何層にも重ね、排水や保温効果を高める働きをするものである(図56)。「鉄穴流し」とは、砂鉄を多く含有する山を見立てて掘り崩し、川に流して土砂と砂鉄を分離させ、砂鉄のみを採取する比重選鉱法である。

これらの製鉄炉や送風施設の技術改良、砂鉄採取の効率化によって近世のたたら製鉄は完備され、鉄の量産化が可能になったと考えられるが、そこでは二つの製鉄法が用いられ、原料も異なる。一つは、真砂系砂鉄(鉄の品位が高いが岩石中の含有量は少ない)を原料とする直接精鋼法の鉧押し法であり、この方法では直接に玉鋼(鉧の中に含まれる良質の鋼)を摘出することが可能である。もう一つは、赤

目系砂鉄(真砂系に比べ不純物が多いが鉄の含有量は多い)を原料とする間接精鋼法の銃押し法であり、この方法では一旦銑を生成してから、製錬工程(大鍛冶)を経て、練鉄(鋼)を造ることとなる。砂鉄から鉄を分離・抽出する製錬工程に対して、精練工程(大鍛冶)は脱炭と不純物の除去を行い、包丁鉄(短冊形鉄板の練鉄)を生産することを目的とする。直接精鋼と間接精鋼の違いはたたら製鉄によって始めて明確に区別されるようになったと言われており、古代や中世における製錬と精練の違いは明確ではなかったことが考えられる。鋼や練鉄に生産された鉄は最終段階である鍛造工程(小鍛冶)で製品に形作られ、そこで修理・加工も行われる。嶺・下原II遺跡で検出された鉄鉗、鏨、羽口、砥石なども機能的に小鍛冶工程に伴う道具と考えられる。

以上、簡単に鉄器文化の画期や、たたら吹き製鉄の概要に触れてきた。近年鉄器・鉄滓の化学分析が進み、たたら吹き製鉄の復元実験が行われたことなど、一方では古代製鉄の解明に着実と近づいている感もある。だが、芹沢正雄氏が指摘しているように目的意識が薄いまま化学分析を行い、造滓成分の結果を一覧として載せているだけや、実際に「復元」と呼べるほど、綿密に準備をしないまま行われた実験結果を過大評価して引用されていることもあると思われる(芹沢1988)。このことからより慎重な分析や実験が望まれると共に、製鉄や鍛冶の技術用語が混同して用いられている点も多く、統一の必要性を感じた。

## b 奈良・平安時代を主とする県内の鉄器集成

主として奈良・平安時代の(6・7世紀も含む)集落跡から出土した、鉄器約1400点、40種の資料を 県内の報告書から確認し、集成を行なった。時期設定の理由としては嶺・下原遺跡から7世紀代の、県 内では比較的古くからの鉄器が出土していることと、奈良・平安時代の鉄器様相が、近年の発掘調査に よる検出量の増加にもかかわらず、あまり把握されてこなかったことである。また集落跡、中でも竪穴 住居跡内出土の資料にほぼ限定したのは、古墳に副葬されたものに比べ、古代において一般的な人々が 所有する鉄器の形態や数量を把握するのに適していると考えたためである。

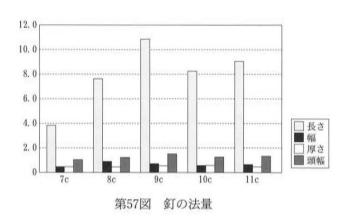
鉄器研究の進展は望まれるが、鉄器を分析・研究の対象とする場合には次の点が障害となる場合が多い。一つは鉄器の材質の特異性の問題であり、鉄は植物質など自然の有機材に比べて硬い素材であるが、その反面、空気に触れると錆びやすく、錆化したものは、本来の形を読み取りにくいことである。もう一つは伝播性の問題であり、これは鉄器は政治権力によって組織的に朝鮮半島から対馬・九州に移入されたことにより、製鉄技術の伝播は一様に各地域に波及していったわけではないことを意味する(窪田1973)。そのため製鉄遺構や鉄器の形態・地域差は文化的相異というよりも技術的遅れを示す面が強いといえる。こうした理由からか、県内でも従来こうした鉄器の集成・分類を行っている報告例・研究例は少ないが、いずれの研究法をとるにしても県内の出土状況を捉えておくことは基礎事項であると考え、集成を行なった。

集成・分類方法に関して次のことを理として定めておく。各遺跡の鉄器総数には、報告書で器種不明と判断されてあるものや、一部を除き、出土が住居址外のものは数えていない。分類・編年を行なう際に、各器種を法量の点で比較したが、各報告書で計測方法・計測箇所が異なっていた。そのため、図版に掲載した残存率が良いものに関しては新たに実測図から認識できる限り再計測した。また、分類時に一部器種・用語の改変を行なったものもあり、掲載図版の縮尺は1/6に統一した。鉄器の所属時期につい

ては報告書で推定してあるものについてはそれを利用し、特に記載のないものについては出土した竪穴住居址の時期を推定し、それを援用した。個別にある程度の記載を行なえたのは、約40器種中比較的出土量の多い8種にとどまり、その他の器種については割愛した。

### 釘

釘は消耗品であるためか、最も量が豊富で、 器種不明を含めても鉄器全体の中で約半数の 48%、643点を確認し、66点を掲載した。器種 別では竪穴住居址からの出土率が最も高いと 考えられる。しかし、形態が単純で変化が読 み取りずらく、また完存なものが少ないこと からか、鉄製品の中で釘について考察がなさ れることはほとんどない。出土時期は6世紀 から11世紀の資料を確認し、以下、集成結果



から得られた若干の統計結果と、観察を述べておく。

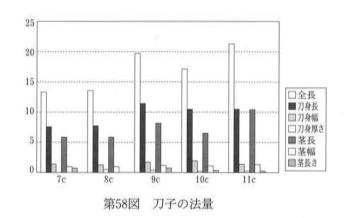
釘の法量平均は一部欠損しているものを含むものの、全代を通して釘の法量平均は長さ8.6cm、幅0.7 cm、厚さ0.6cm、頭幅1.4cmとなっている。釘の長さは $5 \text{ cm} \sim 7.9 \text{ cm}$ の範囲で約半数の48%を占めており(図57)、最長は17.6 cm、最短は2.4 cmである。

釘は頭部の形からL字に折り曲げた鈎状のもの、平面が円形か方形で厚さが2~3mm程度である皿状のもの、頭部の器肉が厚く、縦の断面が逆台形のものと3種に分けられそうである。鈎状のものはいわゆる「折頭式」と呼ばれるもので最も数が多いと思われる。また身部の断面では円形と方形とがあり、銹化により丸みを帯びることを考えても、断面は全代を通して方形なものが圧倒的に多いことがわかる。しかし、いずれの区分においても実測図からは判別が難しく、ここでは頭部と身部断面を基準にして、いくつかの種類にわけられそうであることを指摘しておく。

## 刀子

古代、刀子は日常生活で切削工具としてのほか、佩用(腰帯にさす細身の小刀)として使われていた。県内の奈良・平安期における竪穴住居址からの出土率が28%であり、釘に次いで高く、このことから刀子が多機能・多目的に用いられたことを予想させ、鉄器の中での普及率が高かったことをうかがえる。

刀子は6世紀から11世紀の資料374点を確認し、その内42点を掲載した。完存例は20点



を確認し、それらの法量平均は全長17.7cm、刀身長10.3cm、刀身幅1.7cm、刀身厚さ0.4cm、茎長7.5cm、茎幅1.1cm、茎0.4cmとなっている。時期別出土率の内訳は6世紀0.3%、7世紀7%、8世紀15%、9世紀35%、10世紀31%、11世紀5%、不明7%となっており、9世紀と10世紀に検出量が集中する。

6世紀代では後半に、刀子の茎ではないか、と報告されている矢田V56住例がわずか1点あるが、実測図からは不明瞭な点が多く、図版掲載は避けた。7世紀は完存例として鳥羽 $I \cdot J \cdot K$ 区J72住例 $\langle 4 \rangle$  と善慶寺39住例 $\langle 6 \rangle$ がある。前者は細身で矛先がわずかに反り返り、 $\stackrel{\text{tigs}}{\text{all}}$ を有し、後者は全長が7.8cmと極端に短く、茎にリング状部分があるもので、いずれも刃部に使用痕が認められる。国分境B区15住例 $\langle 3 \rangle$  では鎺と木質の柄部を残している。大久保 $A \cdot I$ 区9住例 $\langle 5 \rangle$  を除きすべて両区である。

8世紀は完存例として上野国分僧寺・尼寺中間地域(6) A 区139住〈7〉、嶺・下原 4 住〈10〉、村主 6 住〈9〉、大久保A・I 区94住〈11〉がある。前代の 6 世紀に引き続き細身のものが目立ち、嶺・下原 4 住例〈10〉と上野国分僧寺・尼寺中間地域(6) A 区139住例〈7〉のように区が明瞭でないものもある。

9世紀の完存例には芳賀東部団地 I397住〈18〉、分郷八崎52住〈20〉、同57住〈21〉、北原32住〈19〉らがある。芳賀東部団地 I 397住例〈18〉では茎尻に、巻き付けた繊維質が残存している。上野国分僧寺・尼寺中間地域(4) B区 1 住例〈15〉、同C区135住例〈16〉、同C区146住例〈23〉では刃区から棟にかけて一筋の陵を有す。

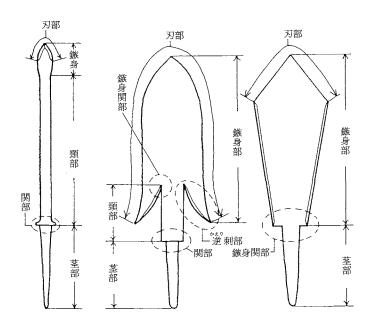
10世紀の完存例は上野国分僧寺・尼寺中間地域(2) G区136住〈36〉、同(3) D区10住〈26〉、同(5) B区118住〈27〉、前田10住〈35〉、同16住〈38〉、鳥羽A・B・C・D・E・F区D127住〈32〉、同 I・ J・K区 J 67住(a)〈30〉、国分境 C 区11住〈29〉がある。鳥羽 I・ J・ K 区67住からは完存例〈30〉と茎のみのもの〈31〉が確認されている。完存なもの〈30〉は全長27.3cm、刀身長18.0cm、茎長9.3で、茎部のみのもの〈31〉でも20.1cmを測り、大型品である。

11世紀の完存例として上野国分僧寺・尼寺中間地域(3) C区1号〈41〉、芳賀東部団地II245住〈39〉がある。芳賀東部団地II245住例〈39〉では刃部と茎部で厚さに差をもたせることで、区を設けている。

### 鉄鏃

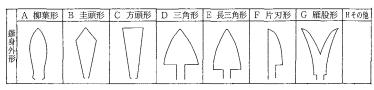
鉄鏃は鉄器の中では比較的古くから研究が行われており、各研究者、報告書で様々な分類・編年が行われている。しかし、鉄鏃の各部の名称や形態を総称する用語は、必ずしも統一して用いられておらず、計測部位も様々である。ここでは各部の名称や用語の定義を目的としていないので、鉄鏃の分類要素を明確に提示している山秀宏氏の案にとりあえず従いたい(杉山1988)。また分類に際しては実測図から読み取れる限度から鏃身の平面形態を中心に行なった。

6世紀から11世紀の134点の資料の内、 遺存状態の良い47点を掲載した。出土率 は10世紀が27%と最も高く、次いで9世 紀が20%となっている。図版には載せな



第59図 鏃各部の名称(杉山1988)

かったが、鏃身部は欠損している ものの長茎鏃とおもわれる 6 世紀 代の資料を1 点確認した。7 世紀 は腸抉が発達している柳葉式も芳 賀東部団地 $\Pi$ 229住例 $\langle 1 \rangle$  で確認



第60図 鉄鏃分類要素図(杉山1988)

されてはいるが、鑿箭式の村主13住例〈2〉のように長頚鏃が全体的に多い。

8世紀は、掲載図版は多くないが、資料数からは長頚鏃がもっとも多く、主流と思われ、篦被・茎部の形状から刃部は村主11住例〈8〉、同30住例〈9〉、大久保A・I94住例(a)〈7〉でみられる鑿箭式が多いと思われる。短頚の柳葉式が本宿・郷土 GD51住〈10〉〈11〉と大久保A・I94住(a)〈7〉からあり、いずれも箆被に棘をもつ。三角形式・長三角形式は、上野国分僧寺・尼寺中間地域(6) A区11住例〈6〉、上野国分僧寺・尼寺中間地域(7) A区84住例〈4〉で確認され、上野国分僧寺・尼寺中間地域(7) I 区40住例〈5〉のように腸抉が発達しているものもあり、これは飛燕鏃とも呼ばれている。

9世紀では前代までの形式に加え、資料は多くないが新たに中尾 D123住例 <20>、有馬 I110住例 <21> で見られる雁股鏃や、鳥羽G・H・ I 区 G75住例 <22> の方頭鏃、上野国分僧寺・尼寺中間地域(7)例 <23> の圭頭鏃が確認加わる。完存しているものは少ないものの、依然として長頚鏃が過半を占め、遺存状態の良いものとして、細身の長頚長三角茎鏃が鳥羽 I・J・K区 K36住例 <17>、鳥羽 <math>I・J・K区 K36住(a)例 <15>、同34住(b)例 <16> が挙げられる。

10世紀の資料が県内では最も多いと考えられ、刃部の形は大半を長三角茎式が占めるようになる。上野国分僧寺・尼寺中間地域(5) B区127住〈34〉、国分境C区75住(a)〈30〉を例として短頚鏃が増加していると考えられるが、長頚鏃と比べ数的にどちらが主とは判断しがたい。また国分境C区18住例〈25〉、鳥羽 I・J・K区 K10住例〈26〉のように腸抉は退化傾向にあり、区も大久保 A・II 78住例〈32〉、鳥羽 A・B・C・D・E・F区 F28住例〈36〉では鈍角に変化している。その他、方頭式が大久保 A・II 区105住例〈40〉で、刃部が発達した雁股式が上野国分僧寺・尼寺中間地域(7) I区 4号井戸例〈39〉、大久保 A・II 57住例〈38〉で確認されている。

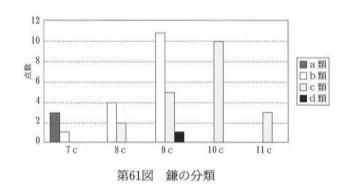
11世紀になると傾向として腸抉は退化・消滅し、区は鈍角へと推移する。上野国分僧・尼寺中間地域(4) C区65住例〈42〉のように微小な腸抉をもつ短頚長三角形鏃もあるが、上野国分僧寺・尼寺中間地域(3) C区1住例〈41〉、有馬条里33住例〈44〉を代表として、区が鈍角、あるいはなだらかな短頚長三角形鏃の類例が多くなる。またこのタイプの傾向として棘部を持つ例が多い。その他には刃部の退化した雁股鏃が上野国分僧寺・尼寺中間地域(4) C区43住〈45〉と有馬 I 145住〈46〉から、茎部が極端に短い圭頭鏃が有馬条里11住〈47〉で確認されている。

## 鎌

96点を収集し、その中で遺存状態の良い41点を掲載した。所属時期の内訳は6世紀が3%、7世紀が6%、8世紀が17%、9世紀が35%、10世紀が26%、11世紀が5%、不明が7%となっている。形態分類を行う上で土井氏の分類を参考にした(土井1971)。氏は関東地方の竪穴住居址から出土した鉄製の鎌を形態・時期別に4種に分けている。

a 類一身が直線を基調とし、身幅はほぼ一定で、刃部と柄の装着部分の区別が明確でないもの。 4 世紀 から7世紀。

- b 類一背部が直線的であるのに対して、刃部 の湾曲が目立ち、刃部と柄との装着部 分の区別が明確であるもの。8世紀か ら9世紀。
- c 類一身全体が大きく湾曲し、その度合はb 類より顕著であるが、刃部と柄との装 着部分はb類ほど明確でないもの。8 世紀末から9世紀以降。



d類-小型で上3類に属さないもの。

6世紀に属する可能性のあるものも、 3 点あったが、いずれも破片であり、分類・考察に耐えられるものではなかった。出土資料は少なく、7 世紀はわずか 4 点のみを計測し、二つのタイプに分けられる。一つは基部から身部にかけてほぼ同一幅で、直線的で土井氏の分類での a 類に相当する、直刃鎌であり、中尾 C123住例 <2> と上野国分僧寺・尼寺中間地域(7) I 区137住例 <1> がある。もう一つは背部が丸みを呈し、矛先は鋭角を成す上野国分僧寺・尼寺中間地域(7) I 区63住例 <4> と、背部は直線的であるが刃部の研ぎ減りが著しい大久保A・II60住 <3> が b 類に相当する。当世紀の法量平均は長さ14.9cm、最大幅3.1cmである。

8世紀に入ると a 類は消滅し、嶺・下原 5 例 〈7〉、芳賀東部団地 II 120例 〈6〉のように b 類が主流となり、これらは研ぎ減りが著しく、形状、大きさは近似している。また例上野国分僧寺・尼寺中間地域(3) H 区97住例 〈10〉、上野国分僧寺・尼寺中間地域(7) I 区179号住居例 〈9〉で c 類が加わるが、どちらも背部の湾曲が著しく、特に前者は三日月状を呈している。

9世紀は最も出土例が多く、そのうち17点を再計測した。 c 類が主流を占め11点、 b 類が 5 点、 d 類が 1 点ある。 b 類は前代に引き続き、大久保 A・II 区104住例〈20〉、芳賀東部団地 II 250住例〈16〉など、背部が直線的なのに対し、刃部中央が薄く、研ぎ減りによるものと考えられる。分郷八崎36住例〈23〉は全体的な丸みから、 c 類に相当すると判断したが、刃部先端が急激に湾曲し、刀幅が全体的に広めであり、前代を通じて比較資料は見当たらなかった。 d 類とした芳賀東部団地 II 253住例〈27〉は矛先を一部欠損するものの法量が、長さが 9 cm、幅3.5cm、厚さ0.5cmと長さが極端に短く寸胴である。

10世紀なると芳賀東部団地II324例  $\langle 28 \rangle$  を除き、類型はcに統一される。ただし、大久保 $A \cdot II$ 区71 例でみるように (a)  $\langle 36 \rangle$  の法量が長さ27.3cm、幅5.1cmと大ぶりであるのに比べ、(b)  $\langle 34 \rangle$  の長さ 15.9cm、幅3.9cm、(c)  $\langle 35 \rangle$  の長さ15.9cm、幅3.6cmと一回り小さく、当類・当期は大小の差が明確である。

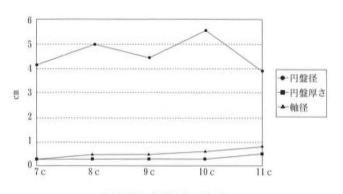
11世紀はわずか3例のみであり、土井氏の分類でのc類の系譜を引いていると考えられるが、遺存の良好な上野国分僧寺・尼寺中間地域(3)D区14住例〈41〉と大久保A・II区129住例〈39〉に見る限り両者は、大きさ形とも近似している。特徴は基部の幅が狭いの対し、刃部中央の幅が極端に厚い。これは使用による中央部の研ぎ減りを考慮して改良したものと推察でき、新たな類型として捉えることもできる。

#### 紡錘車

紡錘車は繊維を紡いだものに撚りをかけて糸を作る道具で、弥生時代から平安時代に至るまで集落遺

跡から一般的に検出され、土製・石製・鉄 製など素材も様々である。紡錘の形は栽頭 円錐形または円盤形をし、これは弾み車の 役割をする。一般的には紡錘中央部に孔を 開け、軸棒を一本を通して用いられ、これ を含めて紡錘車と呼ばれる。

県内における紡錘車の研究結果から鉄製のものは一般的に8世紀以降に出土し、9世紀代に入ると増大するようであるが(滝沢1985)、出土率の最も高い平安期において



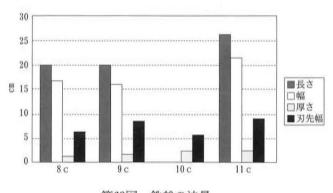
第62図 紡錘車の法量

も土製・石製に比べ鉄製のものが紡錘車に使われる材質の中で主流を占めることはないようである(中 沢1996)。集成資料は7世紀から11世紀までの57点を確認し、29点を掲載した。

紡錘車は年代差による形態的変遷はほとんど認められず、考古学的編年の対象としては非常になじまない遺物である(中沢・春山・関口1988)との指摘がすでになされているように今回の集成においても時期の違いによる形態の相異はほとんど現れていない(図62)。むしろ鉄製紡錘車は県内での出土初現時期である古墳時代末期からすでに機能的に十分であり、奈良・平安時代を通じても大きさ、形状とも安定していることが特徴といえる。法量の平均は円盤径4.9cm、円盤厚さ0.3cm、軸径0.5cmで、範囲は円盤径3.5cm~8.1cm、円盤厚さ0.2cm~0.9cm、軸径0.1~0.9cmである。

## 鉄斧

8世紀から10世紀まで11点を確認し、時期不明な1点を除き10点を掲載した。いずれも柄を着装するために、基部の両端を湾曲させており、有袋鉄斧と呼ばれるものである。平面形の違いは直線を基調とし、長方形に近い七日市13住例〈4〉、村主21住例〈9〉と、耳部が直線状であるのに対し、刃部がラッパ上に広がる上野国分僧寺・尼寺中間地域(5) B区118住例〈7〉、大久保A・II区109住例〈8〉がある。一部欠損



第63図 鉄斧の法量

もあるが、前者の法量平均が、長さ6.7cm、幅2.2cm、後者が長さ11.1cm、幅5.8cmと、両者の違いが大きく認められ、機能差も反映していると考えられる。

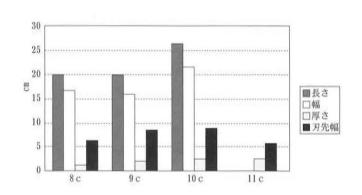
また袋部の断面に着目すると、その形から新寺地区遺跡群 BH22住例〈1〉、嶺・下原 5 住例〈2〉、大久保A・II区109住例〈8〉のように円形のものと、分郷八崎24住例〈5〉、村主21住例〈9〉、大久保A・II区103住例〈10〉のように方形ものとがあり、器肉の厚薄も村主21住例〈9〉、大久保A・II区109住例〈8〉のように厚いものと新寺地区遺跡群 BH22住例〈1〉、嶺・下原 5 住例〈2〉のように比較的薄いものとがある。

平面や袋部の断面などいくつかの細部に注目したが、全体的な形としての機能や時期差を見出すこと

はできなかった。

#### 鋤·鍬

弥生時代以降主要な生業基盤である、農業の発展に大きな影響を及ぼすと考えられる鉄製農具は、鉄器研究の中でも古くから行われている。鋤と鍬は共に農具として田畑を耕すほか、中耕・除草・作畦など各種の作業に用いられる。鉄製の鋤と鍬は風呂と呼ばれる木製の台に装着し、刃先として用いられる。また両者の形状の違いとしては刃先が曲線状なものを鋤、刃先が直線状なものが鍬とする見解もあるが(都出



第64図 鋤・鍬の法量

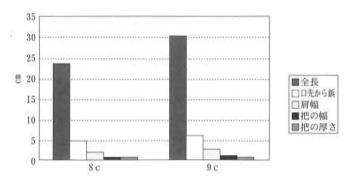
1967)、両者を区別する明快な説明はなされていない。

鉄製の鋤・鍬は北九州の弥生中期の遺跡での出土を初現とし、関東地方では6世紀初頭頃に下限があると考えられている(土井1976)。鋤・鍬の集成資料は、8世紀から11世紀に及ぶが、古墳時代にまでさかのぼる例は確認できなかった。確認した点数も11点(うち7点掲載)と少なく、主要所属期である県内の奈良・平安期を通じても竪穴住居址からの出土例は決して多いとは考えられない。国分期(8世紀末から9世紀以降)に住居址から鋤・鍬の出土例が少ないことについて鉄製の鋤・鍬は私的所有が実現しておらず、依然として単位集団の所有によるためだと推測する研究例もある(土井1971)。

鍬・鋤の形態分類は都出比呂志氏、土井義夫氏、松井和幸氏(松井1987)らの研究があり、分類の視点としては刃部の幅と長さの比率、刃先の形に着目している。結論としては時代が下るにつれ、刃部長さの割合が大きくなり、刃先の縦幅が増すという結果が得られている。だが県内においてこれらの明確な違いは見出せず、刃先がV字状(鋭角)な村主20住例〈1〉、芳賀東部団地II257住例〈3〉と、U字状(鈍角)な上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)C区50住例〈6〉・同(6)Z区4住例〈5〉、鳥羽L・M・O・N区 L189住例〈4〉、芳賀東部団地II191住例〈2〉とが唯一の相異とみることもできるが、類例が少なく詳細な分類・分析はできなかった。

# 鉄鉗·鋏

鉄鉗は鉄棒を2本交差させて孔をあけ、 鋲で留めたものであり、鋏は同じく交差させた2本の棒の先端内側に刃を付けて鋲で 留めたものである。前者は「ハサム」、後者は「ハサミキル」道具であり、いずれも元 来は、2本の棒、つまり箸の「ハサム」、「ツカム」機能を原点とし、そこから発展させたものと考えられる(吉川1991)。よって機能・形態的な両者の共通性から、鉄鉗・鋏



第65図 鉄鉗・鋏の法量

類としてまとめて分類したい。

確認点数は不明も含め、鉄鉗 4 点、鋏 4 点で、合わせてもわずか 8 点にすぎず、そのうち 6 点を掲載した。また出土は 8 世紀と 9 世紀に限られ、竪穴住居址からの出土率は極めて低い。形態的には手の平で握る形式のもの 3 点と、 2 本の棒を鋲で留めたいわゆる中間支点式のもの 5 点とに分けられる。時期別にみると 8 世紀代 2 点のうち、ほぼ完存な例と言える嶺・下原 II 7 住例〈1〉は、肩が張り、把部はなめらかに湾曲しており、法量は全長23.7cm、肩幅1.9cmである。 9 世紀代は芳賀東部団地 II から52住例〈3〉、81住例〈4〉、T-2 号鍛冶址例〈5〉と、鳥羽  $L\cdot M\cdot O\cdot N$  区 I 5号溝例〈6〉で確認し、一部欠損はあるものの、法量平均が長さ約32.0cm、肩幅2.5cmと前代の嶺・下原 II 例〈1〉に比べ、大ぶりで、把部が棒状で細長い。

鳥羽G・H・I区I103住例〈2〉を除く法量の平均をに示した(図65)。9世紀は前代より全体的に一回り大きく、このことから当代の方がより大きな鉄素材を扱うのに適しているという機能差も考えられるが、これが発展によるものなのか、それとも単なる用途の違いを現したものなのかは類例が少なく判断しがたい。

#### 小 結

奈良・平安時代の竪穴住居址出土を中心に県内の約1400点、40種の鉄製品を集成した。このうち全体の鉄器出土量の94%を占める釘、刀子、鉄鏃、鎌、紡錘車、斧、鋤・鍬、鉄鉗・鋏の8点を取り上げて、時期別・形態別に若干の記載を行なった。器種別では上位3種の出土量(釘約640点、刀子約370点、鉄鏃130点)で、全体の7割以上の出土量となる。その他、小刀、刀、小札、轡、引手など武具や馬具関係の遺物も住居址から確認されているが、これらは少数で、日常生活や農耕作業に必要とする一般的な鉄製品が多いことがわかる。時期別では古墳時代に属すると考えられるものも若干見当たるものの、大半は平安時代の9世紀から10世紀に集中し、時期不明のものを含めても全体の6割を超える出土率となっている。遺跡別では上野国分僧寺・尼寺中間地域を始め、鳥羽遺跡、芳賀東部団地II遺跡など国衙、国府関係遺跡からの出土量が多い。これらの遺跡では奈良・平安時代の大規模集落を構成しており、鉄淬の分析からいずれも製錬や精練鍛冶を行なえる施設を有していることが明らかになっている。

## c 嶺・下原遺跡、嶺・下原II遺跡出土の鉄製品

平成2年度の嶺・下原遺跡(千田1991)と9年度の嶺・下原II遺跡の発掘調査によって奈良・平安時代を主とする竪穴住居址を、合わせて41軒確認した。鉄製品はそのうち23軒の竪穴住居址から認められ、出土率は両遺跡合わせて全出土量の93%と、高い値を示しており、その時期は住居址内の土器から7世紀代から9世紀代に属すると考えられる。

製品の出土量は両遺跡で10種59点あり(嶺・下原5種30点、嶺・下原II10種29点)、その他鉄滓57点(嶺・下原35点、嶺・下原II遺跡22点)、1点の銅鋺破片(嶺・下原II)を検出している。器種別では出土率の高いものから刀子26点(44%)、釘13点(22%)、鉄鏃1点(2%)、鎌(2%)、紡錘車7点(12%)、鉄斧(5%)、鍬・鋤1点(2%)、鉄鉗・鋏(2%)の順で、その他(10%)もある。前に述べた県内の住居址出土の鉄器集成の結果では約1400点の資料中、遺跡平均として刀子が約26%、釘が45%、紡錘車が約4%の出土率となっており、これと比較してみると、刀子と、特に紡錘車の割合が高いことがわか

る。その他、近隣の遺跡である市内の新寺地区遺跡群(大工原1991)からは古墳時代~平安時代を主とする58軒の住居址が確認されおり、出土鉄製品10点すべてが住居址内で、その内、刀子が3点、紡錘車が4点とここでも住居址内と紡績具の出土率の高さを共通に指摘できる。

今回調査した嶺・下原II遺跡の特徴として、調査面積に比べて大量の鉄製品や鉄滓など、特殊遺物が住居址内を中心に確認されていることが指摘できる。9世紀後半に属するH-I3号住居址からは刀子や紡錘車など製品 7点の他、銅碗片 1点、鉄滓I0点を検出している。本遺跡は製鉄・鍛冶関連の遺跡と比べてみても、住居址 1 軒あたりの出土点数の割合が高いと言えるが、中でもH-I3号住居址は鉄滓も含め、その出土数が多い。住居址の特徴として一辺が約6.Imのほぼ正方形で、同時期に確認した他の住居址と比べても最も大きく、また、西側のかまど付近を中心に焼土が住居址内全体に広がり、鍛冶に用いたであろう羽口も検出された。

H-7 号住居址も形態自体は一般的であるが、ほぼ完存の鉄鉗をはじめ、割りピン状の鉄器 2 点など、全部で 6 点と、鉄製品の出土量が目立ち、鍛冶関連遺物として砥石も出土している。その他に鏨がH-12 号住居址の床直と、遺構外から 1 点づつ検出している。鉄鉗は焼けた鉄をつかむ時に用い、鏨は鉄を切断、加工するための鉄製のノミであり、両者はどちらも鍛練鍛冶(小鍛冶)を行なう時に絶対的に必要とするもので、代替とするものはない。

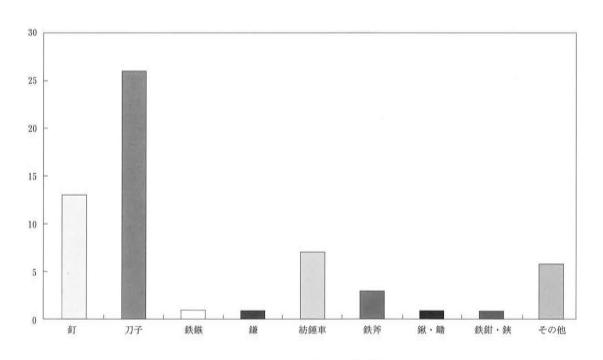
以上のように、出土遺物の状況から遺跡内で鍛練鍛冶(小鍛冶)が行われていた可能性が指摘できる。 また、鉄製紡錘車の竪穴住居址あたりの出土率の高さから紡績業など、何らかの手工業生産を行ってい たことも推測される。

	時期	釘	刀子	鉄鏃	鎌	紡錘車	鉄斧	鍬・鋤	鉄鉗•鋏	その他
H-4号住居	7C~8C	2	2				1			
H-5号住居	7C~8C	4	5		1		1	1		
H-8号住居	7C~8C	1								
H-9号住居	10 C		2							
H-12号住居	9 C	1	1							
H-15号住居	9 C		1							
H-17号住居	9 C	1								
H-18号住居	10 C		2							
H-19号住居	9 C	2	1							
グリッド	不明		1							
計		11	15	0	1	0	2	1	0	0

第31表 嶺・下原遺跡鉄器出土位置と点数

	時 期	釖	刀子	鉄鏃	鎌	紡錘車	鉄斧	鍬•鋤	鉄鉗•鋏	その他
H-1号住居	8 C	1								
H-3号住居	7 C		2			1				
H-4号住居	8 C		2	1						1
H-7号住居	8 C	1							1	2
H-9号住居	9 C					2				
H-10号住居	8 C		1							
H-11号住居	9 C		1			1				
H-12号住居	9 C						1			1
H-13号住居	9 C		4			2				1
D-2号土坑	不明									1
グリッド	不明		1			1				
計		2	11	1	0	7	1	0	1	6

第32表 嶺・下原Ⅱ遺跡鉄器出土位置と点数



第66図 嶺·下原II遺跡器種別総数

#### 引用報告書一覧

『有馬条里遺跡』1983渋川市教育委員会

『中尾』1984群馬県教育委員会·群馬県埋蔵文化財調査事業団

『芳賀東部団地遺跡 I』 1984前橋市教育委員会

『大原Ⅱ遺跡・村主遺跡』1986群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

『大久保A遺跡』1986吉岡村教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団

『七日市遺跡・滝沢遺跡・女塚遺跡』1986吉岡村教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団

『北原遺跡』1986群馬町教育委員会・群馬県教育委員会・日本道路公団

『鳥羽遺跡G・H・I区』1986群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

『上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)』1987群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

『上野国分僧寺・尼寺中間地域(3)』1988群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

『鳥羽遺跡 I・ J・ K区』1988群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

『芳賀東部団地遺跡II』1988前橋市教育委員会

『有馬遺跡 I・大久保B遺跡』1989群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

『国分境遺跡』1990群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

『上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)』1990群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

『鳥羽遺跡L・M・N・O区』1990群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

『嶺・下原遺跡』1991安中市教育委員会

『新寺地区遺跡群』1991安中市教育委員会

『前田遺跡』1991前橋市埋蔵文化財調査事業団

『上野国分僧寺・尼寺中間地域(5)』1991群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

『上野国分僧寺・尼寺中間地域(6)』1992群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

『上野国分僧寺・尼寺中間地域(7)』1992群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

『上野国分僧寺・尼寺中間地域(8)』1992群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

『鳥羽遺跡A・B・C・D・E・F区』1992群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

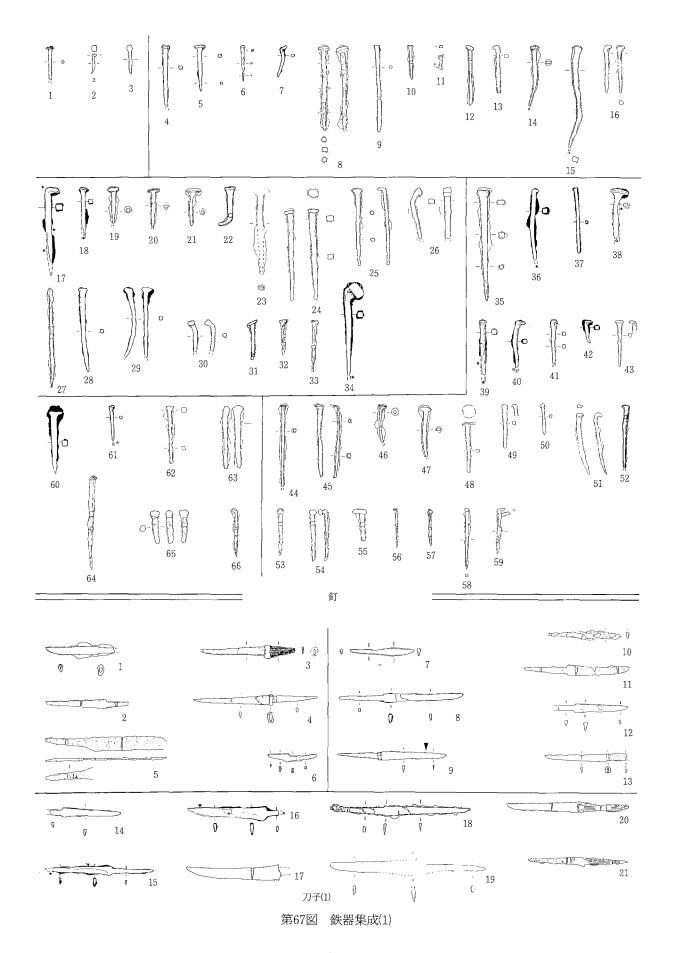
『矢田遺跡V』1994群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本道路公団

『早慶寺早道場遺跡』1994群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団・日本道路公団

『荒砥上ノ坊遺跡II』 1996群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

『荒砥上ノ坊遺跡III』1997群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

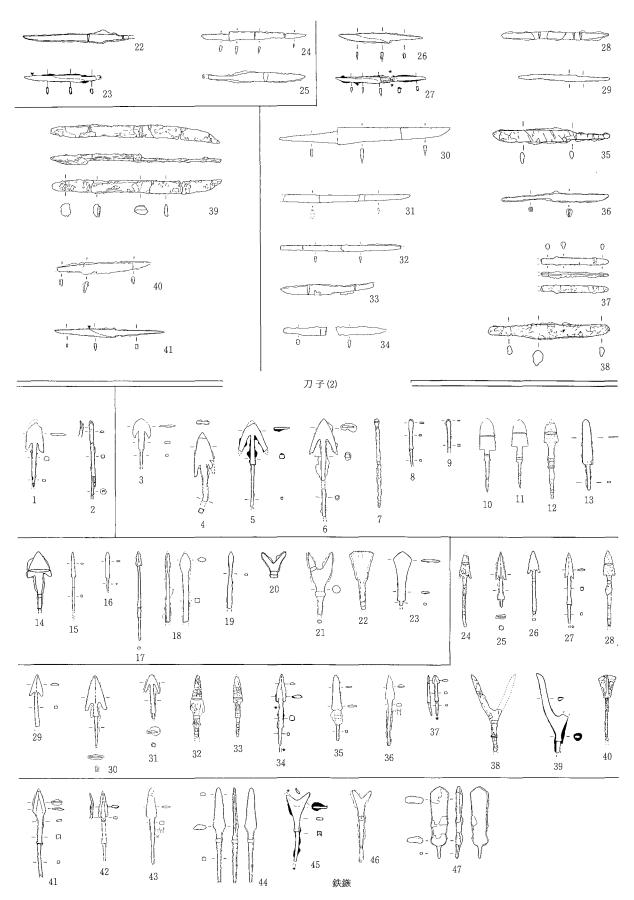
『本宿・郷土遺跡』1981富岡市教育委員会



-107 -

亚							
番号	遺跡名	出土位置	時 期	長さ	幅	厚さ	頭幅
1	上野国分僧寺・尼寺中間地域(7)	I 区73号住居	7 C	(5.3)	0.5	0.5	1.3
2	鳥羽I・J・K区	J 14号住居	7℃後葉	3.2	0.5	- 0.0	0.9
$\vdash$							
3	国分境	C区29号住居	7 C後葉	4.5	0.5		0.9
4	上野国分僧寺·尼寺中間地域(7)	I 区H40号住居	8 C	(9.9)	0.6	0.5	1.3
5	上野国分僧寺・尼寺中間地域(7)	I 区196号住居	8 C	7.4	0.8	0.5	1.8
6	善慶寺	18号住居	8 C	(6.0)	0.5	0.5	0.9
7	上野国分僧寺·尼寺中間地域(3)	B区5号溝	8 C	(4.5)	0.5	0.3	1.2
8	羽場	H-5号住居	8 C前葉	(13.4)	0.9	0.6	1.8
9	上野国分僧寺·尼寺中間地域(7)	I 区H36号住居	8 C前葉	13.8	0.5	0.5	0.9
10	鳥羽G・H・I区	H45号住居	8 C前葉	5.4	0.4	0.4	0.9
11	嶺・下原 II	H-1号住居	8 C前葉	2.4	0.8	0.4	0.9
12	鳥羽I・J・K区	K38号住居	8 C後葉	9.5	0.5	0.5	1.2
13		F 4 号住居					
$\vdash$	鳥羽A·B·C·D·E·F区		8 C後葉	(7.5)	0.6	0.5	1.2
14	上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)	G区5号住居	8 C後葉	(9.6)	0.6	0.3	1.3
15	上野国分僧寺・尼寺中間地域(6)	Z区17号住居	8C後葉~9C前葉	(16.2)	0.9	0.8	1.5
16	北原	42号住居	8 C末~9 C初頭	7.9	0.8	0.8	1.4
17	上野国分僧寺·尼寺中間地域(4)	C区142号住居	9 C	(12.0)	0.9	0.9	2.1
18	上野国分僧寺·尼寺中間地域(4)	B区22号住居	9 C	(7.5)	0.6	0.6	1.2
$\vdash$							
19	上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)	F区75号住居	9 C前葉	(5.7)	0.5	0.4	1.8
20	上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)	G区12号住居	9 C前葉	(6.0)	0.5	0.4	1.8
21	上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)	G区52号住居	9 C前葉	(5.4)	0.4	2.1	1.8
22	中尾	D48号住居	9 C前葉	(7.2)	0.9	_	1.5
23	北原	2 号溝	9 C中葉	14.0	0.9		2.4
24	芳賀東部団地II	H15号住居	9 C中葉	(14.3)	1.1	0.0	1.7
$\vdash$						0.9	
25	芳賀東部団地II	H345号住居	9 C中葉	(12.3)	0.6	0.5	1.7
26	芳賀東部団地II	H237号住居	9 C中葉	(8.7)	0.9	0.8	1.2
27	鳥羽G・H・I区	G45号住居	9 C後葉	15.9	0.7	0.5	
28	上野国分僧寺·尼寺中間地域(7)	I 区94号住居	9 C後葉	13.3	0.8		1.5
29	上野国分僧寺·尼寺中間地域(7)	I 区H26号住居(a)	9 C後葉	(5.4)	0.6	0.5	0.9
						0.5	
30	上野国分僧寺・尼寺中間地域(7)	I 区H26号住居(b)	9 C後葉	(11.1)	0.6	0.6	1.5
31	中尾	E 9 号住居	9 C後葉	6.6	0.7		1.8
32	大久保A・II	36号住居	9 C後葉	5.7	0.8	0.6	1.5
33	大久保A・II	106号住居	9 C後葉	(8.1)	0.6	0.5	1.2
34	上野国分僧寺·尼寺中間地域(4)	B区14号住居	9 C~10 C 初頭	(14.3)	0.9	0.9	2.4
-					- 0.5		
$\vdash$	上野国分僧寺·尼寺中間地域(3)	D区28号住居	10 C	17.6		1.2	2.1
	上野国分僧寺·尼寺中間地域(4)	B区6号住居	10 C	(11.1)	0.8	0.8	1.2
37	上野国分僧寺·尼寺中間地域(3)	A区162号住居	10 C	10.4	0.5	0.3	0.9
38	上野国分僧寺·尼寺中間地域(5)	B区119号住居	10 C	7.8	1.0		3.0
39	上野国分僧寺・尼寺中間地域(5)	B区118号住居	10 C	(8.7)	0.8	0.8	1.1
40	上野国分僧寺·尼寺中間地域(4)	C区115号住居	10 C	(7.5)	0.6	0.6	1.5
$\vdash$							
41	上野国分僧寺 · 尼寺中間地域(3)	D区17号住居	10 C	(6.9)	0.6	0.6	(1.2)
42	上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)	C区104号住居	10 C	3.6	0.6		1.2
43	鳥羽L・M・N・O区	M53号住居	10 C	(7.4)	0.5	0.6	1.3
44	上野国分僧寺·尼寺中間地域(2)	G区6号住居	10℃前葉	(12.9)	0.5	0.4	0.9
45	上野国分僧寺·尼寺中間地域(2)	F区50号住居	10℃前葉	(11.4)	0.5	0.6	1.2
-	上野国分僧寺·尼寺中間地域(2)						
46		G区72号住居	10 C 前葉	(6.0)	0.3	0.3	1.2
	上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)		10℃前葉	(8.1)	0.6	0.5	1.8
	鳥羽G・H・I区	F217号住居	10C前葉	(8.0)	0.8		2.1
	鳥羽A・B・C・D・E・F区	C125号住居	10 C 前葉	7.0	0.7	0.6	0.9
50	鳥羽A・B・C・D・E・F区	D97号住居	10 C 前葉	(5.0)	0.5	0.6	0.8
51	北原	72号住居	10 C 前葉	10.0	0.9	0.5	1.2
	中尾	溝 8	10℃前葉	(9.9)			
					0.7	0.6	1.1
$\vdash$	大久保A・II	88号住居	10℃中~後葉	7.5	0.7		1.0
54	鳥羽I・J・K区	K50号住居	10 C 後葉	(8.7)	0.7	0.5	0.9
55	鳥羽I・J・K区	K94号住居	10 C 後葉	(5.0)	0.7	0.6	2.3
56	大久保A・II	105号住居	10℃後葉	6.3	0.3	-	0.6
57	大久保A・II	116号住居	10 C末	5.9	0.7		0.8
-	有馬I	6号住居	10~11C			0.4	
$\vdash$				9.6	0.6	0.4	0.6
$\rightarrow$	鳥羽L・M・N・O区	L121号住居	10~11C	7.0	0.4		1.2
60	上野国分僧寺·尼寺中間地域(4)	C区56号住居	11 C	(9.6)	0.9	0.8	2.1
61	上野国分僧寺・尼寺中間地域(5)	B区52号住居	11 C	(5.6)	0.4	0.3	1.1
1	鳥羽L・M・N・O区	L136号住居	11C	(9.0)	0.6	0.8	1.2
63	有馬I	131号住居	11 C	9.9	1.2	0.8	1.8
	大久保A・II	60号住居	11 C 前葉	14.6	0.8	0.7	1.2
$\rightarrow$	有馬条里	HH−8号住居	11 C 中葉	5.3	0.6		1.5
65	鳥羽I・J・K区	K23号住居	11 C 後葉	7.4	0.5		1.1
_							

第33表 観察表(1)



第68図 鉄器集成(2)

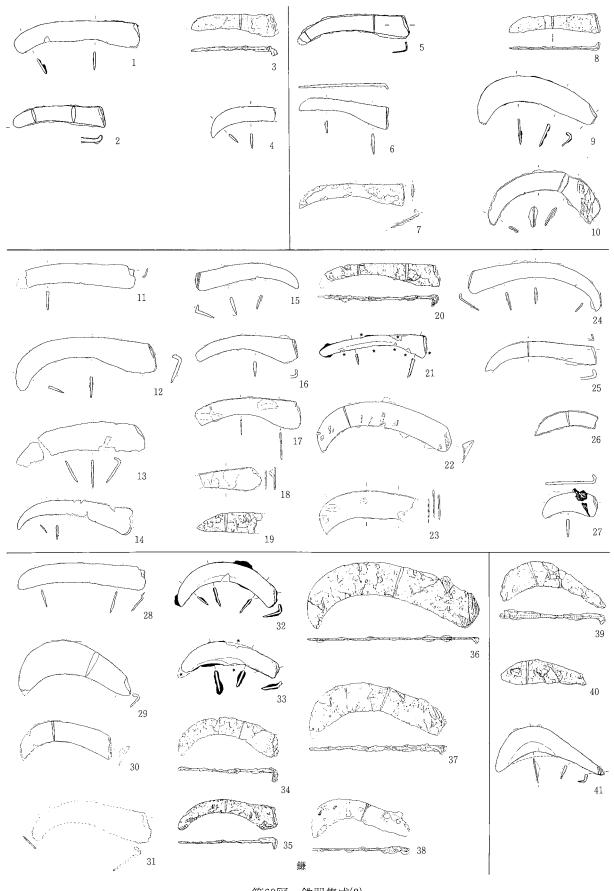
# 刀子

番号	遺跡名	出土位置	時 期	全 長	刀身長	刀身幅	刀身厚さ	茎長さ	茎 幅	茎厚さ
1	上野国分僧寺·尼寺中間地域(4)	J区7号住居	7 C	(11.0)	8.4	1.2	_	(2.6)	0.9	0.4
2	本宿・郷土	本宿MT6B号住居	7 C	(13.1)	(9.6)	1.4	_	(3.5)	0.9	
3	国分境	B区15号住居	7 C後葉	(14.9)	(9.9)	1.5		5.0	2.1	
4	鳥羽I・J・K区	J 72号住居	7 C後葉~8 C前葉	19.8	12.2	1.5		7.6	1.1	0.5
5	大久保A・I	9 号住居	7 C末~ 8 C初頭	19.5	11.4	2.1	0.3	8.1	1.5	
6	善慶寺	39号住居	7 C~8 C	7.8	3.3	1.2		4.5	0.8	0.3
7	上野国分僧寺·尼寺中間地域(6)	A区139号住居	8 C	10.2	4.5	1.1	0.4	5.7	0.8	
8	上野国分僧寺·尼寺中間地域(7)	I 区208号住居	8 C前葉	(19.8)	(12.8)	1.2	0.5	7.0	0.9	_
9	村主	6号住居	8 C前葉	17.4	10.4	1.4		7.1	1.0	
10	嶺・下原	4 号住居	8 C 前葉	11.9	6.6	1.0	0.4	5.3	0.9	
11	大久保A・I	94号住居	8 C中葉	16.8	10.2	1.5	0.5	6.6	1.1	_
12	荒砥上ノ坊II	3 区 3 号住居	8 C後葉	(11.0)	8.7	1.3	0.6	(2.3)	0.8	0.4
13	鳥羽I・J・K区	J 76号住居	8 C後葉	(12.9)	(9.9)	1.2		3.0	1.1	0.9
14	上野国分僧寺·尼寺中間地域(7)	I 区72号住居	9 C	(11.4)	9.3	1.5	_	2.1	0.9	0.3
15	上野国分僧寺·尼寺中間地域(4)	B区1号住居	9 C	(16.2)	(9.6)	1.0	0.3	6.6	0.8	
16	上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)	C区135号住居	9 C	(14.4)	12.6	2.1		1.8	0.8	0.2
17	本宿・郷土	郷土GD52号住居	9 C前葉	(14.9)	(14.9)	2.2	_		_	_
18	芳賀東部団地 I	H397号住居	9 C中葉	22.2	13.7	1.7	0.4	8.6	1.2	_
19	北原	32号住居	9 C後葉	24.8	13.8	2.4	0.6	11.0	1.8	-
20	分郷八崎	52号住居	9 C後葉	19.5	11.4	1.5	_	8.1	0.8	_
21	分郷八崎	57号住居	9℃後葉	15.9	9.0	1.3		6.9	0.9	
22	中尾	E9号住居	9 C後葉	(16.7)	12.6	12.6	-	4.1	0.6	_
23	上野国分僧寺·尼寺中間地域(4)	C区146号住居	9 C後葉	(11.4)	(9.0)	0.9	0.3	(2.4)	0.6	0.3
24	鳥羽A・B・C・D・E・F区	D88号住居	9 C後葉	(16.8)	12.3	1.5	0.4	(4.5)	0.9	0.4
25	有馬I	169号住居	9 C後葉	(15.4)	10.3	1.5	0.8	(5.1)	0.6	
26	上野国分僧寺·尼寺中間地域(3)	D区10号住居	10 C	13.4	8.1	1.6	_	5.3	1.1	
27	上野国分僧寺·尼寺中間地域(5)	B区118号住居	10 C	14.4	7.2	1.2	0.4	7.2	0.7	0.4
28	有馬 I	193号住居	10 C	(17.1)		1.2	0.3		_	_
29	国分境	C区11号住居	10 C	14.5	9.3	1.1	0.3	5.1	0.8	0.3
30	鳥羽I・J・K区	J 67号住居(a)	10C前葉	27.3	18.0	2.7	_	9.3	2.0	_
31	鳥羽I・J・K区	J 67号住居(b)	10℃前葉	(20.1)	(20.1)	1.3	0.5		_	_
32	鳥羽A・B・C・D・E・F区	D127号住居	10C前葉	19.7	12.3	1.1	0.3	7.4	0.9	0.3
33	鳥羽G・H・I区	G9号住居	10℃前葉	(14.6)	8.6	1.5	0.4	6.0	0.9	0.3
34	鳥羽A・B・C・D・E・F区	E7号住居	10C前葉	(16.5)	(8.1)	1.2	0.5	6.9	1.3	_
35	前田	10号住居	10C前葉	18.6	12.3	3.3	0.6	6.3	1.2	0.6
36	上野国分僧寺•尼寺中間地域(2)	G区136号住居	10C前葉	17.0	9.0	1.2	0.3	8.0	0.6	0.6
37	有馬条里	HH-41号住居	10C前葉	(10.8)	8.4	1.1	0.5	(2.4)	0.8	0.6
38	前田	16号住居	10 C 後葉	19.2	12.0	3.9	_	7.2	1.5	_
39	芳賀東部団地II	H245号住居	11 C 前葉	27.0	12.8	2.0	0.5	14.3	2.0	0.3
40	鳥羽L·M·O·N区	M42号住居	11 C	(14.9)	11.0	1.8	0.4	3.9	1.1	
41	上野国分僧寺・尼寺中間地域(3)	C区1号住居	11 C	17.4	9.6	1.4	_	7.8	0.9	

# 鉄鏃

	<i>9</i> 40.7											
番号	遺 跡 名	出土位置	時	期	全 長	鏃身長	鏃身幅	鏃身厚	箆被長	箆被幅	茎 長	茎幅
1	芳賀東部団地II	H229号住居	7 C前葉		(10.8)	(4.7)	(2.9)	0.3	(7.1)	0.8		
2	村主	13号住居	7 C末		(11.9)	0.8	0.8		8.1	0.7	(3.0)	0.6
3	荒砥上ノ坊II	3区6号住居	8 C後葉		(7.4)	2.9	2.9	0.3	2.9	0.9	(2.4)	0.5
4	上野国分僧寺·尼寺中間地域(6)	A区84号住居	8 ∼10 C		(10.1)	(6.3)	(3.3)		(3.8)	1.1		
5	上野国分僧寺·尼寺中間地域(7)	I区H40号住居	8 C		(13.2)	(4.5)	(4.5)		4.8	0.9	(6.8)	0.4
6	上野国分僧寺·尼寺中間地域(6)	A区11号住居	8∼9 C		(15.5)	(5.6)	(4.5)		(12.3)	0.8		
7	大久保A・I	94号住居(a)	8 C中葉		12.5	3.6	2.3		4.2	1.1	4.7	0.8
8	村主	11号住居	8 C前葉		(6.9)	0.3	0.6	0.3	4.5	0.8	(2.1)	0.5
9	村主	30号住居	8 C 前葉		(4.5)	0.6	0.8					
10	本宿・郷土	郷土GD51号住居(a)	8 C前業		11.9	5.0	2.4		1.7	1.1	5.1	0.5
11	本宿・郷土	郷土GD51号住居(b)	8 C前葉		10.8	4.2	2.6		2.3	1.1	4.2	0.5
12	大久保A·I	94号住居(b)	8 C 中葉		14.1	1.1	0.8	0.2	10.2	0.5	2.4	0.5
13	芳賀東部団地 I	H439住	8 C後葉		11.3	7.2				1.7	4.1	0.6
14	中尾	D62号住居	9 C後葉		(9.0)	4.1	3.9		2.6	1.2	3.2	0.7
15	鳥羽I・J・K区	J 34号住居(a)	9 C前葉		(9.3)	3.9	0.8		1.7	0.4	(3.8)	0.3
16	鳥羽I・J・K区	J 34号住居(b)	9 C 前葉		(6.0)	4.2	0.6	0.2	1.8	0.3		
17	鳥羽I・J・K区	K36号住居	9 C後葉		12.6	2.3	1.1		8.3	0.5	3.6	0.3
18	芳賀東部団地II	H201号住居	9 C後葉		(10.9)	(2.1)	1.8		(8.8)	0.9		
19	上野国分僧寺・尼寺中間地域(7)	I 区H32号住居	9 C		(9.0)	0.8	(0.8)					
20	中尾	D123号住居	9 C後葉		(4.1)	4.1	3.6					
21	有馬 I	110号住居	9 ~10 C		(9.9)	6.9	3.9	0.6	(3.0)	1.1		
22	鳥羽G・H・I区	G75号住居	9 C後葉		9.2	4.4	3.9	0.6			1.1	0.8
23	上野国分僧寺·尼寺中間地域(7)	I 区64号住居	9 C		(8.6)	1.5	3.0	0.3	6.5	1.3	0.6	0.5

第34表 観察表(2)



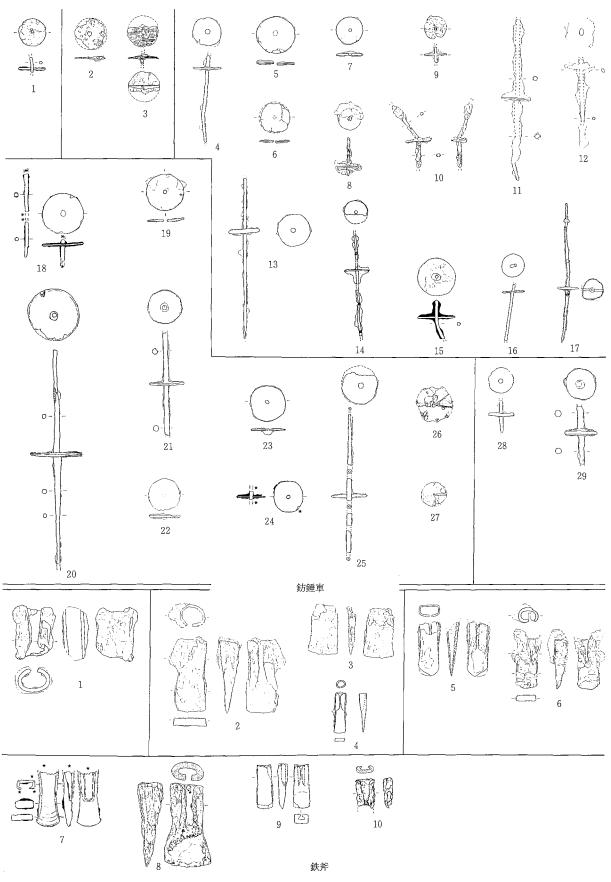
第69図 鉄器集成(3)

番号	遺跡名	出土位置	時	期	全 長	鏃身長	鏃身幅	鏃身厚	箆被長	箆被幅	茎 長	茎幅
24	大久保A・II	133号住居	10C後葉		11.9	3.8	2.0		3.0	0.8	5.0	0.3
25	国分境	C区18号住居	10 C 前葉		8.9	3.8	1.7		3.8	1.1	1.2	0.5
26	鳥羽I・J・K区	K10号住居	10C前葉		(10.2)	3.8	2.1		7.2	0.6		
27	上野国分僧寺·尼寺中間地域(4)	C区21号住居	10 C		(10.1)	3.8	1.4		4.4	3.8		0.5
28	大久保A・II	123号住居	10C後葉		(12.0)	3.9	1.8		8.1	0.6		
29	国分境	B区38号住居	10 C 前葉		8.2	2.7	2.3				5.6	0.6
30	国分境	C区75号住居(a)	10 C		(11.1)	5.4	3.6		2.3	1.0	(4.7)	0.5
31	国分境	C区75号住居(b)	10 C		(7.1)	1.5	2.6		4.7	0.6	0.8	0.4
32	大久保A・II	78号住居	10C後葉		(9.9)	5.7	2.4		2.5	1.2	(1.7)	0.8
33	大久保A・II	126号住居	10C後葉		9.9	4.4	1.2		2.4	0.9	3.2	0.6
34	上野国分僧寺・尼寺中間地域(5)	B区127号住居	10 C		(11.4)	2.9	1.9		4.2	1.1	2.7	0.5
35	110111 (112.70 - )	21号住居	10C以降		(10.4)	5.4	1.7		1.4	0.9	(3.6)	0.7
36	鳥羽A・B・C・D・E・F区	F区28号住居	10℃前葉		11.3	3.9	2.5					0.8
37	上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)	C区19号住居	10 C		6.5	1.2	1.2		2.8	0.6	2.3	0.5
38	大久保A・II	57号住居	10 C末		(12.5)	(9.9)			2.6	0.6		
39	上野国分僧寺・尼寺中間地域(7)	I区4号井戸	10 C		(12.6)	10.8			(1.9)	0.6		
40	大久保A・II	105号住居	10 C後葉		(10.5)	3.6	2.9	1.4			0.5	0.5
41	上野国分僧寺・尼寺中間地域(3)	C区1号住居	11 C		(14.1)	(3.8)	2.1	0.3	5.3	0.9	(0.5)	0.5
42	上野国分僧寺·尼寺中間地域(4)	C区65号住居	11 C		(4.4)	(4.4)	1.5					
43	鳥羽A・B・C <u>・D・</u> E・F区	F区17号住居	11 C		12.2	4.7	1.7		2.4	0.8	(5.0)	0.6
44	有馬条里	HHー33号住居	11C後葉		(14.7)	8.7	2.0	0.8	2.4	1.1		
45	上野国分僧寺·尼寺中間地域(4)	C区43号住居	11 C		10.1	7.5	3.9				0.5	
46	有馬I	145号住居	11 C		11.4	1.7	3.0				10.2	2.3
47	有馬条里	HH-11号住居	11C前葉		11.4	9.5	2.9	9.0			2.0	0.8

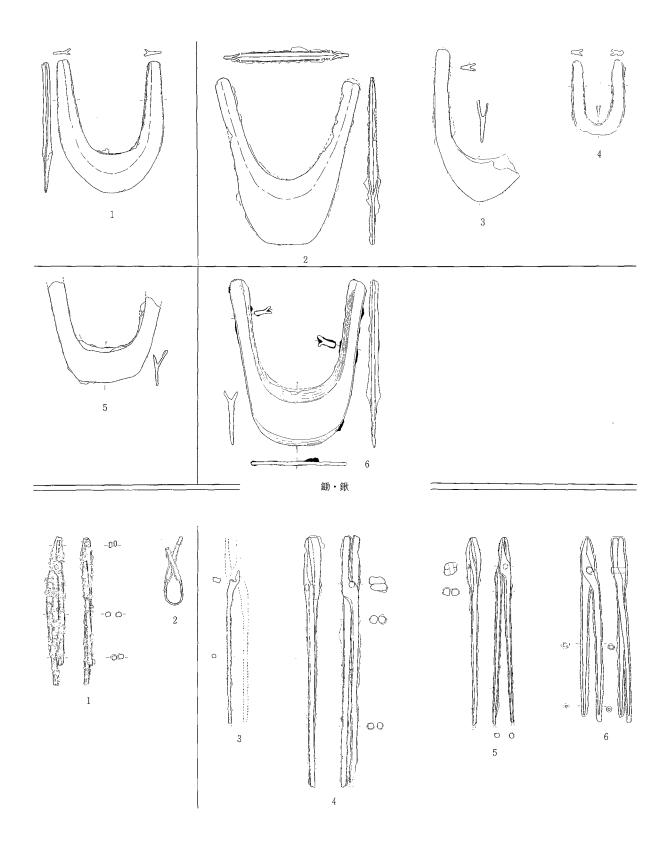
# 鎌

番号	遺 跡 名	出土位置	時 期	長さ	幅	厚さ	類型
1	上野国分僧寺・尼寺中間地域(7)	I 区137号住居	7 C後葉	20.1	3.9		а
2	中尾	C123号住居	7 C後葉	14.7	2.6	0.6	a
3	大久保A・I	60号住居	7 C末~ 8 C初頭	13.8	3.6	0.5	а
4	上野国分僧寺・尼寺中間地域(7)	I 区63号住居	7 C前葉	10.8	2.4	0.4	b
5	中尾	D73号住居	8 C後葉	18.0	3.3	0.3	b
6	芳賀東部団地II	H120号住居	8 C 中葉	14.4	2.1	0.4	b
7	嶺・下原	5号住居	8 C前葉	16.5	3.5	0.3	ь
8	大久保A・I	40号住居	8 C前葉	14.4	3.3	0.4	b
9	上野国分僧寺・尼寺中間地域(7)	I 区179号住居	8 C前葉	19.1	4.2	0.4	С
10	上野国分僧寺·尼寺中間地域(3)	H区97号住居	8 C	18.0	3.6	2.5	С
11	芳賀東部団地 II	H216号住居	9 C前葉	(17.4)	3.7	0.5	b
12	芳賀東部団地 II	H148号住居	9 C前葉	22.2	4.8	0.4	Ъ
13	芳賀東部団地II	H90号住居	9 C後葉	(20.4)	4.4	0.3	b
14	芳賀東部団地II	H14号住居	9 C前葉	18.3	4.0	0.3	Ъ
15	芳賀東部団地II	H50号住居	9 C前葉	16.4	3.0	0.5	b
16	芳賀東部団地 II	H250号住居	9 C中葉	(16.2)	3.9	0.5	Ъ
17	分郷八崎	20号住居	9 C後葉	16.8	4.2	0.2	b
18	分郷八崎	24号住居	9 C前葉	(9.8)	3.6	0.3	b
19	大久保A・II	8 号住居	9 C後葉	(10.5)	3.3	0.3	b
20	大久保A・II	104号住居	9 C 初頭	(18.3)	3.3	0.5	Ъ
21	上野国分僧寺·尼寺中間地域(5)	B区107号住居	9 C	16.5	3.0	0.4	b
22	分郷八崎	57号住居	9 C後葉	21.5	3.9	0.3	С
23	分郷八崎	36号住居	9 C前葉	(15.3)	4.2	0.2	С
24	芳賀東部団地Ⅱ	H348号住居	9 C中葉	21.0	3.3	0.3	С
25	有馬I	92号住居	9 C後葉	(18.0)	3.0	0.4	С
26	鳥羽G・H・I区	G80号住居	9 C後葉	(10.2)	2.4	0.4	С
27	芳賀東部団地II	H253号住居	9 C 中葉	(9.0)	3.5	0.5	d
28	芳賀東部団地Ⅱ	H324号住居	10C後葉	20.4	3.6	0.3	Ъ
29	有馬 I	59号住居	10~11 C	18.0	5.1	0.9	С
30	分郷八崎	44号住居	10 C 前葉	14.5	3.2	0.3	С
31	北原	84号住居	10C前葉	(18.3)	4.8	0.4	С
32	上野国分僧寺·尼寺中間地域(5)	A区202号住居(b)	10 C	15.3	3.0	0.2	С
33	上野国分僧寺·尼寺中間地域(5)	A区202号住居(a)	10 C	16.2	3.3	0.3	С
34	大久保A・II	71号住居(a)	10C前葉	15.9	3.9	0.3	С
35	大久保A・II	71号住居(b)	10C前葉	15.9	3.6	0.1	С
36	大久保A・II	71号住居(c)	10C前葉	27.3	5.1	0.5	С
37	大久保A·II	13号住居	10C後葉	21.9	4.5	0.5	С
38	大久保A・II	80号住居	10C後葉	15.6	3.6	0.3	С
39	大久保A・II	129号住居	11C前葉	17.0	3.9	0.5	С
	大久保A・I	101号住居	11C後葉	13.8	3.6	0.3	С
41	上野国分僧寺·尼寺中間地域(3)	D区14号住居	11 C	17.4	5.4	0.4	С

第35表 観察表(3)



第70図 鉄器集成(4)



鉄鉗・鋏 第71図 鉄器集成(5)

# 紡錘車

番号	遺跡名	出土位置	時	期	円盤径	円盤厚さ	軸径
1	上野国分僧寺·尼寺中間地域(7)	I 区76号住居	7 C		4.2	0.3	0.3
2	大久保A・I	6 号住居	8 C後葉		5.0	0.3	_
3	大久保A・I	11号住居	8 C後葉		5.0	0.3	0.5
4	芳賀東部団地II	H216号住居	9 C前葉		4.5	0.3	0.6
5	上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)	G区21号住居(a)	9 C前葉		6.2	0.2	0.7
6	上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)	G区21号住居(b)	9 C前葉		4.8	0.2	0.4
7	上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)	G区66号住居	9 C 前葉		4.2	0.3	0.5
8	新寺地区遺跡群	A H-12号住居	9 C 中葉		3.6	0.3	0.4
9	嶺・下原II遺跡	H-11号住居	9 C後葉		3.7	0.2	0.5
10	嶺・下原II遺跡	H-13号住居	9 C後葉		4.2	0.4	0.5
11	北原	90号住居	9 C後葉		4.8	0.2	0.6
12	北原	32号住居	9 C後葉		4.8	0.9	0.5
13	芳賀東部団地II	H197号住居	9 C後葉		5.0	0.7	0.6
14	中尾	D64号住居	9 C後葉		3.9	0.2	0.5
15	上野国分僧寺・尼寺中間地域(7)	I 区H1号住居	9 C後葉		6.0	0.2	0.4
16	国分境	C区13号住居	9 C後葉		3.6	0.3	0.4
17	鳥羽I・J・K区	K56号住居	9 ∼10 C		3.5	0.4	0.3
18	上野国分僧寺·尼寺中間地域(5)	D区1号住居	10 C		6.5	0.2	0.6
19	南部(権現1)	2号住居	10C以降		6.0	0.3	0.6
20	村主	33号住居	10 C 前葉		8.1	0.7	0.7
21	鳥羽G・H・I区	G9号住居	10C前葉		5.4	0.3	0.7
22	鳥羽A・B・C・D・E・F区	F3号住居	10 C 前葉		4.8	0.3	0.5
23	上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)	F区50号住居	10 C 前葉		5.4	0.3	0.6
24	上野国分僧寺・尼寺中間地域(5)	B区105号住居	10 C 前葉		4.5	0.2	0.6
25	有馬I	101号住居	10C後葉		5.7	0.6	0.7
26	大久保A・II	80号住居	10 C 後葉		5.6	0.2	0.6
27	大久保A・II	94号住居	10 C末		4.1	0.3	0.1
28	芳賀東部団地II	H245号住居	11 C 前葉		4.1	0.5	0.6
29	有馬条里	HH-22号住居	110前葉		3.6	0.5	0.9

# 鉄斧

番号	遺跡	名	出土位置	時	期	長さ	幅	厚き
1	新寺地区遺跡群		BH-22号住居	6 C前葉~	~9 C前葉	8.7	6.0	3.6
2	嶺・下原		H-5号住居	8 C前葉		11.4	4.5	3.0
3	嶺・下原		H-4号住居	8 C前葉		8.0	4.8	1.1
4	七日市		13号住居	8 C前葉		6.5	1.8	1.2
5	分郷八崎		24号住居	9 C前葉		(8.6)	3.3	2.0
6	嶺・下原II		H-12号住居	9 C後葉		(9.8)	3.2	2.3
7	上野国分僧寺・尼	寺中間地域(5)	B区118号住居	10 C		(8.6)	3.8	1.5
8	大久保A・II		109号住居	10C初頭		13.5	7.8	3.0
9	村主		21住	10℃前葉		6.9	2.6	1.5
10	大久保A・II		103号住居	10 C末		4.8	3.0	1.1

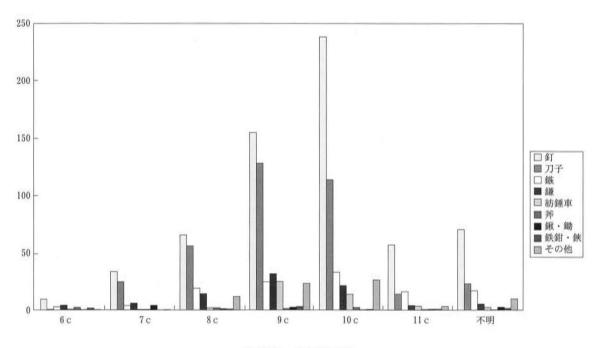
# 鋤·鍬

	-										
番号	遺	跡	名	出土位置	時	期	長き	幅	厚さ	刃先幅	器種
1	村主			20号住居	8 C前葉		20.1	16.8	1.1	6.3	鋤
2	芳賀東部E	]地II		H191号住居	9 C前葉		26.3	23.0	2.5	10.2	鋤
3	芳賀東部国	I地II		H257号住居	9 C後葉		23.3	(16.8)	1.7	6.8	鋤
4	鳥羽L·N	$1 \cdot N \cdot O$	区	L 189号住居	9 C後葉		10.5	8.0	0.8	(1.7)	鋤
5	上野国分僧	寺・尼寺	中間地域(6)	Z区4号住居	11 C		(15.5)	(18.0)	2.3	5.6	鍬
6	上野国分僧	寺・尼寺	中間地域(6)	C区50号住居	11 C 前葉		26.3	21.6	2.3	9.0	鋤

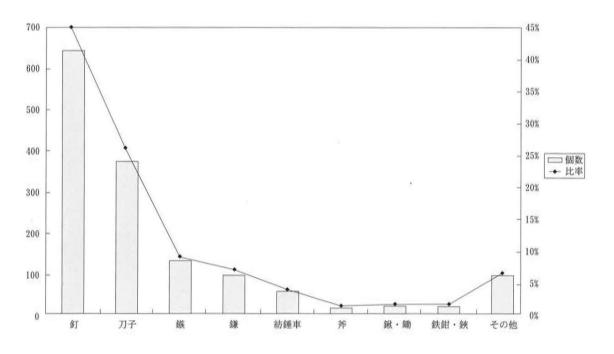
# 鉄鉗・鋏

番号	遺跡	名	出土位置	時	期	全 長	口先~鋲	肩幅	把の幅	把の厚	器;	種
1	嶺·下原II		H-7号住居	8 C前葉		23.7	4.8	1.9	0.8	0.7	鉄	鉗
2	鳥羽G・H・I区		I 103号住居	8 C後葉		10.8			3.0	0.6	鋏	
3	芳賀東部団地II		H52号住居	9 C前葉		(24.6)			1.2	0.6	鉄	鉗
4	芳賀東部団地II		T-2号鍛冶址	9 C後葉		39.7	7.8	2.6	1.2	1.2	鉄	鉗
5	芳賀東部団地II		H81号住居	9 C後葉		(29.4)	4.7	2.4	1.0	0.3	鉄	鉗
6	鳥羽L・M・N・O[	X.	I 5号溝	9 ∼10 C		28.2	5.3	2.6	0.9	0.6	鋏	

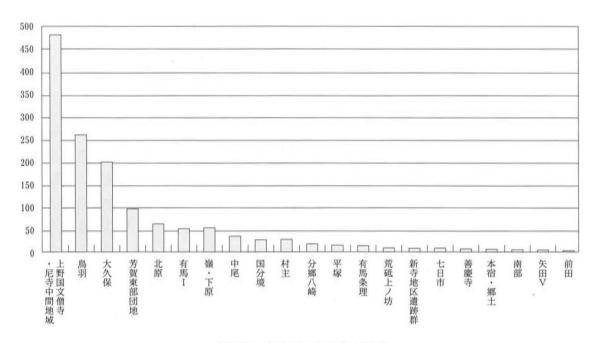
第36表 観察表(4)



第72図 時期出土数



第73図 鉄器の個数と比率



第74図 各遺跡の鉄器出土総数

# 遺跡別集成結果

	遺			跡		釖	刀子	釛灰	金維	紡錘車	斧	鋤 • 鍬	鉄鉗·鋏	その他	遺跡計
上班	<b> F国分僧</b>	宇・月	已寺	中間均	也域	285	111	22	15	13	2	3	2	28	480
鳥					KK	163	46	19	11	5	1	1	3	10	259
大		久			保	60	53	33	22	10	2	2		19	201
芳	賀東	į i	部	团	地	12	31	7	24	4	0	2	3	11	94
北					原	26	25	3	1	7				4	66
有		馬			I	17	28	4	3	1				1	54
微			下		原	13	26	1	2	7	3	1	1	0	54
中					尾	21	9	5	4	1				1	41
国		分			境	11	8	7	3	1				1	32
村					主	2	8	12	1	1	1	1		6	32
分	郷		八		崎		5	6	6		1			3	21
平					塚	20									20
有	馬		条		里	6	3	6		1				2	18
荒	砥	Ŀ		,	坊	4	3	1						4	12
新	寺 地	区	遺	跡	群		3		2	4	1				10
七		日			市		5		1		1	1		1	9
善		慶			寺	1	3	1							5
本	宿		3	郷	土.		2	2						1	5
南					部		1	1		2					4
矢		田			V		2	1	1						4
前					田		2								2
器		種			計	641	374	131	96	57	12	11	9	92	1,423

第37表 鉄器器種別総数

# 5 まとめ(集落規模の拡大と鉄製品)

前節に於いて、本遺跡の集落変遷と検出された鉄製品について概観し、集落増加と鉄製品の相関関係 を指摘した。ここで、それらを踏まえ集落の性格を若干整理しまとめとしたい。

#### 時代背景

まずはじめに、本遺跡の集落規模が拡大する8世紀から9世紀の社会的背景を概観しておく。この時代は、国家が全国支配のため地方支配体制の整備が行われた律令制時代である。律令制は大化二年(646年)に改新の詔によりその方針が明示された後、大宝元年(701年)に制定された大宝律令により法的裏付けがされ具体的な形で全国支配が実施されていく。地方支配においては、全国を畿内と東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・西海の7道の8地方に分け、各国はさらに郡・里に細分され国司・郡司・里長が置かれた。そして、上野国は東山道に属し『和名類聚抄』には碓氷、片岡、甘楽、多胡、緑野、那波、群馬、吾妻、利根、勢多、佐位、新田、山田、邑楽の14の郡が置かれたことが記載されている。これらの国ごとには国府、郡ごとには郡衙が置かれ、地方支配の拠点として機能していた。そしてこの国家体制の基礎は租・調・庸などの農民からの徴税にあって、そのために戸籍・計帳の作成、班田収授制が施行され口分田が班給されている。

#### 律令制と鉄製品

このような時代、鉄製品は律令制度を支える租税収入を増大するために不可欠な存在となった。すなわち、農業生産を発展させるため、耕作地の拡大や潅漑などの土木技術をより効率的に可能にするには、 農耕具の木製から鉄製への転化が重要な要素となったのである。そのため、鉄生産は律令体制下における経営の一環として地域に定着していったのである。

### 関東地方の鉄生産

関東地方の鉄生産を見ると、7世紀後半に製鉄炉が確認されるようになり、9世紀から10世紀に盛行をきわめている。そしてこのような動きは、律令国家の新たな経営施策の一つとして、城栅・官衙の北進とともに地域に定着していったと考えられている(1989寺島)。

鉄を生産するには採鉱に始まり、製錬、選別、鍛冶の工程がある。群馬県内における製錬炉の調査は、 太田市の菅ノ沢製鉄遺跡、伊勢崎・東流通団地遺跡、前橋市の芳賀東部団地遺跡、渋川金井製鉄遺跡な どがあり、その実態を知ることができる。鍛冶炉は8世紀以降の集落遺跡に数多く検出されていて、そ の傾向は群馬のみならず広範囲に認められている。鍛冶関連遺構の一般的な特徴は、竪穴式住居の形態 を持ち、床面中央付近に地床炉を有し、作業台としての扁平な礫(金床)などが置かれ、また、遺構内 からは羽口、鉄滓、鍛造剝片などが検出される。

このような鍛冶関連遺構は鉄器の製作・修理を目的とし、その性格によってつぎのように 2 分類される (1990松崎)。

- ①工房型鍛冶(I類) 鉄器生産を主な目的とし専業的に行い、鍛冶作業に必要な諸施設をあわせもつ、工房的性格の強いもの。
- ②副業型鍛冶(II類) 日常は農作業等を営みつつ必要に応じ、または農閑期に鉄器の製作や修理等

#### を副業的に行ったと思われるもの。

そして工房型鍛冶の中でも、中央の役所や国府・寺院等に付属するものを特に国衙工房型鍛冶と呼んでいる。群馬県内においては、鳥羽遺跡が上野国府との関連が推測され、官営の鍛冶工房としてそれにあたる。このほか、伊勢崎・東流通団地遺跡は佐位郡内工房として、芳賀東部団地遺跡は勢多郡内工房としての性格が考えられている(1987穴澤)。関東地方の他の国衙工房型鍛冶は、茨城県鹿の子C遺跡(常陸国衙工房)、埼玉県の皀木原遺跡(賀美郡内工房)、檜下遺跡、神奈川県向原遺跡(相模国衙辺工房)、また寺院に付属すると考えられている鍛冶工房は千葉県真行寺廃寺、東京都市立四中遺跡などが知られている。

## 嶺・下原、嶺・下原Ⅱ遺跡と鉄製品

このような時代背景の中、本遺跡は鉄製品とどのようなかかわりをもった集落だったのであろうか。住居と鉄製品の関係を見ると、検出された住居は41軒、内訳は6世紀1軒、7世紀2軒(内2軒から鉄器6点)、8世紀11軒(内6軒から鉄器60点)、9世紀20軒(内6軒から鉄器39点)、10世紀6軒(内3軒から鉄器11点)である。住居軒数、鉄器出土率ともに8世紀から9世紀に急増することが分かる。鉄器の種類は鎌、鋤・鍬、刀子、鉄斧、紡錘車、釘、鏃、割ピン状金具、鉄鉗、鏨などと多くの種類が検出されている。前節においても述べたように鉄鉗、鏨は鍛冶工具であり、遺構的に鍛冶を裏付ける地床炉や作業台、鍛造剝片や明確な焼土の分布を確認することは出来なかったが、鉄鉗が出土したH-7号住(嶺・下原II)には鍛冶に必要な砥石も検出され、H-13号住(嶺・下原II)からは羽口2点と多くの鉄滓が確認されている。これらの事実は、集落内で鍛冶が行われていることを物語り、また、出土鉄器の数量及び種類の豊富さも鉄器製作に示唆的である。このほか、鏨が出土したH-12号住(嶺・下原II)には、柱穴に礎石が確認されるなど他の住居にはない構造的な特徴があり、鍛冶関連遺構の可能性を推測させる。

つぎにこれらの遺構の配置をみると(第75図)8世紀には鉄器を出土する住居としない住居が混在し 南西部にまとまっていたが、9世紀になると鉄器が出土する住居は南から南西に、出土しない住居は北 東に分かれて位置することが確認される。このことは、集落内で鍛冶工房区と生活区の様な使い分けが 行われている可能性を予測させ、また、掘建柱建物址が鉄器の出土する区域内に集中して存在すること も示唆的である。

#### 鍛冶集落の性格

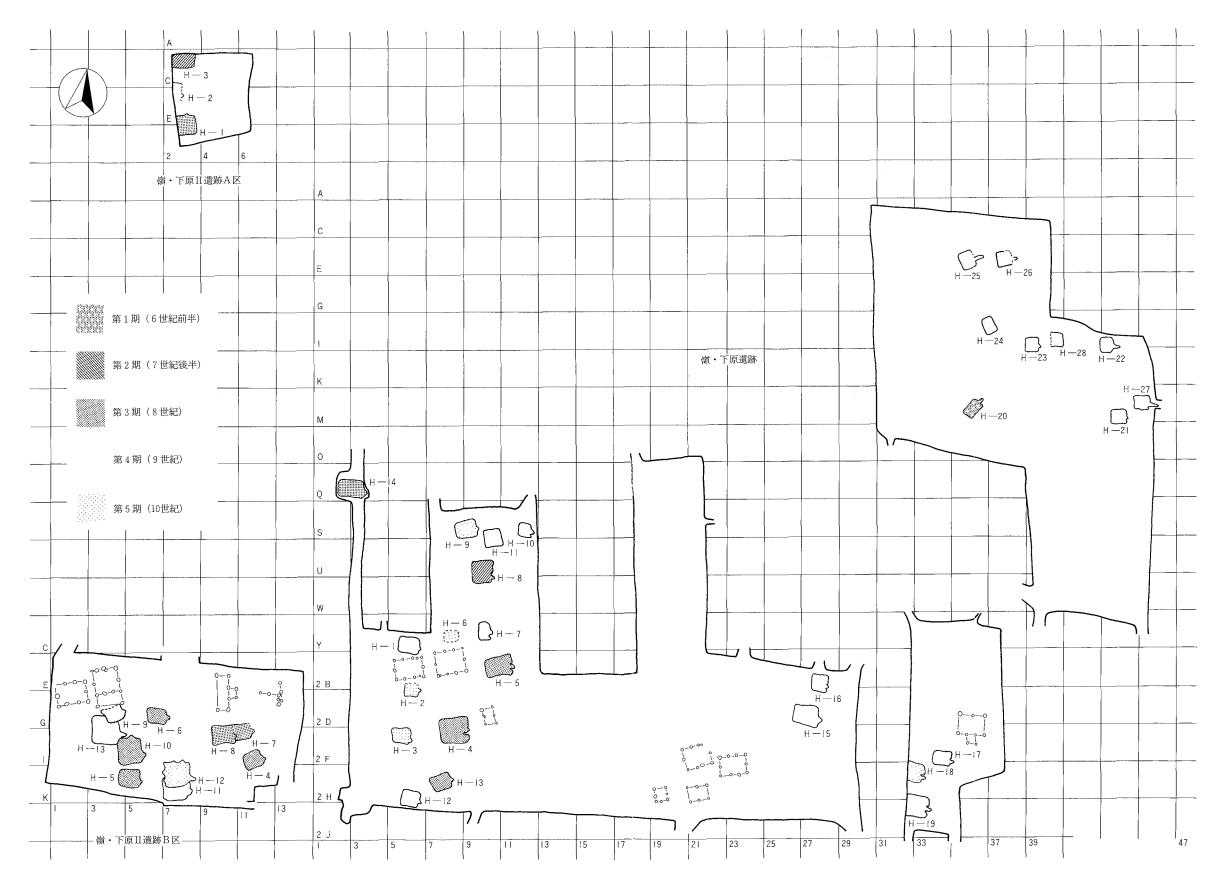
以上のように、集落内において鍛冶が行われていることを推定したが、その性格について前出の松崎 氏の分類に当てはめ考えてみたい。

本遺跡の場合、前節において述べたように、製鉄・鍛冶関連の遺跡と比べ住居址1軒あたりの鉄製品出土率は高いが、遺構として鍛冶を明確に示すものがないなどの点を考えれば、日常は農作業を行い、必要に応じ鉄器の製作や修理を行った副業型鍛冶(II類)に分類することができる。しかし、集落の立地条件を見ると、水田耕作不良地へ進出した新開集落的性格が強く、農業による経済基盤の弱さが指摘される(1991千田)。このような集落においての鉄器製作は、日常的に農業を行いその耕地拡大のために農具・工具としての鉄製品を製作しただけではなく、工房型鍛冶とは性格を異にするが、鉄器製作そのものにある程度の重点が置かれていたものではないだろうか。すなわち、8世紀から9世紀の住居数急

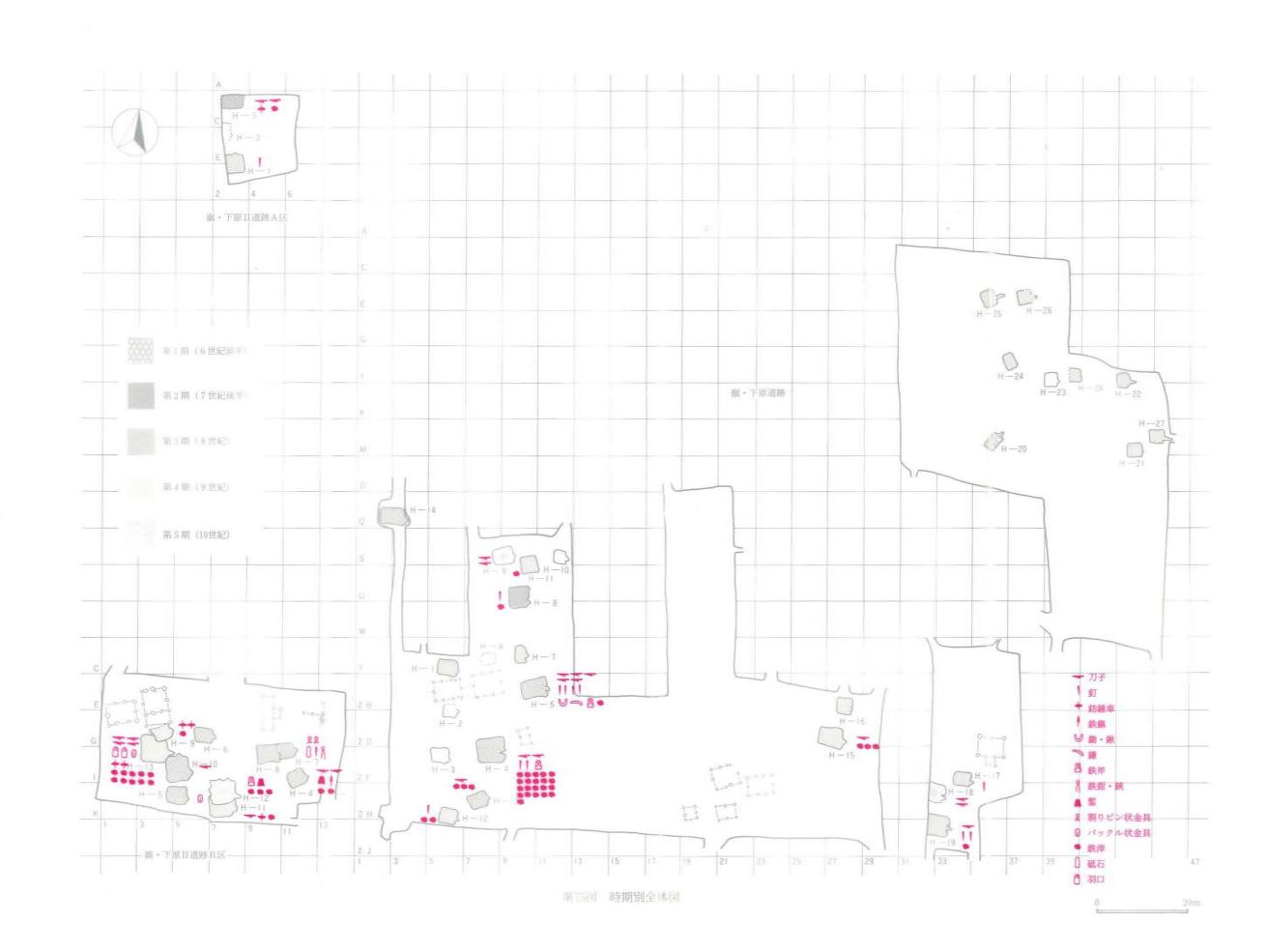
増による集落規模拡大の背景には、水田耕作などによる農業と、鉄器生産という多角的な生産形態(前節で指摘したように紡績業なども考慮する必要があろう)に支えられた経済基盤があり、その画期に鉄器生産が大きく関与していると考えられるのである¹゚。

以上のように、鍛冶集落として本遺跡を想定し、その様相について整理してみた。しかし遺構・遺物から類推される間接的な根拠によるところが多いのも事実であり、問題点は多く残されている。そして、社会背景はまさに律令制時代であり、律令政府は地方支配やその体制を支える租税収入を増大する意図から、8世紀前半に三世一身の法や墾田永年私財法などによる土地政策を行っている。今後はこのような時代下に、本集落がどのように地方支配体制の中に組み込まれていたのかなどを考えていく必要があるであろう。しかし、この遺跡の調査だけでは当然解明できる問題ではなく、周辺の集落や律令体制下における碓氷郡あるいは上野国に及ぶ広範な視野に立った分析が必要となろう?。

- 1) 安中市内の同時期の集落である新寺地区遺跡群、また隣接する松井田町の松井田工業団地遺跡群においても9世紀に集落規模の拡大が確認されている。そしてその要因として、集落内で小鍛冶が行われている可能性があることから、鉄製品の普及が経済基盤としての耕作地を拡大したことと、中野谷地区遺跡群で確認された「牧」との関係の指摘がなされている(1991大工原・金井・和田)。
- 2) 本集落は律令体制の時代背景下、碓氷郡の中に組み込まれている集落である。集落規模の拡大には律令政府の土地 政策と鉄器生産の2つの要素が考えられ、鉄器に関しては、調庸の税としての鉄器といった点も考慮されるであろ う。鳥羽遺跡のように職業集団として組織された国衙工房の場合、中央集権体制の確立と交通網の整備により供給 が広域化し、かなり広範な交易がされている(1991井上)が、このような国衙工房と性格を異にするものの、東山 道などの交通網との関係も念頭に置く必要があろう。



第75図 時期別全体図



#### 引用・参考文献

都出比呂志 1967 「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』13-3

土 井 義 夫 1971 「関東地方における住居址出土の鉄製農具について」『物質文化』18

窪 田 蔵 郎 1973 『改訂鉄の考古学』 雄山閣

森 浩一 1974 『日本古代文化の探究 鉄』 社会思想社

高橋一夫 1976 「製鉄遺跡と鉄製農具」『考古学研究』22-3

土 井 義 夫 1976 「製鉄農耕具研究ノート」『どるめん』10

山口 直 樹 1977 「出土鉄製品の集成と考察」『山田水呑遺跡(2)』 日本道路公団・山田遺跡調査会

山 口 直 樹 1978 「関東地方土師時代後・晩 I・晩 II 期における農具について」『駿台史学』45

宮本長二郎 1979 「住生活」『日本考古学を学ぶ』(2) 有斐閣

穴澤義功 1981 「製鉄遺跡にみる四つの流れ」『歴史公論』66

佐藤正好 1983 「鍛冶工房について」『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5 鹿の子C遺跡』 茨城県教育財団

佐藤正好 1983 「鉄製品について」『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5 鹿の子C遺跡』 茨城県教育 財団

能 登 健 1983 「熊倉遺跡の再調査」『群馬文化』193

綿 貫 綾 子 1983 「出土土器の分類と編年」『有馬条里遺跡』 渋川市教育委員会

佐藤正好・川井正一 1983 「結語」『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書5 鹿の子C遺跡』 茨城県教育財 団

穴澤義功 1984 「製鉄遺跡からみた鉄生産の展開」『季刊考古学』 8

大 澤 正 己 1984 「古墳供献鉄滓からみた製鉄の開始時期」『季刊考古学』 8

桂 敬 1984 「製鉄遺跡で採取される鉄滓の組成」『季刊考古学』 8

菊池 徹夫 1984 「擦文文化と鉄」『季刊考古学』 8

佐々木 稔 1984 「古代日本における製鉄の起源と発展」『季刊考古学』 8

菅原俊行 1984 「竪型炉をもつ製鉄址」『季刊考古学』 8

土 佐 雅 彦 1984 「製鉄炉跡からみた炉の形態と発達」『季刊考古学』 8

中山俊紀 1984 「7世紀前半の製鉄遺構」『季刊考古学』 8

能 登 健 1984 「山棲み集落の探求」『熊倉遺跡』 六合村教育委員会

橋口達也 1984 「弥生文化と鉄」『季刊考古学』 8

佐々木稔・村田朋美 1984 「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」『季刊考古学』 8

高橋信雄・赤沼英男 1984 「蕨手刀からみた東北北部の古代製鉄技術」『季刊考古学』 8

能登 健・洞口正史・小島敦子 1985 「山棲み集落の出現とその背景」『信濃』37-4

滝澤 亮 1985 「古代東国における鉄製紡錘車の研究」『物質文化』44

大 江 正 行 1986 「出土の精製遺物について」『大原 II 遺跡・村主遺跡』 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査 事業団

坂口 一 1986 「古墳時代後期の土器の編年」『群馬文化』28

綿 貫 邦 男 1986 「成果と課題」『鳥羽遺跡 I ・J・K区』 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

坂口 一・三浦京子 1986 「奈良・平安時代の土器の編年」『群馬県史研究』24

穴 澤 義 功 1987 「関東地方を中心とした古代製鉄遺跡研究の現状と課題」『日本古代の鉄生産 1987年度たたら研究 会大会資料』 たたら研究会

飯 塚 武 司 1987 「後期古墳出土の鉄鏃について」『研究論集』V 東京都埋蔵文化財センター

桜 岡 正 信 1987 「古墳時代中期~奈良・平安時代の遺物」『上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)』 群馬県教育委員会・ 群馬県埋蔵文化財調査事業団

桜 岡 正 信 1987 「古墳時代(中期)~平安時代の遺構」『上野国分僧寺・尼寺中間地域(2)』 群馬県教育委員会・群 馬県埋蔵文化財調査事業団

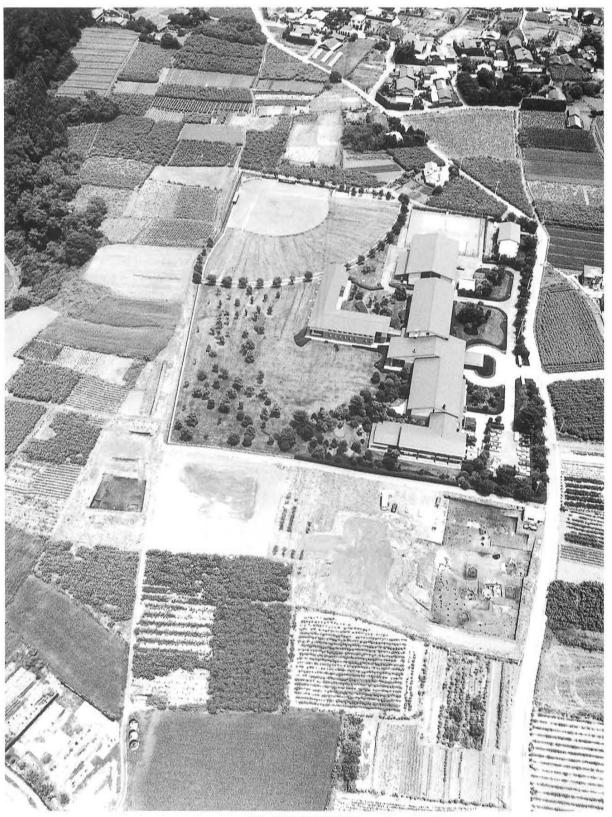
松 井 和 幸 1987 「日本古代の鉄製鍬先、鋤先について」『考古学雑誌』72-3

- 木津博明 1988 「遺構」『上野国分僧寺・尼寺中間地域(3)』 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 小 林 敏 夫 1988 「群馬県出土の腰帯具について」『群馬の考古学』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 杉 山 秀 宏 1988 「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』 8 橿原考古学研究所
- 芹 沢 正 雄 1988 「古代製鉄技術用語の検討」 『たたら研究』 29 たたら研究会
- 中 沢 悟 1988 「村主遺跡出土土器の分類と検討」『大原 II 遺跡・村主遺跡』 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化 財調査事業団
- 唐澤保之・前原照子 1988 「古代集落の検討」『芳賀東部団地遺跡II』 前橋市教育委員会
- 唐澤保之・前原照子 1988 「土器の分類」『芳賀東部団地遺跡II』 前橋市教育委員会
- 中沢 悟・春山秀幸・関口功一 1988 「古代布生産と在地社会」『群馬の考古学』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 河瀬正利 1989 「近世の製鉄遺跡」『考古学ジャーナル』313
- 潮 見 浩 1989 「鉄の生産をめぐって」『考古学ジャーナル』313
- 清 永 欣 吾 1989 「鉄器・鉄滓の分析」 『考古学ジャーナル』 313
- 芹 沢 正 雄 1989 「「古代製鉄技術用語の検討」に関するアンケート調査報告」『たたら研究』30 たたら研究会
- 寺島文隆 1989 「古代・中世の製鉄遺跡(東日本)| 『考古学ジャーナル』313
- 野原建一 1989 「文献からみた近世の製鉄」『考古学ジャーナル』313
- 花田勝広 1989 「倭政権と鍛冶工房」『考古学研究』36-3
- 平 野 修 1989 「奈良・平安時代集落出土の鉄鏃をめぐる若干の問題」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』1 帝 京大学山梨文化財研究所
- 福田豊彦 1989 「文献資料から見た古代・中世の製鉄」『考古学ジャーナル』313
- 松 井 和幸 1989 「古代・中世の製鉄遺跡(西日本)」『考古学ジャーナル』313
- 石野博信 1990 『日本原始・古代住居の研究』 吉川弘文館
- 田 口 修 1990 『松井田工業団地遺跡群』 松井田町教育委員会・群馬県企業局
- 松 崎 元 樹 1990 「丘陵地における古代鉄器生産の諸問題」『研究論集』 V 東京都埋蔵文化財センター
- 千田茂雄・大工原豊 1990 『榎木畑遺跡』 安中市教育委員会
- 穴澤義功 1991 「関東地方」『日本古代の鉄生産』 たたら研究会
- 天 野 哲 也 1991 「北海道」『日本古代の鉄生産』 たたら研究会
- 飯塚武司 1991 「鉄鏃」『研究論集』 X 東京都埋蔵文化財センター
- 石川 克博 1991 「律令体制と上野国」『群馬県史』通史編2・原始古代2 群馬県
- 石川克博 1991 「奈良時代の上野国司」『群馬県史』通史編2・原始古代2 群馬県
- 石川克博 1991 「上野国府と郡衙」『群馬県史』通史編2・原始古代2 群馬県
- 井上唯雄 1991 「上野国の手工業」『群馬県史』通史編2・原始古代2 群馬県
- 井上唯雄 1991 「製鉄業」『群馬県史』通史編2・原始古代2 群馬県
- 井上唯雄 1991 「集落の構成と生活」『群馬県史』通史編2・原始古代2 群馬県
- 井上唯雄 1991 「集落の構成」『群馬県史』通史編2・原始古代2 群馬県
- 井上唯雄 1991 「集落の出土遺物」『群馬県史』通史編2・原始古代2 群馬県
- 大 江 正 行 1991 「窯業」『群馬県史』通史編 2 · 原始古代 2 群馬県
- 大澤正己 1991 「古代鉄生産」『日本古代の鉄生産』 たたら研究会
- 金 井 京 子 1991 「新寺地区遺跡群における古墳時代~奈良・平安時代の土器群の変遷について」『新寺地区遺跡群』 安中市教育委員会
- 川西宏幸 1991 「儀仗の矢鏃」『考古学雑誌』76-2
- 坂 ロ 一 1991 「荒砥北三木堂遺跡出土の土師器と須恵器の編年」 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業 団
- 佐々木 稔 1991 「金属学からみた古代の鉄」『日本古代の鉄生産』 たたら研究会
- 潮見 浩 1991 「考古学からみた古代の鉄」『日本古代の鉄生産』 たたら研究会
- 須 田 茂 1991 「東山道と上野国の駅家」『群馬県史』通史編2・原始古代2 群馬県
- 関 清 1991 「北陸・中部地方」『日本古代の鉄生産』 たたら研究会
- 関  $\Box$  功  $\Box$  1991 「律令国家と上毛野朝臣氏」『群馬県史』通史編 2・原始古代 2 群馬県

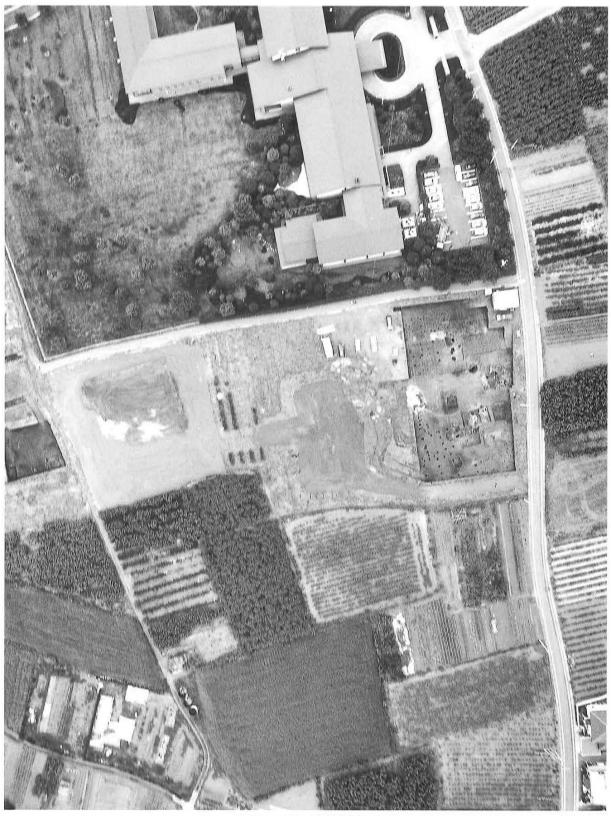
- 関口功一 1991 「田辺史氏の上毛野君改賜姓とその前後」『群馬県史』通史編2・原始古代2 群馬県
- 関口 功一 1991 「在地豪族の成長と上毛野氏」『群馬県史』通史編2・原始古代2 群馬県
- 千田茂雄 1991 『九十九川沿岸遺跡群1』 安中市教育委員会
- 千 田 茂 雄 1991 『嶺·下原遺跡』 安中市教育委員会
- 大工原 豊 1991 『新寺地区遺跡群』 安中市教育委員会
- 寺島文隆 1991 「東北地方」『日本古代の鉄生産』 たたら研究会
- 当 真 嗣 一 1991 「沖縄」『日本古代の鉄生産』 たたら研究会
- 橋口達也 1991 「九州地方」『日本古代の鉄生産』 たたら研究会
- 平川 南 1991 「機内と東国と蝦夷」『群馬県史』通史編2・原始古代2 群馬県
- 福田豊彦 1991 「文献史学からみた古代の鉄」『日本古代の鉄生産』 たたら研究会
- 北条秀樹 1991 「律令税制と農民の負担」『群馬県史』通史編2・原始古代2 群馬県
- 松 井 和 幸 1991 「中国・四国地方」『日本古代の鉄生産』 たたら研究会
- 丸山竜平 1991 「近畿地方」『日本古代の鉄生産』 たたら研究会
- 吉川金次 1991 『鍛冶道具考-実験考古学ノート』 平凡社
- 藤田等・村上英之助 1991 「討論」『日本古代の鉄生産』 たたら研究会
- 川越哲志・佐々木稔・潮見 浩・福田豊彦・藤田 等・村上英之助 1991 「座談会 「日本古代の鉄生産をめぐって」」 『日本古代の鉄生産』 たたら研究会
- 大工原 豊 1992 『田中田·久保田遺跡』 安中市教育委員会
- 千田茂雄 1994 『九十九川下流遺跡群2』 安中市教育委員会
- 千田茂雄 1994 『九十九川沿岸遺跡群3』 安中市教育委員会
- 杉 山 秀 宏 1995 「群馬県出土の鉄鏃について」 『群馬県内古墳出土の武器・武具』 群馬県古墳時代研究会
- 河瀬正利 1995 『たたら吹製鉄の技術と構造の考古学的研究』 渓水社
- 小筆一成·津野 仁·飯塚俊昭 1995 「鍛冶遺構」『金山遺跡III』 栃木県教育委員会 栃木県文化振興事業団
- 赤 沼 英 男 1996 「遺物の解析結果からみた半地下式竪型炉の性格」『季刊考古学』57
- 赤 沼 英 男 1996 「城館跡出土遺物の組成からみた鉄器製作とその流通」『季刊考古学』57
- 赤 沼 英 男 1996 「荒砥上ノ坊遺跡出土鉄製遺物の金属学的解析」『荒砥上ノ坊遺跡 II』 群馬県教育委員会・群馬県 埋蔵文化財調査事業団
- 五十川伸矢 1996 「古代から中世前半における鋳鉄鋳物生産」『季刊考古学』57
- 大澤正己 1996 「金山遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『金山遺跡IV (鍛冶関連遺物編)』 栃木県教育委員会 栃木県文化振興事業団
- 岡田康博 1996 「古代末の津軽」『季刊考古学』57
- 川上貞雄 1996 「中世初頭の越後」『季刊考古学』57
- 津野 仁 1996 「鍛冶遺構について」『金山遺跡IV』 栃木県教育委員会 栃木県文化振興事業団
- 佐々木 稔 1996 「解明の鍵・隣接諸科学間の協同」『季刊考古学』57
- 関 清 1996 「古代末の北陸」『季刊考古学』57
- 中 沢 悟 1996 「紡錘車の基礎研究(1)」『研究紀要』13 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 中 沢 悟 1996 「紡錘車の基礎研究(2)」『専修考古学』 6 専修大学考古学会
- 福田豊彦 1996 「文献からみた鉄の生産と流通」『季刊考古学』57
- 古 瀬 清 秀 1996 「近世たたら吹き製鉄への道」『季刊考古学』57
- 津野 仁・吉田 哲 1996 「鍛冶遺構」『金山遺跡IV』 栃木県教育委員会 栃木県文化振興事業団
- 赤 沼 英 男 1997 「荒砥上ノ坊遺跡出土鉄製遺物の金属学的解析(2)」『荒砥上ノ坊遺跡III』 群馬県教育委員会・群馬県 埋蔵文化財調査事業団

# 写 真 図 版

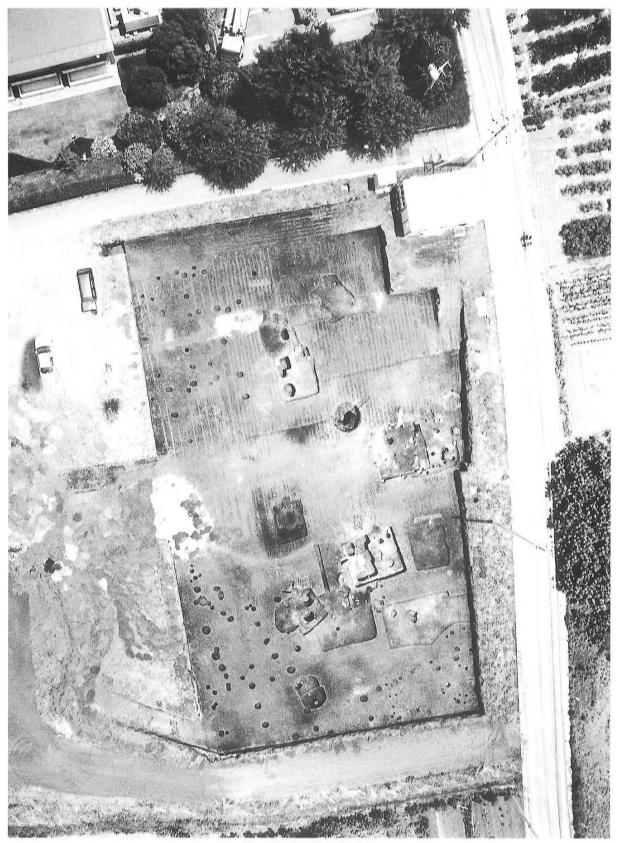
# 図版 1



嶺·下原II遺跡遠景



嶺·下原II遺跡全景



嶺・下原Ⅱ遺跡B区全景

# 図版 4



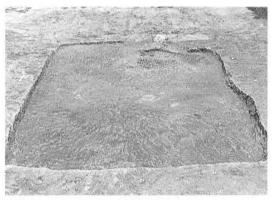
嶺·下原II遺跡A区全景



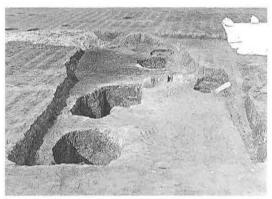
H-1住 全景



H-3住 全景



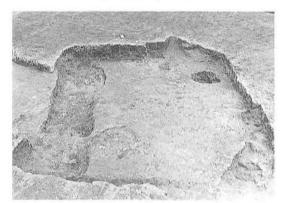
H-5住 全景



H-8住 全景



H-2住 カマド



H-4住 全景



H-6住 全景



H-9住 全景

# 図版 6



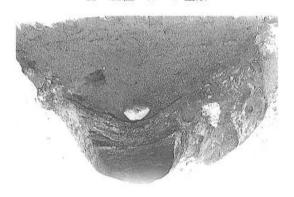
H-10住 全景



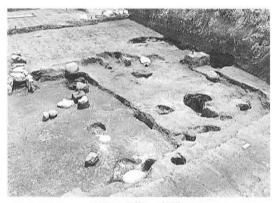
H-12住 全景



H−12住 カマド全景



井戸



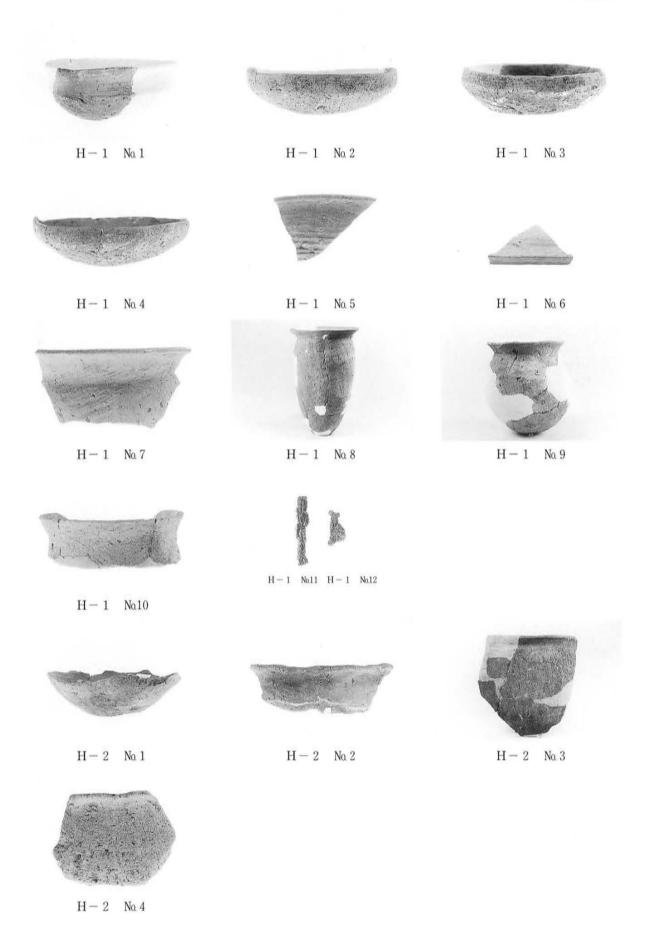
H-11住 全景

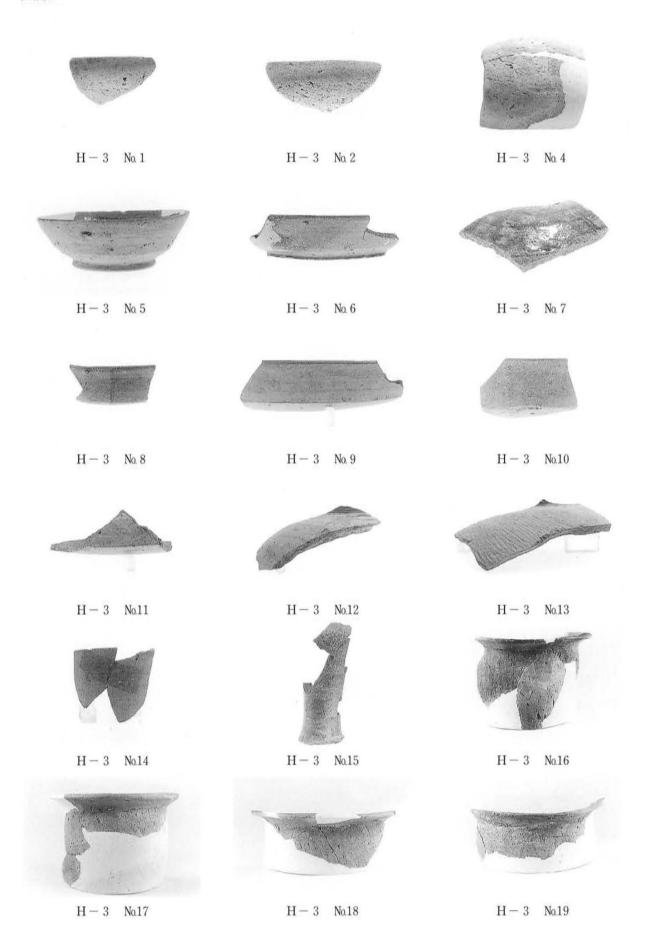


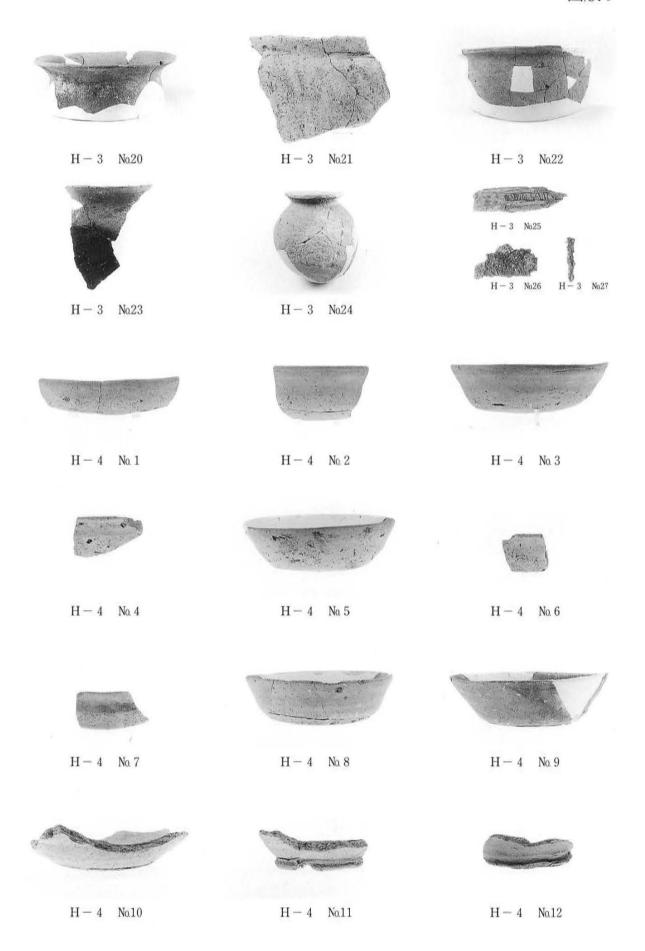
H−12住 カマド全景

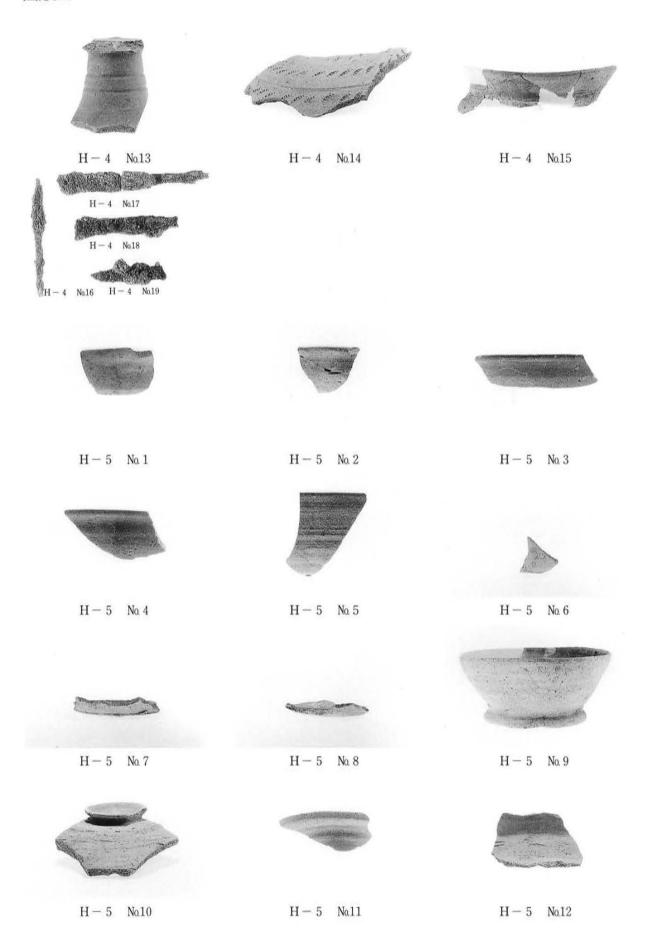


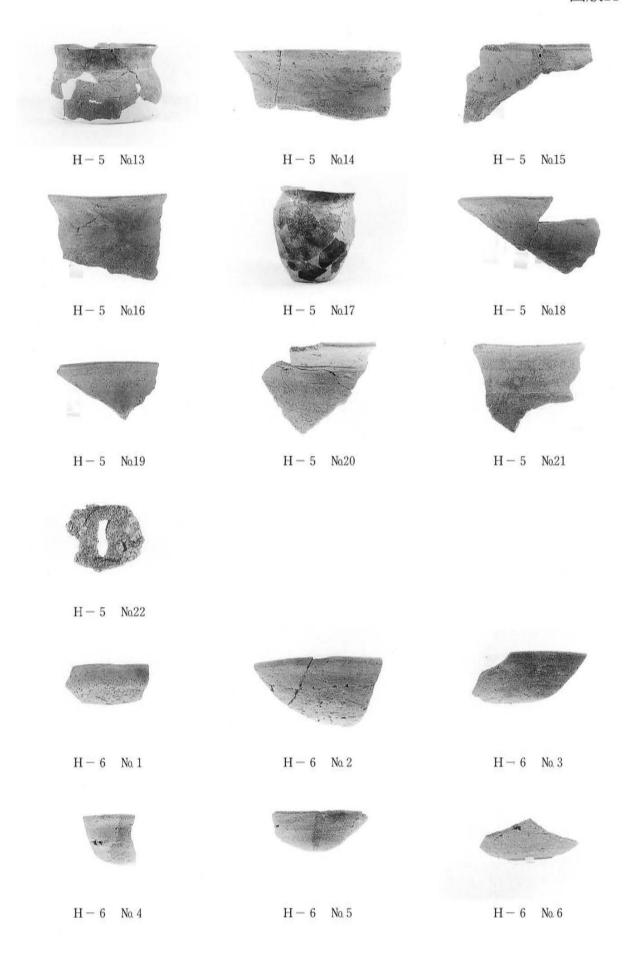
H-13住 全景

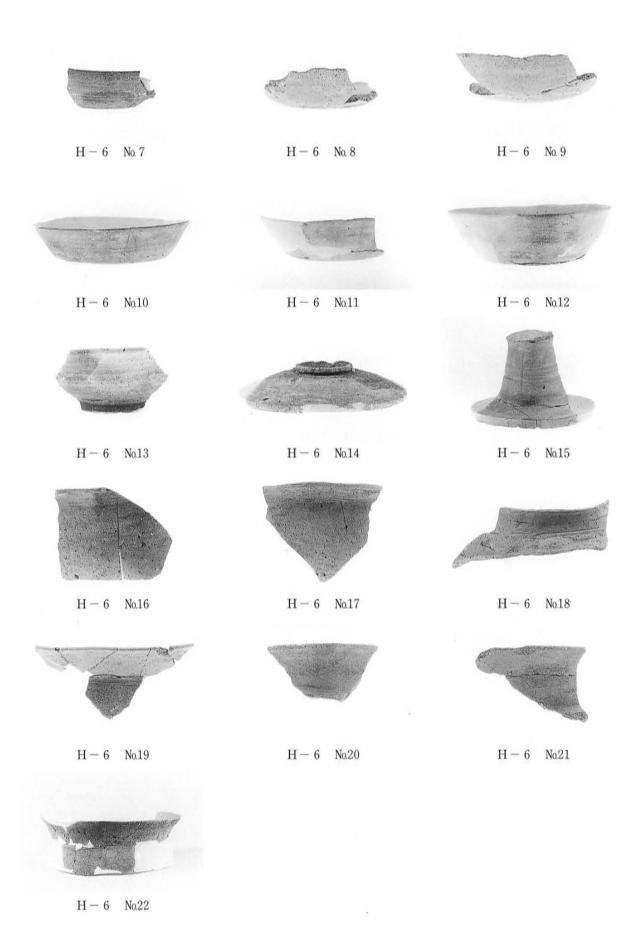


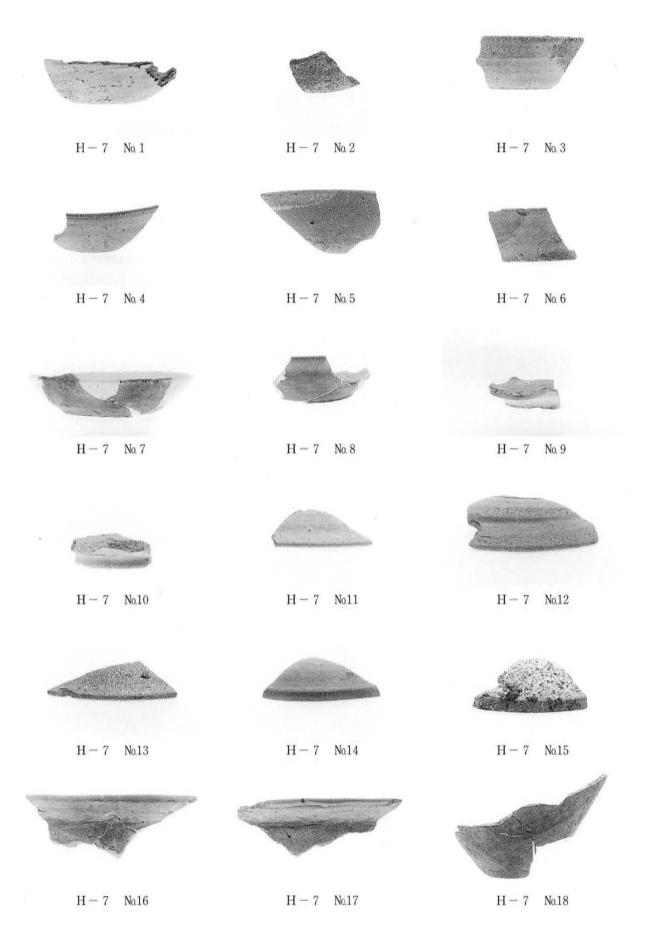


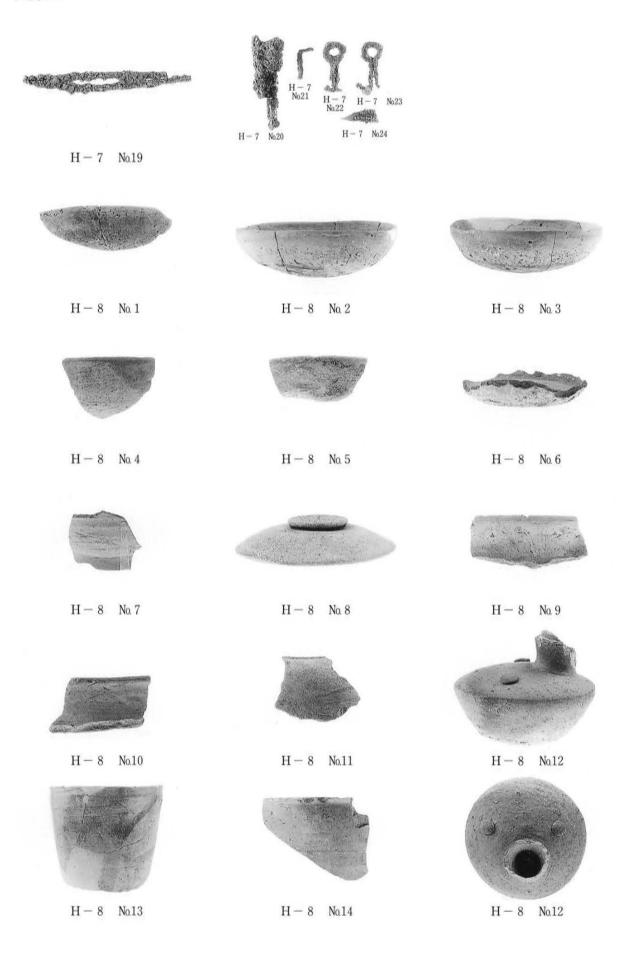


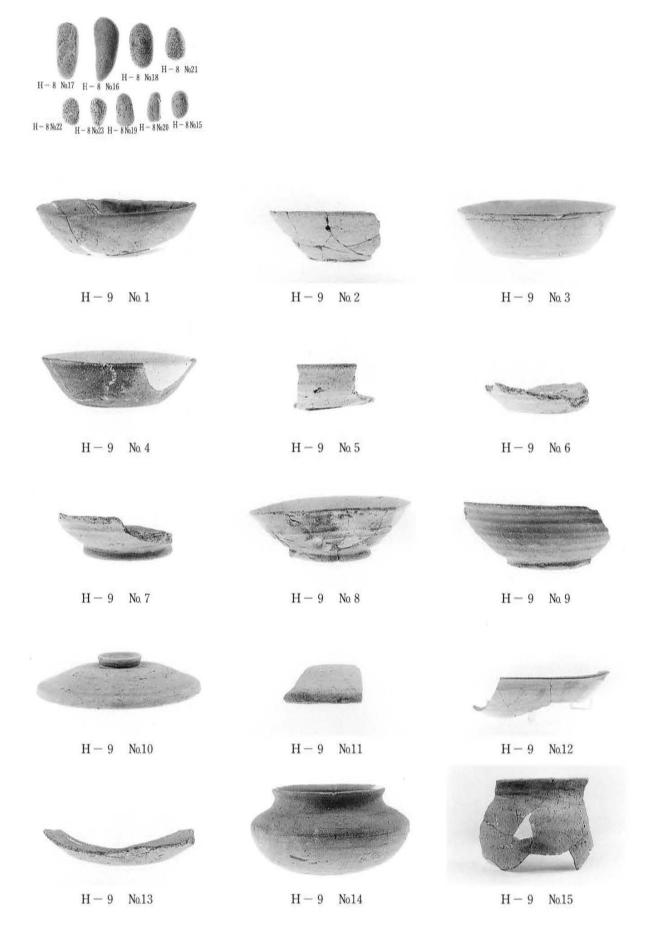


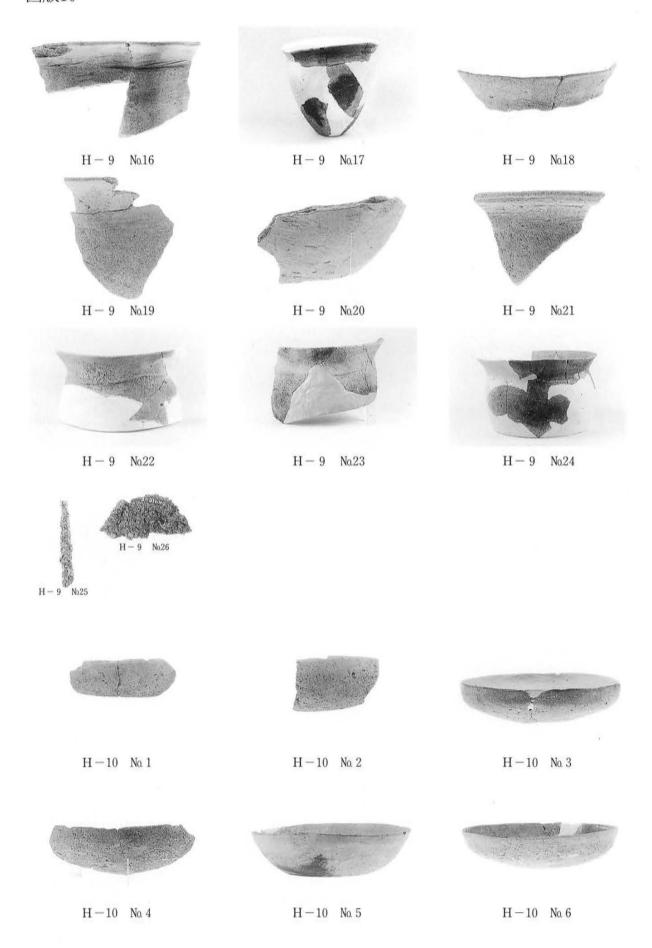


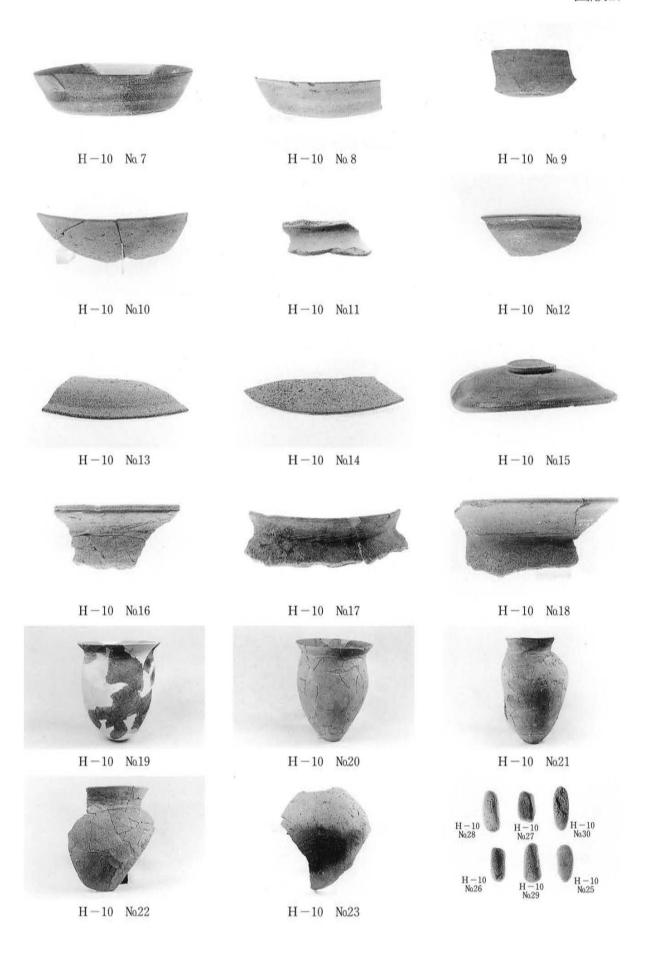


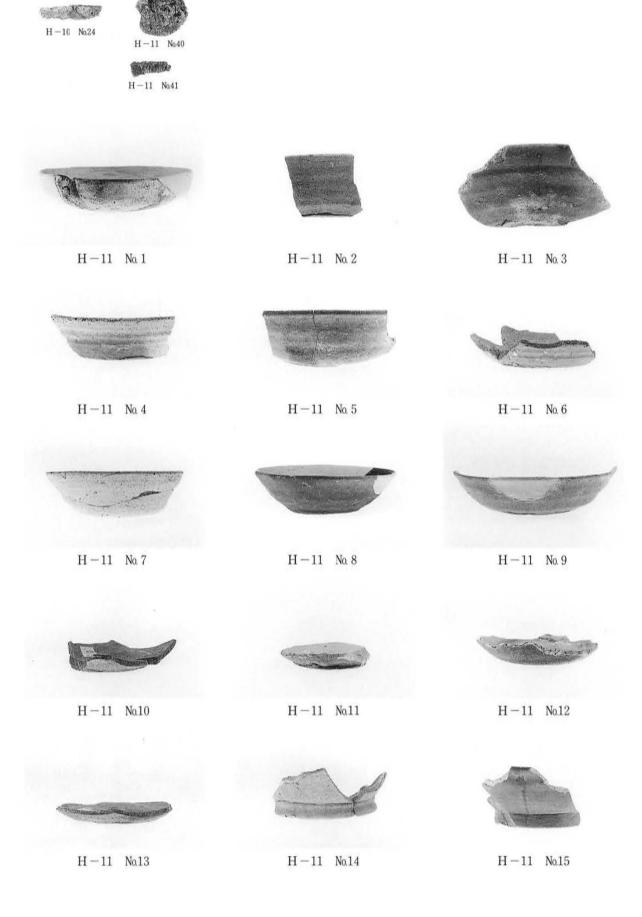


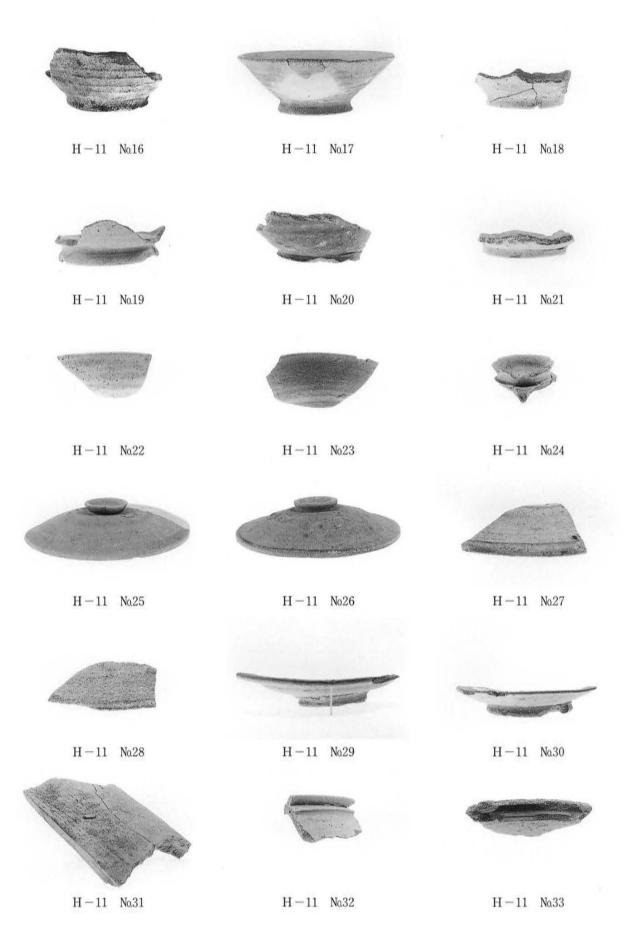


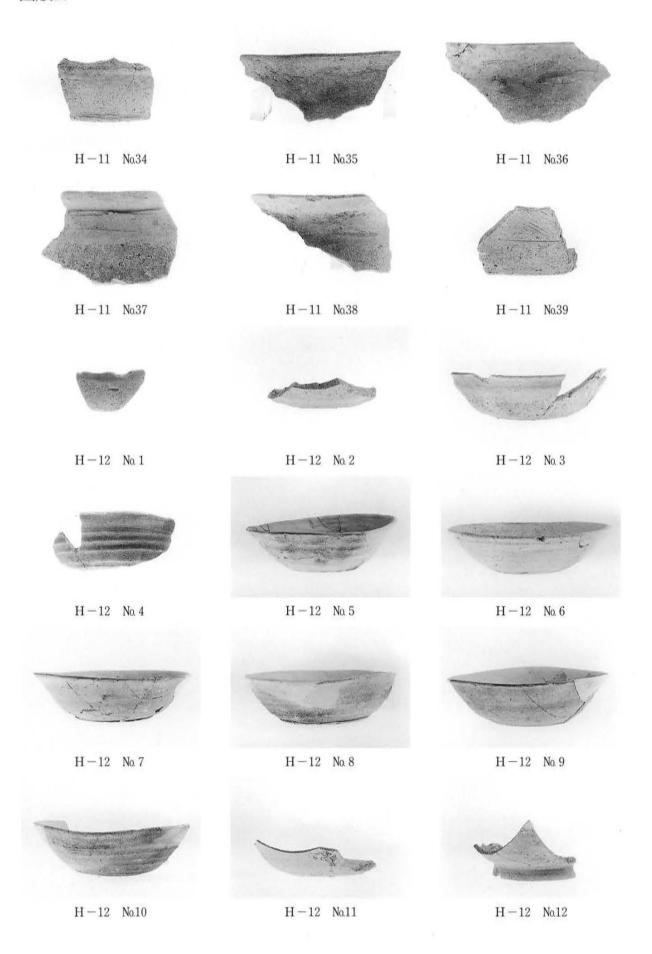


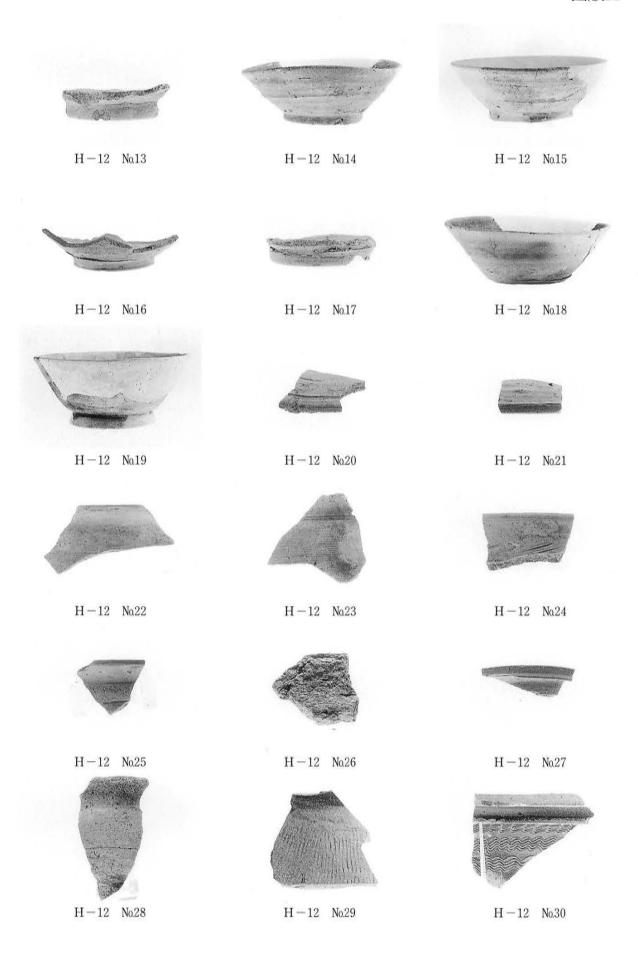


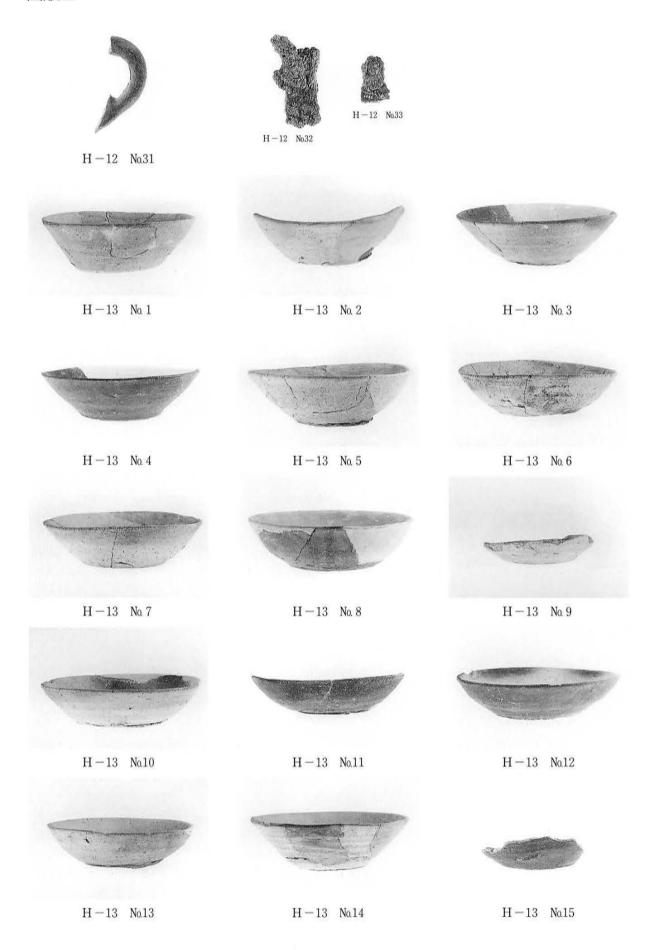


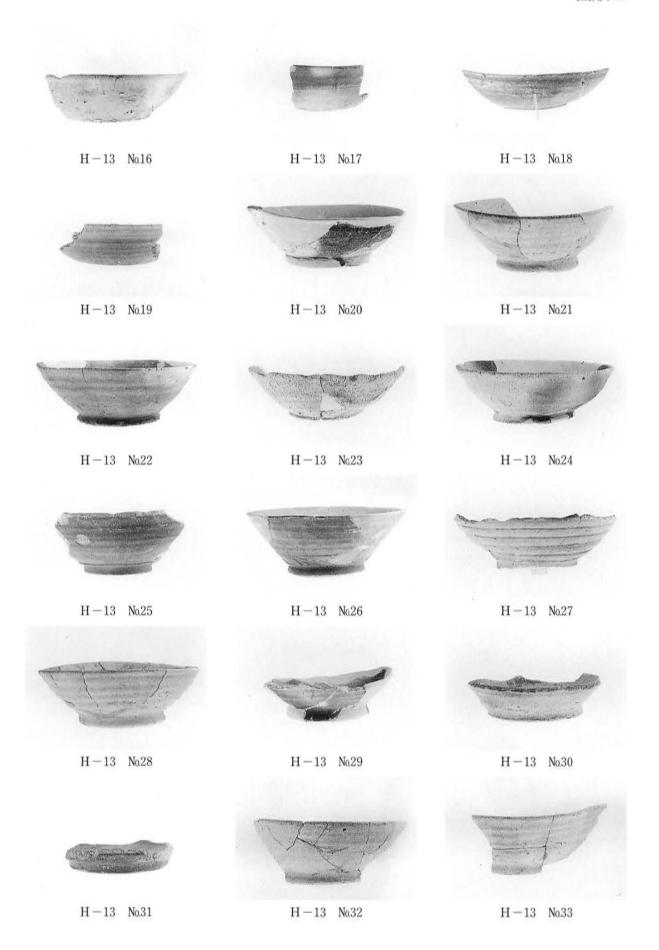


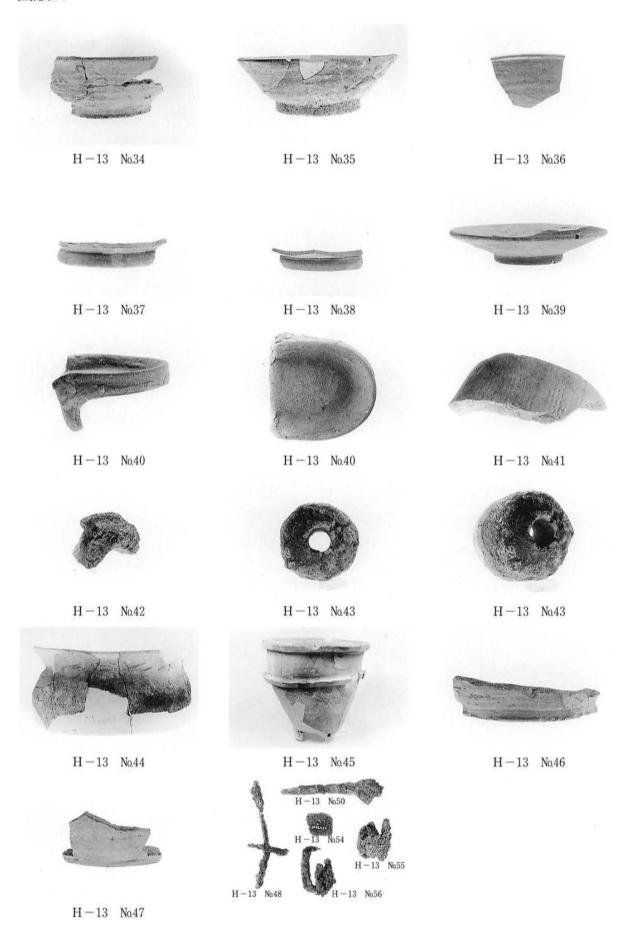


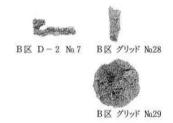
















A区 グリッド A区 グリッド No.6 No.7



B区 グリッド № 9



B⊠ P-20 No.1



A区 グリッド No. 9



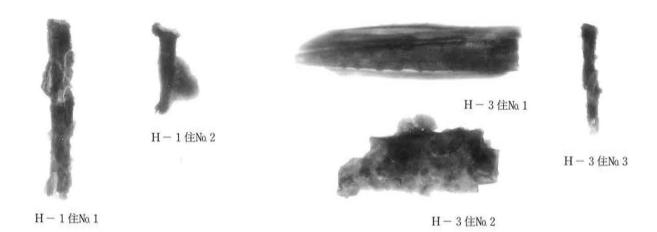
B区 グリッド No. 9

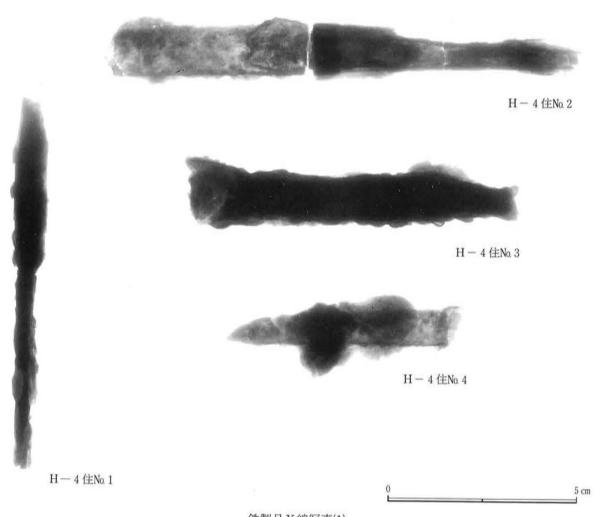


A区 グリッド No.10



B区 グリッド No. 9

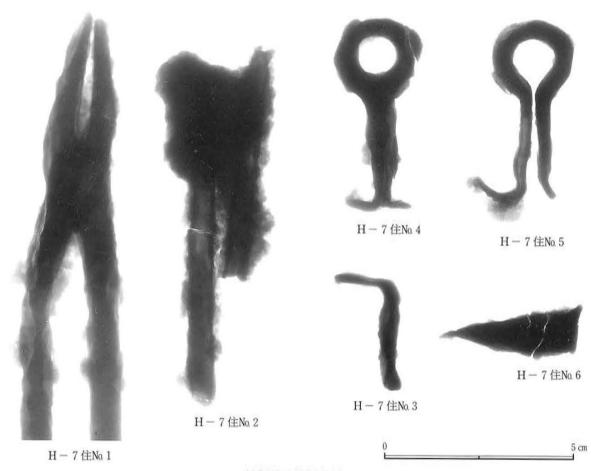




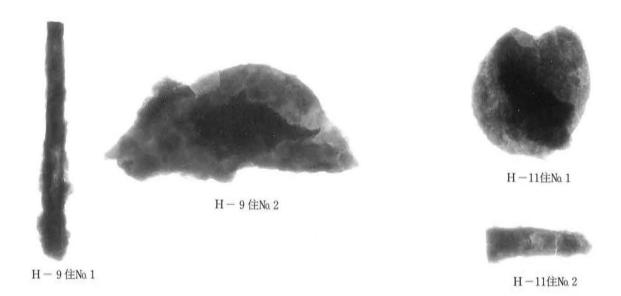
鉄製品 X 線写真(1)



H-5住No.1



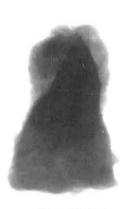
鉄製品 X 線写真(2)







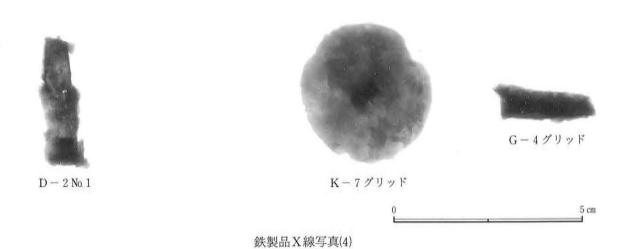




H-12住No. 2

0 5 cm





#### 発掘調査報告書抄録

ઢ	りが	な	みねしもはらにいせき
書		名	嶺·下原II遺跡
副	書	名	会計検査院安中研修所(工事検査実習施設)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻		次	
シ	リーズ	名	
シ	リーズ番	号	
編	著者	名	千田茂雄
編	集機	関	安中市教育委員会
編	集期間所在	E地	379-0192 群馬県安中市安中一丁目23-13
発	行	年	西暦1999年2月1日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	市町村	遺跡番号	北 緯。,,,,	東 経。/ ″	調査期間	調査面積	調査原因
みね しもはら に 嶺・下原 II 遺跡	あんなか し みれあざ 安中市嶺字 しもはら 下原	102113	C-15	36 19 08	138 51 14	19970401	2,000m²	会計検査院工 事検査実習施 設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
嶺·下原II遺跡	集落	平安時代	竪穴住居址13軒掘建柱状建物址3基井戸1基	土師器 須恵器 鉄製品	小鍛冶の工人 集落の可能性

# 嶺·下原II遺跡

会計検査院安中研修所(工事検査実習施設)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発 行 日 平成11年2月1日 編集・発行 安 中 市 教 育 委 員 会 群馬県安中市安中1丁目23-13

印 刷 朝日印刷工業株式会社